

奴隸と少女

煉音

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

暗く寒い牢屋で退屈な日々を過ごす少女とそんな少女を買い取った大公の娘とのお話

18指定にしておりましたが、18年末頃に外しました。過激描写が稀にあります。ご注意くださいませ。

目次

第一章 奴隸とお嬢様

緑色と金色 | 1

馬車と城（館） | 5

お風呂と陽気なコック | 11

食事とご対面 | 17

メイドの基礎 | 22

お嬢様のおもてなし | 25

お嬢様と入浴 | 33

水蒸気ってどんなときに噴くの？ | 41

白い一日 | 45

お嬢様のために…… | 49

仕返し | 57

積極性と自信が取り柄 | 62

エリーの実力 | 66

紅茶とケーキ | 70

お嬢様の視線 | 77

決戦とお勉強日和 | 84

決意と誓い | 90

第二章 メイドとお嬢様

予告 | 95

田舎娘と招待 | 99

招待1 | 104

招待2 | 108

貿易都市1 | 113

第外章

貫徹弾 1

貫徹弾 2

壁やぶれて 1



116

124

129

第一章 奴隸とお嬢様 緑色と金色

ガラガラと馬車を引く音が外で響く、もう聞きなれた音だ。

薄暗い石造りの牢屋は寒い。まあ、幸い格子のついた窓が一つだけあるのは嬉しいことだ。少しだけでも外の様子と光が入ってくれるおかげで退屈せずにすむ。

「おい」

つむりかけていた目を開けて声の方向に顔を向ける。鉄格子の向こうに剣を携えた兵士が袋片手に立っていた。ああ、もうそんな時間か。

「ほらよ」

兵士は袋から硬いパンを一個取り出すと投げ渡してくれた。ここに来てからこんな物しか食べていない。おいしいとは言えたものではないが、こんな物でも食べておかないと飢えて死んでしまう。

「……」

指に力を込めて引きちぎる。やっぱり硬いが十分にちぎれる。細かくして口に運び、ゆっくり噛んで飲み込む。ちよつと苦い。喉が渴いてしまいそうだが、水は多くないから節約して飲んでいる。あとでちよつとだけ飲もう。

私はこんな暮らしをしているが、なぜここにいるかって言われると、まあ簡単に言えば奴隸だ。もう1年になるが、私は隣の国に住んでいたのだ。そんなときこの国と戦争をしたのだ。結果からして私たちの国は負けた。王国の城下町や村は略奪や理不尽な暴力、虐殺により、みな散り散りになるところもあれば、私のように奴隸として囚われたり、ひどければ人間の尊厳を奪われた畜生のように扱われる者もいる。かわいそうとは言いたいが、いったところでなにも変わらないし変えられない。

「はあ……」

無意識に漏れたため息は後悔とか憎しみからきたわけじゃない。

私は正直今のままでいいと思ってる。きつと何かをあきらめて捨ててしまったんだと思う。

と、そんなことを考えているとまた兵士が鉄格子の前に来た。今日の仕事の時間にはまだ早いんだが……。

「……………」

「お前に客人だ」

奴隷に客なんて……ああ、そういうことか。私もついに買われるのか。どんなふうに使われるんだろう。壊れるまで慰みものにされて捨てられるのかな。それとも重労働を課せられて死ぬまで働かされるのかな。まあ、どっちにしろ早めに退屈な人生とおさらばできるならば今の変化を楽しまないといけない。どんな客なのかな。

立ち上がり、鉄格子の方に顔を上げ、見据える。コツコツとゆつくりした靴音が聞こえる。大人が立てる音にしては小さい。ビジネスに長けたその手の人かな？ だったら船にでも乗せられて船旅の慰みものか……あるいは船の重労働とかかな。船の労働は一番きついつて聞いたことがあるし。いや、それが商社みたいところで下の下で働かされるか。

たくさん考えが浮かんでるうちにその足音の正体が姿を現した。

「女の子……………」

目の前にはきれいな黄色を基調とした白いドレスを着たいかにもお嬢様な女の子がいた。真っ白なショートカットに金色の瞳をしている。顔つきはとつても気品のある立派なものなのに、その纏う雰囲気は狼のようだ。いかにも何か隠していますよといった感じ。そんな少女は私と数分変わらない体格だ。

パチツと瞬きされた狼のような瞳と目が合う。突然だったので少し目をそらしてしまった。失礼だったかな。

「望月様、この娘は昨年の戦火の中生き延びた娘でして、近辺周辺国では非常に珍しい緑色の瞳を持っています。ただ……戦火の影響で背中に非常に醜い傷痕が残っております」

兵士様は私のことをそう説明した。そうだ、私の体には戦争で負ってしまった傷がひどく残っているのだ。炎にまみれ、爆発に巻き込ま

れ、背中から少し前の腹あたりにかけて治りきれなかった皮膚の損害があるのだ。私がどこにも買われない理由だ。首にも少しだけその傷がある。

「名は翠田と言います。ここではあまり喋らない無口な娘ですが、何事にも従順な性格をしております」

軽く兵士に目を向けていた望月大公の娘は兵士の口が閉まると私に目を向けてきた。真つすぐに私を見る目は少し眠たそうだが、これが彼女なのだとわからせる。

「いくら？」

唐突にそういった。子どもっぽいが冷静な大人の女性を思わせる声音は彼女が非常に強い性格だとわからしめる。逆らえない。

「え？」

急だったのか兵士も言葉つまりにお嬢さんを見返して驚いている。そんな兵士に少しだけ怒気をさらしキツとお嬢さんはにらみつけていう。

「だからいくらなの？この子を買うわ」

「あ、えつと……少しばかりお時間を……」

そういつて兵士は懐から数枚の紙を取り出し、そのうちの一枚をお嬢さんに手渡した。

「こんなもんです」

お嬢さんは紙を一瞥し印鑑を出して軽く押し当てた。

「あとその子のサイズに合う服と靴とチーズを乗せて焼いたパンを用意して、それにつけといていいから」

私は一瞬の契約成立に目を奪われてうまく反応をできなかった。お嬢さんは私に向き直って「じゃ、またあとで会いましょ」と言っつてその場をあとにしていった。肩から肩へ弧を描くように作られたドレスはやつぱり気品が高い。おまけにさつき私に向き直ったときの軽い微笑みはなぜか惹かれるものがあつた。

「良かったな。今までずっと買い手がつかなかったのに、まさか望月大公の娘様を買われるとは、とても光栄と思えよ。ほら、出る」

兵士は私にそういつて牢屋の鍵を開けてくれた。牢屋から出るの

はいつぶりだろう。確か10日前に水浴びしたとき以来かな。どんな生活が待ってるかわからないけど、しよせん私は奴隷だ。きつとそういう扱いをされて捨てられるんだらうな。

そう考え薄暗い廊下をちよつとの期待を持って歩くのだった。

馬車と城（館）

牢屋から出てすぐに私は小さな客間に入れられた。どこの通路とも変わらない石造りの部屋で、格子の窓が一つあった。だけど牢屋よりは十分に明るい。兵士に言われるがままに椅子に座って待っていると、いくつか袋を抱えた小間使いらしき男の子が入ってきた。少し息を切らしているあたり急な用だったのだろう。

「言われたもん買ってまいりました！布のワンピースと革の靴、チーズのパンでしたね」

「ああ、ありがとう。やっぱり男の小間使いのほうが役に立つな」

男の子は軽く笑ってその袋を兵士に渡し、こちらに視線を向けてきた。そのときの男の子は目を丸くしていた。なにか珍しいかな？

「あの、兵士様、この子は？」

私を見ながら男の子は兵士に尋ねる。

「ああ、今日買われた奴隷だ。体の傷のせいでなかなか買い手がつかなかったんだが、ようやく買い手がついたんだ。お前に頼んだ服もこいつのものだ」

軽くペコツと頭を下げといた。一応私の着る服とか靴を買ってきてくれたんだからお礼的なものはしておかないといけない。男の子もなぜか慌てた様子で軽く頭を揺らすように下げた。

「そ、そうですかい……じゃ、じゃああつしはこのへんで……」

さつきと違つてなにかキョドキョドした様子の男の子は扉を開けてそそくさと出て行ってしまった。何か気になることでもあったのだろうか。

「ほら、服も届いたんだ。さつきと着替えて食料もって主人のところに行け」

「……」

軽く頷いて兵士の目の前だったが手早く着替えた。背中への傷はもう見られようがどうでもいい。ワンピースは今着ているボロボロのワンピースの新しいやつで、今より着心地は数段良い。下着は前からだけど穿いてない。座るときはワンピースの上に座るようにしてる。

靴はほんの少し大きいけど十分足を保護するにはいい。今までははいてなかったから改善はかなりだ。パンのことは触れないでとりあえず、持っていていくことにした。

着替えて軽く身なりを整え兵士に向き直ると、男の子が入ってきたドアを軽く顎で指した。

「そこを出て真つすぐ行けばすぐ出口だ。お前の主さんが待つてるからさっさといけ」

コクツと頷いて兵士に深々と一礼し、部屋を出た。

ドアを開けて通路を真つすぐ進めばすぐ太陽の光が視界に入った。もう外、本当に久しぶりに出た気がする。テカテカと暑すぎない眩しい太陽が私を照らしていた。何人も人が行き交いする通りだ。目の前に視線を向ければ影になったところに白髪の背丈も変わらない女の子がたたんずいるのが分かった。さつきも見た黄色を基調としたドレス……間違いのない私の主様だ。

スタスタと主様に歩いていくと、途中から気づいたのか主様からこちらに来てくれた。いや、私は向かっていったんだよ？主様もこっちに來ちやっただけだからね？決してさつそく失礼なことは……まあいいか。

太陽の光に照らされた主様、暗いところじゃわかりにくいけど白髪というよりは銀髪だ。さつきは暗い場所だからか強いなって思ってたけど、明るい場所で見てもその瞳の威厳は保たれている。ほんとに強い眼差しだ。

「翠田……で、いいのかしら？」

さつきと同じ静かな声が私の耳に入る。やっぱり気品がある。

「……はっ」

一瞬頷いて反応しようか迷ったけどやっぱり返事することにした。すると主様はさつきと同じ小さな微笑みを作った。一瞬ドキツとしてしまった。さつきと違って光のもとで見るこの微笑みは全然受ける印象が違ったのだ。

今度は顔をそらしてしまった。どんな顔をしてるんだろ私。

「ほら、いくわよ」

「あ、はい」

一瞬遅れて反応した私に何も言わず、主様はスタスタと歩いて行ってしまう。そのあとに私は続いたのだった。

奴隷収容施設から少し歩いたところに主様の物と思わしき馬車があった。白い塗装と金色の装飾が施された馬車に白い馬が二頭、どうやらかなり白いものが好きらしい。手綱を握る老人はかなりその手の人らしい恰好をしていた。

そして現在、私はその馬車に主様と向かい合う形で乗っている。ちなみに出発して30分ほどたった。さきほどまで周りは人がたくさん行き交っていたのに気づけば少し山沿いを走っている。どこまで行くんだろう……。

「ねえあなた」

「……？」

急に話しかけられてビクツとしてしまった。主様は少しだけ眠たそうな顔だ。

「私にどんな風に使われると思ってる？」

唐突な質問だった。眠たそうな顔をしている割にかなり物騒な質問だなと思った。行くところ行くところどこでどんな扱いを受けようとこれは私の運命、曲げれないし変えれない。それが奴隷だからだ。買われればもはやその人に運命も生末も操られるも同然なのだ。

「……」

その真つすぐな目を見つめるのがなぜか嫌になって目をそらし黙った。無意識にこれは嫌、と分別する自分がいる。さっきも言ったとおり奴隷だからと諦めているのは事実だけど、やっぱり私はまだ人間でありたいと思っている。

「はあ……それがあなたの答えね」

主様は軽く息をつくとき、そう言っただけでまた私に視線を合わせてきた。なぜかまた微笑んでいる。

「自分は買われたんだって思ってるでしょ？」

「……え？」

一瞬心でも読んだのかと焦った。ビククリして声が少し出てしま

い、慌てて口に手を当てる。だがどうやらかまかけだったようだ。クスツと笑って見せた。

「あなたは賢い。この国で奴隷になっても心を保つには壊れたフリをするしかない。故に無表情で無口を演じる。きつとあなたは気づかないうちにそんな自分を作っていたんだよ。だけど、一度目を合わしたときにわかったわ。奴隷として生きたくない気持ちだね。だから私の元に連れたの」

主様はゆっくりそういつて私の隣に移動してきた。白い肌の主様は近くで見なくてもかなりきれいだ。その目は逃がさないぞといつかのように私を釘づけにさせた。

「大丈夫。私はそんなふうには扱ったりしないから」

そういつて伸ばされた手が私の頭の上に置かれた。白い華奢な手にあたまを軽く撫でられる。無意識に目から何か熱いものが垂れる。いつぶりだろこんな感覚。そういえば1年前の自分の家の前で流したとき以来だったかな。いや、思っている感覚はまったくの別ものだ。なんだか嬉しいのだ。

「うえ……ひつく……」

頭が真つ白になりそうだ。嗚咽ばかり出てくるのになぜかとても心地いい。頭を撫でられるのってこんなに気持ちいいものなんだ。

「ふふ」

主様が小さく笑う、なぜかとても安心する。

「これ……これから……よろひく……おねがいひまふ……」

呂律が回ってない。ああ、ちよつと情けないな。

そんな馬車でのやりとりのあと目的地が見えてきたわけだが、またその目的地の建物がやたらとデカいのなんのつて、山一つあるんじゃないかってくらい豪華で巨大なもはや城だ。いや、あれは間違いなく城ですね。ハイ。

『おかえりなさいませ！お嬢様！』

何十人というメイドと使いさんが出迎えた。迫力に押されて倒れてしまいそう。主様はスタスタと私の手を引いて中へ促すが、私はその緊張みたいなのに押されてしまう。

そんな中、城（館）の入口らしい門からまだ若々しい一人のメイドが出てきた。巨大な門の両脇を囲むようにメイドたちが並ぶ中、そのメイドだけは真ん中をスタスタと歩いてこちらにやってきた。

「おかえりなさいませ、お嬢様」

「ただいま、友美、この子を私の専属メイドとして今日からここに置くから」

「メイド？」

「わかりました。では一週間で仕立てますね」

「仕立てる？」

「ええ、お願いね。名前は翠田っていうわ。基本的なこととはなんでもできるらしいからその確認とかして、あとは必要なことを身につけてあげてね。あ、あと体に訳ありだからあまり強く触れないであげて」

「わかりました。では、翠田、こちらに」

「あれ??勝手に話が……?」

気づかぬうちに専属メイドへの道が決定してしまった。まあ拒否権がないのはわかつてる。わかつてた。

そのメイドに手招きされ主様の元を離れメイドについていく。途中後ろを振り返って主様を見れば小さく手を振ってくれてた。なんだか嬉しい。

とゆか、さつきから周りの視線がちよつとばかり気になる。ワンピースから露出した傷を見てるのかな。からかわれたりしないかな。ちよつと不安だな。

「翠田、そういえば自己紹介がまだでしたね」

急に話しかけられた。前を向けばメイドさんがちよつと後ろ目に私を見ながら話しかけていた。眼鏡が似合いそうな真面目な顔つきだ。

「私の名前は友美、お嬢様……お嬢様に仕えるメイド長です」

だからメイドさんたちの真ん中を歩いてきたのか。思った通り高い位の人だった。

「あ、あの私は専属メイドって……」

「ええ、お嬢様の一番近くでお仕えるメイドです。基本はお嬢様の

お世話と護衛が仕事です」

「ご、護衛？まあ、主ともなればそら命の危険にさらされる可能性だつてあるか……。いろいろと忙しいんだな地位のある人々も、そう思つたらなぜ今日私のところには一人で来たのだろう。ある意味すごい気がする。それとも私が気づかなかつただけで護衛する人が近くにいたのだろうか。」

「ところで今から私はどこに行くのでしょうか」

「まずはメイドの基本を学んでもらいます。そのあと少し日にちをかけて専属メイドとしてこの館での仕事を覚えてもらいます」

まあ、当たり前つちや当たり前前か。やっぱりメイドつて結構厳しいのかな。とゆか、やっぱり館なんだ。城にしか見えないんですが。」

「わかりました。どうかよろしくお願いします」

「ええ、こちらこそよろしくね。思つたより愛想もいいし、きつとすぐ慣れるわ」

さつき馬車でお嬢様にうまく打ち砕かれたおかげで元の性格が出てきているのかもしれない。やっぱりあのお嬢様とつてもすごい人じゃないのかな。

ま、私の行き先も決定したし、今を楽しもう。

お風呂と陽気なコック

チャップンと小さな音を立て湯につかった。これでもかというくらい柔らかいタオルと泡で体を擦り汚れを落とした。水浴び程度じゃ落ちない垢がボロボロと落ちたのはとてもが気持ちよかった。そのせいか黒ずんでいた肌がきれいな白ピンクになった。まあ、体中にある戦火の傷はやっぱり落ちるものではなが……まあ触り心地は普通の肌といたって変わらないところまで治ったので、見た目がちよつとグロテスクっていうか。うん、よくわからない状態だ。

「……」

広い風呂場にはいくつもの湯場があり、その中央の湯につかった。四角形の大きな湯場で、ちよつと熱い程度の湯加減だ。肩までつかり軽く泡をプクプクと立てる。

先ほどメイド長さんに館の中に連れられ、まず体を清潔にすることを言われたのだ。まあ、当たり前か。と言うか汚れた姿のままお嬢様に触らせてしまったのは少し罪悪感を感じる。

そういえば今日の予定を軽く説明された。まずはここで汚れを落とし、次に昼食があるみたいだ。そこからはメイドとしての1から10を教えられるそうだ。やっぱりメイドの仕事ってお茶運んだりとか掃除したりとかそんなことなのかな。戦争が起きる前は家庭の事情もあって、いろんなところで働いていたからだいたいのはできるつもりなのだが、はてさてうまくできるかな。

「ふう……」

湯から出てペチペチと濡れた足音を立てながら浴場を後にした。

脱衣場に出るとメイド長さんが何か服をもって立っていた。広い脱衣場には籠が入ったロッカーの列が何個も何個も……ほんとうに一気にこんなを使うのだろうか。疑問だ。

「あら、もういいの？」

メイド長さんはそう言ってバスタオルを渡してくれた。受け取り髪をゴシゴシと拭いていく。微妙な長さの自分の髪はあまり好きじゃない。

「はい」

軽くそう返事を返し、次に体をしつかり拭いた。牢屋暮らしもあって自分の体はかなり痩せている。おまけにまだまだ子供、恥ずかしがるものもないのでさっさとメイドの勉強でもしたい。

「わかったわ。それにしても、あなたお嬢様と同じ年頃に見えるけど、お嬢様ほど豊かではないのね」

「奴隷ですからね」

「そうでしたね。しかし、あなたはこれからはこのメイドだから、奴隷ではないわ」

メイド長はそう言いながら、両端の左右に二本ずつ紐のついた下着と胸まきのようなものとお揃いのメイド服を渡してくれた。この手の下着は久しぶりだ。あとなんだこの包帯みたいな胸まきは……まあないよりはましか。メイド服は黒がほとんどで黄色い線のような刺繍が施されている。エプロンとは別らしい。まあ洗濯とかはしやすそうだ。靴は一つストラップみたいなものがついたなめした革の黒い靴だ。よく想像する白いカチューシャはなかった。代わりに黄色い刺繍がいくつかされた白いリボンを渡された。髪に結び付けて使えって言われた。あと、なぜか半分リボンと間違えそうな首巻をもらった。そういえば他のメイドさんもなんか巻いていたな。ほとんど首輪みたいになるけどまあいいか。それもつけることになった。……」

鏡を見る。茶色の揃わない髪を後ろでポニーテールにした顔と目が合う。相変わらずの緑色の瞳はどこか遠くを見るような目だ。首に巻かれた白い黄色の線が二本入った白いリボン（首巻）にところどころ黄色の線が入ったエプロンをつけた黒いメイド服、白い靴下と黒い靴だ。小さいメイドがここに一つ完成した。メイド長と何が違うかというと、つけている頭飾りとエプロンだ。私は上半身分もあるエプロンで、メイド長はヒラヒラと綻び止めの入った腰に巻いたエプロンだ。あとところどころ違うが、細かいことは気にしないでおう。あともう一つ、メイド服は二の腕分までしかないのだが、その右腕の胸よりのところに小さな紋章の入ったボタンらしきものがついてい

る。おそらくメイド長の証だろう。

「似合ってるわ。さっそくお昼を食べに行きましょうか」

「あ、ありがとうございます。はい」

メイド長が急に鏡に割り込んできてビックリした。思ってたより見とれてた。

↓

食堂らしいところに来た。さっきも言ったがとにかく広い。天井からぶら下がっているシャンデリアがひーふーみー……たくさんあります。二階席もあり、そこからテラスまでもある。厨房らしいところには数人のコック姿の人がいる。おいしそうな匂いがこちらまで匂っている。胡椒に山椒までいろいろなおいがする。

「あ、メイド長、お早い食事ですか?」

厨房付近に来るとコックさんの一人がこちらに気づいて声をかけてきた。私より少し年上らしい顔つき、ちょうどよい嫁入り前の女の子って感じ。元気そうな顔は裏表なさそうだ。

「ええ、この子の教育前に先にお腹を満たしておこうかなってね」

「お?新入りですか?」

コック姿の女の子は元気そうな瞳を私に移してまじまじと見つめてきた。

「あ、あの……」

「可愛いですね」

「っ?!……」

急にかわいいといわれて少し顔が熱くなる。あれ?こんなキャラだったっけ?

「赤くなりましたね。本当にかわいいですね」

「はいはい、いじめないであげて、これでもこの子はお嬢様直々に専属メイドに指名されたのよ。あなたより断然上司よ」

「えーマジですかあ……頑張ってるね」

「は、はい」

そういわれて軽く頭を下げる。結構陽気な人が多いのかな。それなら嬉しいな。

「ところで、今日は何にします？本日のセットメニューは料理長の気まぐれセット、あとはこの私、船見の推奨セットですよ？あとは定番のセットぐらいですかね。ちなみに船見の推奨セットは中華系の料理が中心で、健康的かつ栄養バランスの取れたスタミナ料理ですよ！」

やたらと自分のセットを押しってくる船見さん。メイド長は少し考えるそぶりを見せたが、その様子からしてすでに決まっていたようだ。

「船見のセット二つでお願いしますよ」

「あいよー！」

元気よく返事を返して厨房に引っ込んでいった。数人いるコックも指示を受けて料理にかかりはじめた。

「すまないな。船見は悪いやつじゃないんだが、前からかわいいものには目がなくてな。おまけにちよつといじり癖が強い」

「いえいえ、友達感覚だときつと親しみやすい性格ですよ。船見さん」
正直な感想だ。船見さんはきつと友達の多い性格だと思う。おまけに料理もできるようだし。もし町娘なら最強だと思うな。

「二応説明しておくよ。この食堂はこの館に従事する人専用の食事処だ。館の権力と財力を駆使して、国内の料理から外国の民族料理までほとんどの料理を食べれる場所よ。私たちはこの館で仕えるけど、給料として金銭をもらわないわ。かわりに衣食住すべてがそろって得られるわ。だからここでの食事では金銭のやりとりはしない」

「面白い構造ですね」

ちよつと難しいかもしれない。つまり言いたいことは、私たちはこの館に衣食住の面倒を見てもらうかわりに労働力を提供しているということだ。奴隷的な考え方をするとかなり充実した空間での生活だからもう望むこともないくらいだ。

「あら？もう理解したの？やっぱり結構賢いのね」

私からすればかなりふつうなことだから褒められてもあれなんだがな……。だったら一つ疑問になりそうだな。どうやってその資金を稼いでいるのだろう。考えられるのはメイドの仕事のいくつかは

稼ぐための仕事となる可能性だ。どんな仕事をするのだろうか。

「質問いいですか？」

メイド長は厨房に向けていた目を私に向けて「何かしら？」と言つてくれた。

「どうやってこの運営の資金を稼いでいるのですか？ 私たちがお嬢様のお世話を保持するだけなら、きっと大公様の出費は赤字になりますよね？ お屋敷の人員の量も見ているかぎり、やっぱり稼ぐための仕事をしているふうに見えるのですが……」

「なかなか経済に興味があるようね。うん、そうね。お嬢様に仕えるだけじゃ赤字ですぐ破産しちゃうでしょうね。だからあなたの考え通りそういう仕事があるわ。でも重労働じゃないわ。むしろ机に座って書面を見てときにちよつと出かけるだけでいいものばかりだわ。安心してこの人たちはみんな奴隷のような扱いはさせられない」

予想通りだ。まあ別に気にするほどのものでもなかったな。

「まあ、その辺のことはメイドの基礎としてすべて教えるから安心してなさい」

「はい」

そう返事すると、良いにおいがするとともにカタツと音を立てて、お盆がおかれた。お盆の上には良いにおいにするスープや醤油の香りがするご飯、何か薄い皮で包まれた料理があった。どれもこれもおいしいそうだ。

「お待たせしましたあー！ 船見の推奨セット二つです！」

「ん、ありがとう船見。さ、翠田、行こうか」

「はい」

そのたくさん料理の乗ったお盆を持つとメイド長は後ろのテーブル席のほうに歩いて行つた。もちろんついていくのだが、「ちよつとまって」と船見さんに呼び止められた。

「どうしましたか？」

船見さんはニコツと可愛らしい笑顔で「サービスだよ」って言って、小さい蒸籠を一個お盆に乗せてくれた。中には何かしわの目立つ白

い皮の料理が4つほど入ってた。

「あ、ありがとうございます」

船見さんは少し照れるように笑ってくれた。

「頑張ってね」

とっても嬉しそうだった。

そんなやりとりをしたあと、メイド長のもとに歩いていくのだった。

食事とご対面

船見さんにお礼を言ってメイド長の正面に座った。

「それじゃ、いただきますしようか」

「は、はいー」

つい声をあげて返事してしまった。さきほどから鼻をノックアウトするレベルで、おいしい匂いがたたいているのだ。いやでもそっちに気を取られてしまう。

「い、いただきます」

「はい、いただきます」

メイド長も後に続いて挨拶をする。まずはスープで口を湿らそうか。いや、さて。こんな料理でもテーブルマナーみたいなものがあるんじゃないか？大公様のお屋敷なのだから……。

「……」

そう思つてメイド長を見る。背筋をピンと伸ばして優雅にお食事されていることくらいしか目を引くものはない。たしかにナイフを右手にフォークを左手で食べているが……イマイチわからん。ええい！適当に食べて注意されたら直していこう！

まずスプーンを手にとった。良いお肉の香りのするスープを掬つて口に運ぶ。やばい、香りだけで味がわかりそうだ。

「……!?」

できるだけ音を立てないようにして口にスープをふくんだ。何とも言えないたくさん味の味が口の中で踊る。今までにこんなスープ飲んだことない。美味しい。

「面白い顔をするのね」

「はっ!?」

あまりにも美味しすぎて意識が飛んだ。無意識に右手を頬に添えてしまっている。

「お嬢様があなたのような人たちを連れて帰ってくると、決まってそういう顔をするのよね。まあ、私としては毎回そういう反応をするあなた達が楽しくてたまらないだけだね」

そういつてメイド長は笑ってくれた。ああ、なんかすこし恥ずかしい。それより気になった。

「私のほかにもそのような人が？」

メイド長は「そうね」と言っ言葉が続けてくれる。軽くフオークでお肉をちよいちよいといじりながらだが。

「この館に仕えるメイドと召使いはほとんどそんな人たちよ。ひどい扱いをされていた人もたくさんいるわ……」

急にメイド長は少し寂しげな顔をして料理に目を落とした。ちよつといけないことを聞いてしまった気がする。

「なんかすいません。私のような人たちばかりとは知らずに……」

「いえ、いいのよ。いずれ知ることになっていたわ。それに、みんな似た者同士ってわかったでしょ？心配しないでいいよ。ここでは誰もあなたをそういう人って言わないし見ない、思いもしない。だから安心してここで暮らすといいわ」

顔を上げたメイド長は笑顔で、大人っぽさを感じた。いや大人なのだが……それ以上に何か割り切りのついた綺麗な大人の笑顔だった。

そのあとの食事もちろん楽しんだ。白い皮の柔らかいモチモチしたお肉詰めは肉まんっていうらしい。中から肉汁があふれ出してくて、その濃い味と柔らかいパンのような皮を一緒にほおぼるのだ。美味しかった。しょうゆの味がきいたご飯はパラパラと固まることなく面白い感触だった。

初めての料理に目を丸くしたりボヘエーつと意識が飛んで行ったり大変だったが、なんとか食事を済ませ今はなぜかお嬢様のいるお部屋に来ている。

広めにできている四角い白と赤っぽい色が主な部屋だ。端っこには大きなベッドが置いてあり、その隣に小さめの丸テーブルと椅子が置いてある。あと窓際にちよつとだけ豪華な柔らかそうな椅子があり、そこに太陽の光が差し込んでいる。

そんな太陽の下の椅子に、輝くばかりの銀色の髪をした雪のように白い肌の少女が座っている。外を眺めているのか顔が見えない。窓に金色の瞳が一点を見つめているのが少しばかりだが見える。

「お嬢様、翠田を連れてまいりました」

そんなメイド長の声を聞いてか聞かずか。窓に映った金色の瞳がゆっくりと動き、今度は直接こちらにその瞳が向いた。ようやく見えたと顔は幼さこそ残るが、どこまでも見えているような表情だ。そんな表情が少し微笑み、口が小さく動く。

「ええ、ありがとう」

そのへんの貴族の子息でもイチコロかもしれない。馬車の中じゃ落ち着いて見れなかったお嬢様の顔もよく見ると本当にすごいものがある。

「翠田、また後で向かいに来ますね。では、お嬢様、またのちほど」

両手を前で揃えて失礼のないように一礼したメイド長はスタスタと部屋を出ていってしまった。え？うそでしょ？私とお嬢様二人きり？まだメイドの1ですら教えてもらってないんですけどー！！！！

どうにか表情にでないように「はい」と返事を返しておいた。

ボタンとドアが閉まり、静寂が訪れる。なにこの間、すっごい気まぐずいんですが。とゆかめつちやお嬢様見てるんだけど、やばい、あの笑顔をまた作られたら今度こそ死ぬかもしれない。

「……」 ジイー

「……」

「……」 ジイー

「……」

めつちや見つめられてるんですけど……とゆかなんで見つめられてるんだらう。金色の瞳がすっごく狼っぽくて何も言えなくなつて固まってしまう。

「ふふ」

「……っ？」

お嬢様はふつと微笑んで急に立ち上がった。コツコツと小さな足音を立ててこちらに近づいてきた。朝まで眠たそうだった顔もパツチリ目が開いて可愛らしくなっている。

「緊張しないでいいよ」

ふと伸ばされた手が私の頬をなげる。アレ？なんか目線が少しだ

け下に……。

「目立つ傷とかはなさそうだね」

私の目の前まで来たお嬢様は、私の左の頬を軽くなぜながら微笑んでそういつてきた。金色の瞳が少しだけ細められ嬉しそうにしている……気がする。

「そ、そうですか……」

「それより……なんで私より身長高いのさ」

そうだ。さつきから感じていた違和感、私より目線が低いのだ。真正面から真つすぐに視線を合わせなかったからさつきまでは気づかなかった。それにお嬢様少し怒ってるっぽい。つかめない人だなあ。

「そ、そんなこと言われても……」

「ふふ、冗談だよ」

また笑顔に戻って今度は私の頬をプニプニと軽くつまんできた。なんだかこそばゆい。

「それにい……メイド服は似合ってるしとっても美人だね」
「!？」

急にそんなことを言われて顔が熱くなる。無意識に目線が逸れてしまう。なんだか照れるな。

「あらら、さつきよりも素直になっちゃって可愛い。私のメイドなんだから自信持っていていいんだからね。過去のことは忘れて、今を楽しみなさい？」

視線を戻して優しく微笑んでくれるお嬢様に笑顔を返した。

「はい、ありがとうございます」

「そうそう、それでいいのよ」

うんうんとお嬢様は頷いて踵を返した。今度はベッドの前にある小さめの木の椅子に腰を預けて私を見据える。

「そういえば名前を聞いてないね。聞かせてくれる？」

「は、はい。琴香といいます」

「琴香……うん、ありがと。これからはその名前で呼ばせてもらうね」
「はい」

手をお腹の前らへんで軽く組んだ状態ってあまり慣れないな。す

ぐ手をほどこいてしまいそうだ。

「琴香、これからは難しいこともわからないこともたくさんあると思うけど、頑張つてね」

お嬢様はテーブルの上のカップをとって軽く口をつける。優しい紅茶の匂いを漂わせて、軽く口に含んだようだ。口から離れたあとも上品にゆつくりとカップを置いた。いかにもお嬢様って感じなのに、なにか別の性格さえ感じられる。

「はい、まだ右も左もわかりませんが、必死にメイドとして頑張らせていただきます」

またお嬢様はうんうんと頷いて軽く手を叩いた。

後ろの扉が少し開き、メイド長が顔をのぞかせる。とゆかずつとそこにいたのか。迎えに来るって言ってなかったっけ？

「お済みでしょうか？お嬢様」

「聞いてたんでしょ？あとはよろしくね」

お嬢様は両掌を軽く絡ませて、微笑みながらメイド長に言った。

「かしこまりました。では、翠田、こちらに」

「あ、はい」

メイド長の後を追って部屋を出る。一度振り返り深く一礼する。お嬢様がフリフリと手を振ってくれた。やっぱりなぜか嬉しい。

カチャツとドアを閉め、メイド長の後に続いた。

館は広い、覚えることもたくさんある。難しいこともやりにくいこともあるだろうけど、私はここで頑張っていこうと思う。とくになんだかお嬢様がすつごく気になるし。それとお嬢様の名前ってなんて言うんだろう。気になるな。また聞いてみようか。

よし、気合入れてこー！

メイドの基礎

「すでにメイド長からお聞きになったと思いますが、このお屋敷に仕えているメイドや使用人の大部分は元奴隷や戦火の難民です。お嬢様のお厚い心で今を生きています」

なんか宗教じみた教え方をされているけどこれが基礎らしい。たぶんこの館で住むことの基礎だろう。まあ、間違っていないし私としてもとても良い心構えだと思う。

「メイドとしてしつかり身の回りは綺麗にし、常にお嬢様を思うことを忘れなければ十分に良いメイドです。いいですか？このお屋敷に仕えるにあたって決してお嬢様をお忘れになってはいけませんよ」

目の前の変わった帽子を被っているメイドはそう言つて軽く黒板を叩いた。熱心に上手な講義をしてくれてとてもわかりやすい。

「あなたは基本的な接待業と奉公業をある程度熟知しているようなのでここは省きますね」

まあ、私はここに来る前いろんなところで働いたからね。飲食店にホテルとか接客が基本だったので、おのずと社会的な人との接し方を覚えたのだ。さて、次は気になるこの館の資金繰りとかについてだ。

「さて次は、あなたがとても興味のあるらしい分野ですね。メイド長から聞いてますよ？経済的な方に頭が回る娘だと」

なんとという伝え方だ。誰が娘だ。一応これでも独り立ちする程度には十分な年頃なのだが。

「そんな怖い顔しないでください。ただの冗談です」

メイド教師は笑ってそういった。早く教えてほしい。

「このお屋敷は基本的にメイドや使用人が様々な分野で稼ぎをします。行商業に金銀の売買業、投資業、配下に行っているサービス業、最近発足したばかりの錬金術業などあります。まだまだ細かいものもあります、これくらいにしておきましょう」

待て待て、錬金術業ってなんだ。てゆうか錬金術？あのだだの鉄とかを金に変えるっていうやつか？面白いものもあるんだな。

「あ、その前にこの屋敷の階級みたいなのを教えます。基本的には仕

える人たち全員は同じ地位ですが一応建前なのでお気になさらず。稼ぎに出る者が中流で、基本的な屋敷の家事をこなす人達は下流、そしてそれらの統括者らは全て上流になります。専属メイドはお嬢様に直接お仕えするという点において上流になります。メイド長は様々な分野において大変優秀な成績をおさめ、かつお嬢様が認定したもののみがなれます。現在、友美さん一人しかいません。」

メイド長は超人でしたかすごいですね。とゆか私まだ今日来たばかりなのにさっそく上流階級って……やばいな緊張する。

「このへんまでは理解できたかな？」

「はい」

「よし、次はメイドの仕事について教えていきますね」

13時間後

「通常のメイドとしてはこれくらいですね」

「は、はあ……」

かなり疲れた。基本的な家事全般や屋敷での在り方などなど、疲れまくらいたくさんの業務と仕事を教えられた。戦闘についても教えられたけど、それはまた後で……。

「では次に専属メイドについて教えますね」

てゆうかさつきから書物も見ずにこれら全てを教えてくれている彼女のほうが超人な気がする。何者ですかこの人。あ、紹介してなかったですね。さつきから私を指導・教育してくれているメイド教師さんはユフィという名前のメイドです。綺麗な褐色の肌に黒いショートカットのスリムな女性だ。可愛いより格好いい顔つきで黒い瞳、そばにいれば結構頼りになる印象がある。

「メイド長に代わってもう一度説明しますが、専属メイドはこの屋敷一番お嬢様に近い位置でお世話をするメイドです。現在、専属メイドはあなたを含め5人の専属メイドが仕えております。お嬢様のおはようからおはようまで護衛しお世話することが仕事です」

今しがた意味不明なことをいわれた気がしたのだが聞き間違いだろうか。仕方ない不満そうな顔でもしてやろう。

「冗談だつてば、仕事はお嬢様の起床から次の朝の起床まで護衛しお

世話することです」

あ、変わらないんだ。

「まあ、5人もいるわけだから、一人以上がお嬢様についていればいいのです。みなさんでしっかり分担することが専属メイドの仕事になります」

お嬢様をしっかりと分担して護衛・お世話するのか。頑張ろう。

「まあ、それ以外の時間はその他の業務につくことが義務なので、業務については担当のメイドにお聞いてください。まあ難しいものは少ないのでなんでもチャレンジしてくださいね。それでは、次は専属メイドの応用まで全て教えていきますので、覚悟してくださいね」

あ、やつぱりそうでしたか。そしてそのときに見た笑顔ほど何も思わなかったものはなかった。

お嬢様のおもてなし

「以上です」

「ふあああああ……」

超ロングな説明がようやく終わり机に突っ伏した。専属メイドの話が終わったと思ったら逃がさないとばかりに戦闘のことについて教えられた。豊富な戦闘技法から戦闘精神まで教えられた。

常にお嬢様を守ることに努め、決してこちらから攻撃することは許さない。そういう掟らしい。ちなみに攻撃されたからと攻撃し返す報復戦法ではなく、基本的には状況時の目の前のターゲットを無力化するまでを戦闘とする防衛戦法だ。そしてこの戦闘というのは実際の素手や武器による攻撃を指し、経済的商業的な資源財産を圧迫する攻撃ではない。例え相手がわかっていたとしてもそれに対する防衛は禁止らしい。

「おっと、すまないな。数日かけることを先に全て話してしまったな。ちなみにこれからの6日間はほとんど実技教育になるから頑張るってな」

そういつてメイド教師のユフイさんは先に出て行ってしまった。ある意味嵐のような人だった。てゆうかなんだ実技って、まさか戦闘訓練とか。いや、さつき戦闘について学んでもらうって言われたからそれしかないだろう。戦えるかな？

「ふう」

軽く息をついた。さつきの続きの話だけど、戦闘術とかについて説明しておきます。

戦闘方法は豊富って言った通り、様々な戦術技法から戦術方法がある。剣術、槍棒術、拳法術、銃術、魔法術、機械術、錬金術、その他かetc……本当に豊富だ。ちなみにこの全ての分野で段ていうか戦績的結果を積むことにより、さらに上の技を学んだり、追加の術を学んだりできる。非常に複雑な過程だが、確かな技術と経験を積めるようなシステムになっている。ちなみに言わなかったが、まず専属メイドが学ばなければいけないのはメイド戦術だ。これは全てのメイ

ドが入った時点で学ぶものだ。ちなみに私はこのメイド戦術を全部マスターしなければならぬ。それが義務らしい。

どんな戦術か残念ながら私はまだ知りません。それにメイド長が最強らしいからきつと難しい技なのかもしれない。

カチャツと音がし振り向いた。お嬢様がいた。なぜここに……桃色が基調となった白の服を着ている。金色の瞳がちよつとだけ細められ表情が笑顔に変わる。と思ったが微笑みに変わったただけでした。「今日のお勉強は終わりだね？」

「あ、は、はい！」

はい、唐突に来られました。が私の主様です。焦って立ち上がったせいで椅子が倒れて大きな音を立てる。さっそくやらかした……。

「す、すみません」

「ふふ、焦らなくていいよ」

急いで椅子を立て直して足を揃え、手を前のほうに置く。背筋も伸ばし、ちゃんと真つすぐお嬢様を見た。

「さ、初めのお仕事だよお？」

わざと語尾を伸ばしてお嬢様はそう言い、クルツと後ろを向いて後ろ目に「いこ？」と言ってきた。やばい、イチコロどころかオーバーキルしそうだ。アレ？というかあと4人専属メイドがいるんじゃない……まあいいか行こう。

グーつと音が鳴った。無意識にお腹を抑えてしまう。恥ずかしい。それより今は6時くらいでいいくらいに外が赤くなっている時間だ。

「ふふふ」

お嬢様が軽く笑うのが聞こえた。ううう聞かれたあ……。そんなことを思いながらトボトボとお嬢様についていくのだった。

↓

コツコツとお嬢様の後ろをついていく。もちろんお嬢様の斜めに位置するところだが……同じ速度で足音をずらさずに。

「ぎげんよう」

お嬢様がそう言って廊下の端々に軽く頭を下げてお嬢様に挨拶をするメイドに、お嬢様は一人一人しっかりと挨拶されている。メイドた

ちはお嬢様が見えた時点ですでに足を揃えて頭を下げるのだ。かなり慕われているのは分かってたけどここまでとは……思いもしなかった。

そんなかなり気まずい廊下を抜けついた先、つい6時間前くらいに食事を食べた場所、メイド長曰く、館に仕える人専用の食堂らしい。アレ？待って、お嬢様って確か別で食事をとらせているってさっきユフィさんが……大丈夫なのかこれ。私嫌な予感しかしないんだけど。

「あ、あのお嬢様……ここは食堂なのですが……」

「あら？この屋敷の主である私が、どこで食事をとろうと勝手じゃないかしら？」

立ち止まってゆっくり振り向きながらそう言われた。しつかり話す対象に視線を外さないところも慕われる理由だろう。すごい完璧すぎる……気がする。

「そ、そうですが……お嬢様の安全のためにも……」

「ささ、行こ行こー」

「あつーちよ、おじよ、お嬢様ー！」

急にパツと手をとられ引つ張られる。ただのメイドなのにこんなにお嬢様に触れていいのかな。やばい、すでに食事をしているメイドたちも手を止めてこっちを見るし、緊張どころか鳥肌とか立ってきているし!?

引つ張られるままに厨房前まで来ると船見さんがいた。

「お嬢様、本日は何になさいますか？」

お嬢様は私の手を離し、軽く両手をポンと叩き合わせて言う。

「ごきげんよう船見さん、今日は新しいメイドさんが来たので軽くやっってくださいな」

「言われると思つてすでに用意しております」

え？まじですか？

「うんうん、じゃあ今日の主役を案内してあげてね」

「かしこまりました。お嬢様」

船見さんはお嬢様に軽くお辞儀してこちらに歩いてきた。その間お嬢様はスタスタとどこかに歩いて行ってしまった。

「また会ったね。じゃ、こつち来て」

あれ？あらら？私の最初のお仕事はー!?てか、待つて主役？今の感じからしてどう見ても主役ですよね!?待つて待つて!?
ああああー……。

ー

シャンデリアの明かりも消え、巨大な空間は真っ暗だ。ていうか待つて、シャンデリアといえど蠟燭の明かりだよな？あんなに明るいかふつう……部屋の端の端の隅まで照らせる明かりつてなんなんだろう。そういえば魔法術もあるつて言つてたつけ？その一端なのか。またいつか勉強がてら習つてみようかな。専属メイドでも学ばせてもらえるみたいだし。

「ね、琴香ちゃん」

「な、なんですか？船見さん」

真っ暗な中いきなり船見さんに耳元で囁かれビクツとしてしまった。

「食べたいものあつたらなんでも言つてね」

「あ、ありがとうございます」

船見さん本当に料理好きなんだと思ひながら目が慣れるのを待つ。

「ひゃ!?!」

急に目に強烈な光が入つてきてチカチカしてしまう。目が目がああー!

「ごめんね琴香ちゃん、もうすぐだから……」

ううううう船見さんの仕業か……。

「ううううう目があ……」

スススつとたくさんの衣擦れの音が聞こえる。四方八方至るところからも聞こえる。私に来る前からメイドとか使用人がいっぱいいたからきつと移動してらんだらう。

パチンツ

大きな音ともに光がツパツパツパつとついた。

「……ツ!?!」

四方八方に埋め尽くすほどの数のメイドや使用人がいた。そして

今ごろ気づいたけど私はその中心にいて、一段高いところにいるのだ。いやでも注目がこちらに来る。四方八方からの無数の視線が来て一瞬で顔が熱くなる。前からそうなのだが……私の苦手な部分は視線を浴びることなのだ。

その瞬間か、周りのみんなが急にザワザワとなりだした。

「あ、可愛い」「赤くなってる赤くなってる」「好みかも」「k t k r」
いやなくらい集中力がまし、小さなザワザワとした声ですら聞きとってしまう自分がいた。

「はーい、お静かにー!」

そんなとき聞き覚えのある声が響き渡った。2階席の方にメイド長と等間隔に並んだメイド4人、そして発声主であるお嬢様がいた。そんなお嬢様の前には一人大きな本を持ったメイドさんがいる。よく見ればお嬢様の口元に小さな魔法陣らしき円が出現している。

私の故郷では魔法はあまり普及していなかったが、見たことくらいはある。ほとんどの魔法は目に見える状態で円形の魔法陣として出現し、その上で効果や力が発揮されるのだ。

「さてみなさん、毎回恒例でお分かりだと思いますが、今日から仲間になりました。翠田琴香さんなのですよ。みなさん、仲良くしてあげてくださいいね!じゃ、楽しみましょう!」

お嬢様がそういつてゆっくりと透明のグラスを持ち上げる。よく見ると何か液体が入ってるようだが……なんだろうアレ、まさかお酒か?
?

「ではみなさん、新しい出会いに乾杯!!」

『乾杯!!』

すっごい迫力だ。よろめきそうになるのを抑えて、渡されたグラスを掲げた。

「ねえ、君どこから来たの?」「きれいな髪だねー」「緑の瞳!美しい!」

一気に質問攻めされる。受け答えどころか喋るのもままならない。四方八方女性ばかりで、ところどころ男性も顔を見せている。なんだこの状況、初めてすぎて胸が破裂しそうだ。誰だ貧乳のくせにつつたやつ。無乳つて言いやがれ。

「あ、あのですね……」

「おっほー！この子が新しい専属メイドか！」

受け答えに専念しようとした瞬間、目の前に4人のメイドがすつと現れてきた。異様に目立つように登場したため目についてしまった。あれ？お嬢様の後ろにいた4人じゃないか？そして、その真ん中の一人が口を開いたとともに、一番左の人が一瞬で消えた。

「ひゃっ!？」

急に胸に異様な感触を覚えてその腕をつかんだ。

「おろろー……今回の子は全くないよお……」

「わ、悪かったですね！」

バツと無理やり後ろを向けばさつき一瞬で目の前から消えた女性のメイドだ。顔をよく見れば意地悪そうな笑みを浮かべていた。よく似合う女の子だ。あれ？よく見れば私より身長が低い。でも私の肩に顎を乗せられる程度にはあるみたいだ。

「ごらごら、新人をいじめちゃだめよ？エリー」

「はい」

エリーと呼ばれた女の子は元気な声で返事して、風が通ったかのような音がしました正面に移動した。瞬間移動なのかすごい能力を持っている子だ。

「翠田琴香さん。初めまして、私たちはお嬢様の専属メイドの者です。

私の名前はソフィ、よろしくね」

真ん中左手の女性、おそらく専属メイドのリーダーらしい。金髪の短い髪と高い身長が特徴だ。かっこいい顔つきでスタイルもすつごく、動きやすそうでたくましい。

「さつきはごめんねー」テヘペロ☆

怒ってはいないが、わざと胸あたりを抱きしめて体をひねってやった。

「ううう……ごめんってばあ……あ、私の名前はエリーね」ニコニコ悲しがる顔を見たかったのにずっとニコニコしてる。なんか負けた気がするのなぜだろう。ちなみに彼女は黒い髪に真っ黒な瞳の持ち主だ。

「次は私ですね」

真ん中右手の女性が一步踏み出て口を開いた。

「桐ヶ丘冬実といえます。よろしくね」

冷静そうな静かな感じの女性は少しだけ茶髪の長髪女性だ。身長も私より高い。顔つきも落ち着きのある顔立ちで、そばにいるとなんか安心する印象を持てる。

軽くペコツとあたまを下げた。

最後の一人は一番右手の子だ。私より少し身長が高いくらいの子で、漆黒なまでに真つ黒な瞳と真つ黒な髪だ。可愛らしいレベルの短さの髪に全体的に他の女性より小柄で、女性としてはなんかいろいろ部分でかなう気がしない。しかもなんかちよつとオドオドしてるし。何この子。

「ほら、早く挨拶しなさい。私はあんたの母親か」

ソフィさんがその子を促す。もじもじと顔を赤らめだしてしまっただではないか。何この生物可愛い！お嬢様の笑顔には負けると思うけど。

「あ、えつと……」

「相変わらずだねーみっちゃちゃん。初めての同期だからって緊張しすぎだよー」

「あう……」

エリーさんがまた瞬間移動して女の子をつついた。それによって女の子が声を漏らしている。やばい可愛すぎて顔がにやけそう。がんばって顔には出ないようにしてる。

「ほら、ちゃんと挨拶して」スツ

「ふえ？うわ!?」バスツ

またすごい勢いで瞬間移動してエリーさんが女の子を私の前に移動させる。まさかの他人まで使える技なのかそれ……卑怯じゃね？てかそれまじでしょ……神出鬼没だし。

「あ、ちよつエリー……あう……」

「……」

苦笑いになつてるだろうなあ……きつと。エリーさんを追いかけ

て一瞬後ろを向きかけた女の子は私が目の前にいることを思い出してか、一瞬でためらってまたこちらに向いた。

「あー……うにゆうう……あうううう」

さつきよりも真っ赤になった女の子は何とも言えない声を出している。そして軽くペチペチと頬を叩いて首を振った。

「あ、あの私は……」

やっとしゃべりだしてくれたあの何分この尺とるつもりだろうか。あ、意地悪しちやいけないよね。ごめんね。そのまま黙って聞くことにする。

「私は、萩本未希って言います……。あ、あなたと同じ年だから……。あ、えつと……。なんでも聞いてくださいね……」

「はい、よくできました」

未希ちゃんが言い終わつたと同時にソフィさんがそう言つて未希ちゃんの頭を撫でた。

「じゃ、これからよろしくね」

「あ、はい。こちらこそよろしくお願いします」

そう言つて深々と頭を下げた。

それからの夜は非常に忙しかった。てゆうか眠たかった。主催者のお嬢様が見守る中、酒に酔って痴態をさらす人もいれば気が高ぶつて魔法を暴走させる人もいた。そのたびに統率権を持ったメイドの人たちが圧倒的な力でねじふせていた。

お嬢様、毎回つて言つてましたけどこんなことが毎回つてやばいですね。そのあとはみんな片づけとかで結局深夜まで眠れない人もいたようだ。私は早めにお休みをいただいた。

それとお嬢様に最後に「じゃあ、これからよろしくね。琴香」つて言われてしまった。そのときの私も気持ちが高ぶっていたのかとても嬉しかった。

お嬢様と入浴

「えー、まずはじめに……」

テカテカと太陽の光が見下ろす巨大な中庭に今私はいる。周辺にはかなりの人数のメイドさんとか使用人さんがいる。そして一つ段の高いところで講義をしているメイド教官はナミという人だ。メイド戦術のマスター習得者だ。

それよりも……今日の朝は非常に大変だった。専属メイド専用の部屋で寝ていたのに、目が覚めて隣を見ればお嬢様が入り込んでいたり、お嬢様ばかり見ていたせいで階段から足を外したりいろいろしかしてしまった。

布団に入り込まれていたのは本当にビックリした。そのせいでベッドから落ちて全身強打するわ不幸続きだ。

一応メイド戦術についての基礎をさつき習ったから教えておきます。メイド戦術は基本的にはゲリラ戦術を基礎とした地上戦格闘術だ。近くにあるものはなんでも利用し、周辺全てを武器とする術だ。常に自分の身を守りながら攻めるのをモットーとして相手の隙をつき無力化する。ちなみに無力化の具合は“殺さない程度”だ。負傷させる程度なら全く許容範囲だそう。

「では軽くペアで手合わせをしてみましょう」

ナミさんがそう言うとともに周りの人々がぞろぞろと動き出す。どんだんペアができていくなか私は……あ、孤立するやつか？

「琴ちゃん！一緒にやろ！」

やった！勝ち組！あれ？てかこの声どこかで……振り向けばコック姿の面影のある女の子がいた。私より少し身長の高い女の子で、白っぽい瞳と短い黒髪の子、声からしてもわかる通り船見さんだ。

「あ、船見さん。お願いします」

良かったボツチにならずに済んだ。

「ではさつき言った通り、戦闘訓練を開始しなさい」

木でできたナイフを使った簡単な模擬戦闘だ。相手に当たるまでが戦闘、地を這って転がってでもナイフに当たらないようにし、隙を

みて素手でやりあうのが今回だ。

「じゃ、琴ちゃん行くよー!」

船見さんが突っ込んでくる。支給された木ナイフを器用に回転させながらの攻撃、さすがコックさんだ。だけど、私だってただ働いていただけじゃないんでね。

スツと後ろに下がってよける。まだ見える攻撃だからどうさもない。せつかくのメイド服を汚すことは非常に嫌悪したくなるけど、それだけ本気で勝負をしろということだろう。

「お、よけたねー。本気でよけないと捌いちやうよー!」

「な!」

船見さんはニヤツと意地悪な笑顔を作ると同時にもう片方の手を見せた。そこにはもう一本木のナイフが握られている。まさかの二刀流。

「ちよ、まさか……」

「ええ、私は剣術2段二刀流よー!」

「んなバカな……」

あ、私としたことが……ビックリのあまり言葉にしまった。

「えへへへ、どこまでよけるかなあ? 琴ちゃん」

ちよつとまで、剣術2段だと……級はさんだ子にしてくれよお……。

まあそこからは想像に任せます。と言いつつ教えようとする私は悪い子かな? 簡単に言えばフルボッコです。ギリギリ回避を繰り返してゴロゴロ転がり、目が回りそうなくらいクルクル回りよけた。

そんなことがあって今日もすでに日が暮れてしまった。練習が終わってからはずっとお嬢様のおそばにいる。私がお嬢様の就寝前まで付き添うことが専属メイドの間の決まりになった。朝から夕方まで私は勉強と学習が主なためだ。お嬢様のお隣にいれるようになるまではこれの繰り返しだ。

「ふふ、もうこんな時間だね。そろそろお風呂行く?」

「え? あ、はい」

専属メイドは基本的にお嬢様の後について入浴を共にする。しか

し基本的には一緒に湯に浸かるのではなく、メイド服の裾と袖をまくってお背中を流すというものだ。一つ言っておきますが、初めてです。

お嬢様のお部屋を後にし、浴場へと向かった。まだ緊張する頭を下げられる中を歩くこの感覚、非常に顔も胸も熱くなる。

巨大な脱衣場につきました。この間と同じ脱衣場……手が空いているのか十数人以上の女性や女の子がいる。そういえば若い女性が多いなこの館。

一つの籠の前でお嬢様がスルスルと紐をほどいた。それを手伝って服を脱がせていく、なんか脱がせているみたいで非常に背徳感を感じる。お嬢様の白い肌がどんだんうっわになっっていく。傷一つないきれいな体で、とつても華奢で小柄だ。それでいて私より身長が少し低い。いかにも守つてあげたくなるような女の子の体だ。

「なあに？もしかして私の体に見惚れてる？」

お嬢様は自分の体を軽く抱きしめ身を捻って後ろ目に意地悪な顔をする。いや、私にはそういう気があるわけじゃない。あるわけじゃないんだけど……なぜか顔が熱くなって目線が……。

「あはは、別にいいよ。減るもんじゃないし。ふふ」

どうしても笑いが漏れるのかお嬢様は口元を抑えて声を漏らす。あれ？もしかしてからかわれてる？

「ううう……早く脱いでください……もう」

仕返しとばかりにお嬢様の服を脱がして下着だけにしてさしあげた。白い下着は普通に私たちに支給される下着よりも質感がどうみても高価なもののようにみえる。やっぱりお嬢様なんだなと思う。

「冗談だつてばあー」

お嬢様はべーっと舌を出しながら笑って、下着も全部脱いでしまった。あ、やばい慎ましい程度の膨らみにきれいな線のある腰、まるで美術館の絵画の中の女性のようだ。

「えへへー、さきにいっちゃうよー？」

「すぐ行きますのでどうぞ」

クルッとターンしてお嬢様は浴場の方にトテトテと行ってしまっ

た。

「ふう……」

お嬢様の服をたたみ、籠に綺麗にいれた。そして自分のメイド服をまくりあげ、靴下とエプロンとそのほかの装飾品を外した。柔らかな小さめのタオルを片手に浴場の扉を開けたのだった。

↓

カポンと音がしそうな良い湯場だ。まあ屋敷内の複数あるうちの一つ。ちなみにここで一番高い場所に位置するのだ。つまり何が言いたいのかというと、露天風呂です！とても見晴らしが良いです。とはいっても山しかないから周りは真っ暗ですがね。

浴場の扉を開け、中に入るとお嬢様はチョココンと木の椅子に座っている。アレ？お湯も浴びずに何をやっているんだろう。ピチャピチャと湿ったタイルっていうのか床を歩いていき、お嬢様の後ろまで来た。

「お嬢様？」

「あ、琴香、やさしくしてね？」

また色気みたいな雰囲気さらしてそんなことを言ってきた。おまけにオドオドしたような瞳で私を後ろ目に右手の人差し指を唇に当てている。

「乱暴にしましょうか？」

「え、ちよちよ、冗談だってばあ……あははは……」

お嬢様は笑いながらすぐ前に向きなおした。仕方ない優しくしてあげよう。

「お嬢様お湯かけますよ？」

「うん」

お嬢様の前に少し回るようにして水栓を捻る。桶にお湯をためる。指をつけて熱さを確かめる。ちよつとぬるめだが悪くないだろう。熱すぎると肌に悪いだろうし。

溜まったお湯をお嬢様の肩からゆっくりかけ、一連の流れで頭にもかけてあげた。お嬢様の銀髪は濡れても綺麗な輝きがあり、白い肌に似合っている。肩にかからない程度の長さがとても可愛らしく見え

る。

備え付けのシャンプーを手に乗せた。お嬢様に使う石鹸類は基本的に備え付けでいいと教えられたので、それに従うつもりだ。軽く手を合わせて塗り広げ、爪を立てないようにそれぞれ十本の指の腹でお嬢様の頭に触れる。

ゴシゴシ？ んーどっちかかっていうとクシクシか。そんな擬音がしそうな感じに洗う。シャバシャバと泡だってお嬢様の髪の上にはあつという間に泡の塔が出来上がってしまった。

「かゆいところはないですか？」

「あはは、ちよつとくすぐつたい」

そんな会話をしながらお嬢様の髪の先っぽまでしっかりと泡をつけた。

「目開けると痛いですから開けないでくださいね」

「うん」

子どものように明るい声で頷くお嬢様を横目にまた桶にお湯をためていく。さつきよりもちよつと温かくなつた気がする。ためながらお嬢様を肩越しに見てみる。さつきも見たはずなのにお嬢様に裸体を見たとき顔が熱くなった。さつきと違って透明なお湯のあとがたくさんついていて色っぽいのだ。

「早くうー」

ジャボジャボとお湯がこぼれる音とともに桶からお湯があふれた。ポーつとしてしまった。

「し、失礼」

お嬢様に一言あやまり桶のお湯を頭からかけてあげた。この館のメイド特注のシャンプーは非常に泡落ちが良い。桶一杯で十分に落ちる。

洗髪の次は洗体……タオルでやればいいって言われたけど、正直そんなことしたことないしやり方がわからない……やるしかないのかな。

お嬢様のお顔に泡が残ってないかを確認する。うん、大丈夫そう
だ。

「いいですよ。お嬢様」

「うん、ありがと」

パチツと目が開き、いつもの金色の瞳が覗いた。微笑んだときと違ってあまり感情を出していないときは本当に狼のような威厳がある。ちなみに今は微妙な微笑み方をしている。

「？」

キョトンとしたお嬢様の顔はやっぱり隙が無い。いつでも笑顔で殺されそう。もちろん恐怖じやない方の意味で。

軽く首を振ってなんでもないと意思を表しておいた。お湯に浸したタオルに体用の石鹸をつける。何度かお湯につけ、ゴシゴシとタオル同士をこすりあわせて泡立てた。まずはお決まりの相場、背中から洗うことにする。

さつき同様、お嬢様の後ろに膝をついて座り、その広くない肩幅の背中にタオルをつける。強くしすぎない程度にゴシゴシと小さな音を立てながら擦る。お嬢様は気持ちよさそうなふうな感じの雰囲気です。横からのぞく軽くつぶった瞳がそう語る。

「やっぱり琴香の洗い方くすぐったい！」

「す、すみません」

ちよつと長すぎたのかお嬢様の語尾が強かった。そのため私はちよつと焦って謝ってしまった。

「いいよ。ほら、最後までやってー」

お嬢様がそういつて軽く身をよじる。可愛らしいのか色っぽいのかよくわからない。

そんなお嬢様の前に回って肩から腰までゆっくり洗う。胸と下半身部分はできるだけささっとやってしまい、どうにか事なきを得た。でもやっぱり女の子の部分はどうしてもしっかり洗わないといけないから、ビクビクしながらお嬢様と会話をしながら洗ったのだった。

「お、お嬢様失礼しますね……そういうえばお嬢様」

ゆっくりお嬢様の下半身に手を伸ばす、私の目はもう緊張と慎重がまじりあって恐ろしいまでの集中力を生み出してしまった。やばい、これ今日はよく眠れる気がする。

「なーに？」

お嬢様の声がかから聞こえてくる。お嬢様が変な声とか漏らさない心配でその発声の一字一文字が鮮明に脳内で何度も何度も繰り返される。

「お嬢様はなぜこのお屋敷に独立したのですか？」

メイドの基礎の課程で教えてもらった。このお屋敷は完全に“望月大公の御息女の物”だ。お嬢様は過去に数人のメイドと使用人、あと馬車の老人を連れてこのお屋敷を住処とし、親元から独立したそうだ。そこからは様々なルートと情報網を確立し、難民に奴隷、身寄りのいない外国人から亜人まで様々な人々を屋敷に引き入れたそうだ。その介あつて、最上流階級がメイド長を含め6人、上流階級が約200人、中流階級が約6千人、下流階級が約2万人、その他外部活動者が複数いるそうだ。

そのままお嬢様の陰部を慎重になぞるようにふれ、できるだけ早く、できるだけ慎重に洗う。

「そうだねー、もう何年も前の話だけど、私の住んでいたところにも奴隷とかがいたの、たまたま地下で会った女の子と仲良くなったんだけどね」

やっぱりこんな世界だ。大公の元といえど奴隷やそれ相応の人がいるのだろう。

「だけどね、その女の子は奴隷だったの。牢屋の監視の目をうまくごまかして牢の外で暮らしていたの。毎回そこに行けば必ず私を待っていてくれたの。本当に楽しかった。私の知らない遊びや運動を教えてくださいました」

お嬢様の声音が変わった。洗うのは十分だろう。桶にお湯をためながら話を聞く。だけどその声音はなんていうか、私のせいではなく何か悲哀を孕んでいる。

「だけどある日は違ったの。いつもの地下に行くと女の子の声が聞こえた。でも違う。叫び声、泣き声、絶望の声、私を呼ぶ声、一つの声なのにその声はたくさんさんの声に聞こえた」

「お嬢様……？」

お嬢様の体にお湯をかけ泡を洗い流し、お嬢様の顔を見た。さつきまでの笑顔が消えうせ、思い出したくない何かを思い出すように暗い雲を顔に浮かべていた。まさかまずいことを聞いてしまったか。

「それから……それから……それから……」

お嬢様の声がどんどん荒くなってる、呼吸も荒くなってる。まずいどうにかして落ち着けないと……。

「お、お嬢様！落ち着いてください！」

「え……違う……違う……ただ……私は……私は!!」

お嬢様の手を取りギュツと握った。さつきの暗い雲のような顔は涙をためていた。お嬢様は私よりもひどいものを見てきたのか。話から察するに偶然仲良くなった奴隷の女の子に何かあったのか。

「お嬢様！」

「どうしたんですか？」「あ、お嬢様だ」

「え？あ？ご、ごめん。大丈夫大丈夫……」

お嬢様の手をぎゅつと握るとお嬢様がようやくこちらを見てくれた。金色の瞳が涙に濡れて崩れかけている。泣かせるつもりもなかったのにやらかしてしまった。

そこからはやばいくらい気まずい空気の中お嬢様の入浴にお共したのだった。

水蒸気つてどんなときに噴くの？

周囲のメイドたちにはそれぞれ肩書というものが存在する。この館独特の制度に基づいたものだ。とはいったものの、その肩書の羅列は戦闘技術の証書のかわりのようなものだ。なかには特殊な趣味っぽい何かの肩書をもった人もいる。

「ボーツとしちやってどうしたの？」

ふとそう呼ばれ意識を前に戻す。発声主は同じ専属メイドで近い年齢のエリーだ。あ、そうそうパーティのあとすぐ専属メイド全員としっかり仲良くなったのだ。

「なんでもないよ」

軽く首を横に振って大丈夫だ、と主張する。今は昼食の最中で、私とエリーは食事をとりに来ているのだ。エリーの目の前のお盆にはいかにもジューシーな焼いた鳥の肉が置いてある。船見さんお手製のソースがかかっているようだ。それをツンツンとフォークでつきながら会話を続ける。

「そう？てつきりさつそく好きな人でも見つけたのかと……」

エリーは歓迎会の時といい、昨日の夜での行いといい、そういう方面にしか頭を働かせていないんじゃないかと気になる。

「もう、そんなんじゃないってば」

「じゃあ、なんなのお？」

エリーは少し意地悪な顔をしてそう声を上ずらせた。昨日も数回見たこの顔、次の発言がどうであれ、逃がさまいと集中砲火してくるだろう。とはいえ、なかなか答えが見つからないのだ。

「本当になんでもないよ……」

「やっぱり好きな人だね」

エリーは鳥の肉をナイフでスツと切り分け、その脂ののった柔らかいところをパクツと一口に食べてしまう。まるで捕まえたといわんばかりの行い。

「ち、ちが……」

「お嬢様でしょ？」

「……」

一瞬思考が固まる。なぜ今考えていることが分かったのだ。自分の目線が嫌でも無意識にエリーからはずれてしまう。やばい、これじゃ“そうだ”って言ってるようなもんじゃないか。

「当たり前」

エリーはニコニコと笑顔でそう喜んでみせる。その笑顔がなんだか怖いっていうか恐ろしいっていうか。なんていうかなー、なんだろう。

「ど、どうしてそう思うの？」

「なんとなくね。だけど……」

エリーは軽く区切りを入れるように、さつき剥がした鳥の肉の皮を頬張った。パリパリに焼けたその皮は油をポタポタと落としながら、エリーの小さな口におさまってしまう。

「あなたの目線、表情の動き、言葉の選び方、呼吸の速さに荒さ、体の反射的な動きに普通と比べて鈍くなるところとか、お嬢様と一緒にいるとき以外は見られないところが多いからね」

エリーはコクリと食べ物を飲み込みそう言った。

「そ、そんな……そんなにじっくり観察するタイミングなんか……」

「私を誰だと思ってるのかな？これでも2年ここにいるからね。伊達にマスターテレポーターを名乗ってないよ？」

エリーは笑顔で明るい声でさういう。これが低い声ならどれほど怖く威圧的だろうか。エリーの肩書はメイド戦術8段空間系魔術5段諜報専門専属メイドだ。いつみても長い肩書は読んでもとクラクラしてくる。メイド長の肩書はノート数ページにわたるとかわたらないとかの噂もあるくらいだ。

エリーがマスターテレポーターって言われるのは、ただただ空間魔術に長けた思考力を持っているだけじゃないらしい。普通テレポーターは座標と言われる目的地点を理解していかないといけないものらしい。しかしエリーは魔術以前に自分の周囲の存在する空間の地形や風の流れ力の流れを感覚的に理解し、例え知らない場所でも一定範囲内ならテレポーター可能か不可能かがわかるというのだ。だったら彼

女は亜人なのか？いや、そうではないらしい。生まれつきの才能って
いうのかそういうものらしい。とにかく人間ではあるけど理由はわ
からないというものだ。

「それでそれで！」
「？」

エリーはキラキラと目を輝かせて声を元気に弾ませる。予想して
いた展開とちよつと違うけどなんだろう。

「お嬢様のどのへんがいいの!？」

「え、あ……えと……」

予想外の質問に頭が回らず呂律もイマイチ回りきれない。とりあ
えず落ち着くためにお茶を一杯のんだ。

「ふう……急に変わったこと言わないでよ……」

「あれ？変だった？」

自覚なし、普通女の子同士だよ？とか生産性のなさを詰めてくるは
ずなのに……誰だ、お前が一番変な奴って言ったやつ。別に認めてな
いわけじゃないぞ。

「はあ……なんでもない」

「ふむ、ところで？どうなの、お嬢様のこと」

さつきよりも落ち着いた声でエリーはキラキラの目線でそういつ
た。オーラを頑張つて隠しなさいテレポーター。

「うーん……よくわからないんだよね」

「……わからない？」

エリーは私の返事をもう一度理解するように声に反芻する。

「うん、なんていうかな……お嬢様ばかり見たり、考えたりしてる自
覚はあるんだけど……これが本当に恋っていうものかわからないの。
確かに、私もお嬢様も性別は同じだし、私とお嬢様の関係は主人と使
用人だし、本当に恋なんていう感情を持てるのかもよくわかんない
の」

エリーは私の一つ一つの言葉をかみしめるように小さく頷きなが
ら聞いてくれた。さつきと違ってキラキラ目線が消え、真剣モードの
キリツとした目線になっている。

「難しいね。でも、きつとこの館の在り方はお嬢様あつてこそだからね。恋も愛も性別なんて関係ないし、主従関係って言つてもほとんどそれは建前だけのハリボテだしさ、そのわからない感情が、恋や愛じゃないっていう可能性はないと思うよ。まとめるなら、どうなの？お嬢様とどんな事がしたいの？話したい？触れたい？見つめたい？それともキスとかそれ以上の……」

エリーがわざとらしく余韻を残すようにそこで言葉を区切った。気づけばいつものチャラチャラしたエリーが全面に出てきている。キラキラ目線がなによりの証拠だ。それよりも体がすっごく熱くなつてゐる。肌に密着した服に体温がたまり、変な汗をかき始める。お嬢様とキス……お嬢様とキス……お嬢様と……お嬢様……。

プシューとお鍋から水蒸気が出るような音が聞こえた気がした。熱くて苦しい。それ以上に目の前が真っ白だ。ああ、後でエリーに文句を言わないといけないな。

そこで意識が途切れたのだった。

白い一日

「ん……あ……」

我ながら変な声を上げたものだ。目を開けると見覚えのある薄い肌色の天井が見える。あれ？確かエリーと昼食をとっていたような気がするんだが……あ、思い出した。エリーが変なことをいったせいだ。

体を起こし、ふうと軽く一息ついた。

「おはよう？」

「!?」

急に左隣から聞き覚えのある声が聞こえた。この間も同じようなことでひどい目にあつたばかりなのになぜこうも……。

左に視線を向ければ微笑ましそうに笑顔を作るお嬢様がいた。その細められた金色の瞳が私を見つめて離さない。だから目が合つて視線がそれで……顔が熱くなる。

「もう、急に倒れたって聞いたから来てみたけど、元気そうで良かった！」

お嬢様が明るい声でそう言ってくれる。聞かなくても来てくれるだけで嬉しいのに、そんなこと言われると余計に顔向けできない。

「あ、ありがとうございます」

口ごもり気味にどうにか視線だけでもとお嬢様に視線を送る。えへつとお嬢様が少し首をかしげる。なんだそのしぐさは……狼の雰囲気が見え隠れする猫みたいなしぐさ、下手に近づけばもうそれは獲物、言うなれば虫を食べる植物のようなもの。だけど私にはうまくその愛情表現かなにかわからないものにはなかなか素直になれない。

「まあ、でも……ちゃんと休まないといけないよっ」

どうにかゆっくりとお嬢様に顔向けする。大丈夫だよな？ニヤニヤしてたりしないかな？いや、たぶん顔は赤いだろう。だって熱いもん。

「は、はい……」

「真つ赤な顔してるけど、本当に大丈夫？」

やっぱり赤いようだ。お嬢様が細めた瞳を見開いて心配の言葉を紡いでくれる。主人に心配ばかりかけるようじゃメイド失格かもしれない。いや、そもそも私の主人がお嬢様な時点で向いていないのかもしれない。

「ほら、じつとして」

「え？あ、ちよ……」

不意にお嬢様が顔を近づけてきた。突然のことに驚いてしどろもどろになりながら、身を引こうとする。なにをされるか察しはつくだろうが、今の私にそんなことを考える余裕なんてあるはずもなく、ただただ見惚れるお嬢様の顔を近くで見ることの上ない自分の変な欲望があふれ出すんじゃないかって……何言ってるんだろう。

まあ、身を引いてとにかく距離を取ろうとしたんだよね。だけどベッドに座っている私はうまく動くこともできず、お嬢様の手に捕らえられてなすがままにされてしまった。

「んう……」

ピトツと額に感触を感じる。ギュツと目をつぶってあまりに顔が近いことにビクビクと体が震える。こんな……こんな……家族レベルの親密なこと……。

「あれ？どんだん熱くなってる？」

お、お嬢様のせいですう……。

「うう……」

返事をするつもりが変なうめき声が漏れてしまった。恥ずかしい。

「それにしても……」

お嬢様はそう言いながらおでこを離してくれた。だけど目を開けると、息がかかる距離にお嬢様の顔があつて……。

「!？」

目が見開いて驚くのがわかる。いや、ビツクリしたただけだよ？

「いい匂いだね琴香」

スルツと次は頬つぺたに感触を感じる。え？なにこれ!? なんなのこの状況!? 滑らかな心地よい肌の触れ合い、なぜかお嬢様に頬を頬ず

りされております。緊張して水蒸気噴くどころの騒ぎじゃない。鼓動が早くなつてさきに血液が噴出して死ぬんじゃないかって域ですよ……はい。

「お、お嬢様……？」

「あ、ごめんごめん。嫌なことしちゃったね」

お嬢様は私の言葉を聞いてスツと離れてしまった。やばい……すっごくなんかむなしっていうか切ないっていうか変な気持ちだ。もっとしていたい。

「あ、い、いえ……別に……」

ボーツと意識が遠のきかけている私の言葉はなんか微妙なものだ。お嬢様も気づいたのか私をベッドに寝かせつけてくれた。

「ごめんね体調悪いのに……ちゃんと治るまで休んでね。また見に来るから……」

全く誰のせいだと思ってるのか……。スツと小さく衣擦れの音を立ててお嬢様は立ち上がる。そして私から視線を外して部屋を出ようと歩き出した。

「……!?」

本当に無意識だった。出ていこうとするお嬢様の背中に、私は左手を伸ばしてその裾を掴もうとしていた。伸ばしきった左腕はお嬢様の裾をかすめることもなく空しく寂しく空を切った。

ボタンとドアが閉まり、お嬢様は部屋を後にしてしまった。左腕をバツと布団の中へしまい、自分のとろうとした行動を理解するように、扉とは反対側の壁の方に体を丸め、布団にもぐる。相も変わらずいい香りのする布団だ。いや、落ち着け落ち着け。

「……」

お嬢様のことを引き留めようとした。まだここに来て短いのに大胆なずうずうしいことをやろうとした。いや、メイドのくせにお嬢様を……この手に求めようとするなんて……何考えてるんだろう私……でも、お嬢様もあんなことを私に平気でやるなんて、そういう気があるんじゃない……違う違う！そんなわけない。私とお嬢様は主従関係の中だ。そんなのあるはずない……でも、もし……そうだったら

……いいな……。

布団から顔を出すと、自分でもわかるくらい外の空気が冷たく感じた。きつとかなり私自身が沸騰しているのだろう。ちよつとだけ布団から足を出して冷ますようにした。

それから目をつぶった。無意識か意識か、お嬢様にさつき触れていただけいた部分の感覚がよみがえる。また顔が熱くなるのを感じる。今は一人だし、いいよね？

次の朝目が覚めたときはスツキリとした気分だった。本気でお嬢様のために努めようと思うのだった。

お嬢様のために……

昨日のことがあったあの後から決めたのだ。朝は早くに起き、勉学に慎む。昼はここでのメイドの技術を磨き上げ、夜はお嬢様のお隣で過ごす。深夜はギリギリまでこのルールと復習を詰め込む。

「よし」

朝の寝起きはバツチリだ。食堂は朝早くからやってるし、先に軽く朝食でも取ってから勉強しよう。そう決めベッドを下りたのだった。

1

食堂にはこれから仕事に行く前のメイドや使用人がいる。数えるのも面倒なほどなのは当たり前だ。厨房前に来ると、船見さんがいた。食品の受け渡しのカウンター越しに船見さんに挨拶を交わす。

「おはようございます。船見さん」

「あ、おはよー琴ちゃん。今日は早いねー何にする？」

船見さんはクルツと振り返ってメニューを渡しながらそう言うてくれた。やつぱりコックさんの服装が似合うな。とゆか、いつもここにいるような気がする。

疑問を聞くついでにメニューを言おうと、メニューを選んだ。選んだのは船見さんおすすめのメニューらしい。チーズパニーとサラダのわかめ添えなるものだ。

「じゃあ、船見さんのおすすめセットをお願いします」

「あーい」

船見さんは明るく返事をして、後ろのコックさんたちにメニューを伝え、また戻ってきた。あれ？船見さんは作らなくていいのかな。まあいいや、ちょうど質問したかったし。

「そういえば、船見さんっていつもここにいないですか？」

「そうでもないよ、ちゃんと休憩も取ってるし、ごはんも食べてるよ」
船見さんはニコニコ笑顔でそう返してきた。まあ確かにこんな明るい笑顔できるんだから健康的っていえばそうだな。

「まあ確かに私は大半の時間はここにいてるね」

「どうしてですか？」

船見さんは左手の人差し指でコックの帽子の下のほうについたバツジみたいなのを指さした。確かあのバツジは……そうだ、料理専門の認定バツジだ。説明すると、メイドは複数ある仕事を交代でになったりするのだけれど、一部の秀でた人だけはその統率者の許可を得て、その仕事だけを専任して行うことができるようになるのだ。まさか、船見さんは料理専任だったとは……せつかく剣の腕もいいのに。

「そういうことでしたか……とところで、料理はしないのですか？」

船見さんは今度は左手の親指を立て後ろを指し言う。

「大丈夫！みんな私の部下みたいなものだから、私は今みんなの教訓役だからね！」

つまり、船見さんは教官的立場で、後ろの人達はみんな生徒みたいなものだということらしい。あれ？船見さん教える立場ってことは上流階級じゃん。

「とか話しているうちに出来ちゃったね。今日も頑張つてね！」

一人のコックさんが料理を渡してくれた。その出来をジーツと少しの間見つめた船見さんは「オツケー！」と言って合格サインを出した。本当に教官らしい。

料理をもってテラスに行く階段を上った。外はよく晴れている。数人の人がテラスで食事をとっている。そこにお邪魔して、端っこのちようど階下が見やすい位置に陣取った。真っ白なテーブルにはいくつかの装飾がされていて、実に趣があるように感じられる。落ち着きそうだ。

さつそく座ってフォークを取った。野菜には船見さんの考案らしいドレッシングがかかっている。ほのかに酸っぱい匂いがする。そういうえば酸っぱいものって唾液が多く出るように作用するって聞いたことがあるな。

「いただきます」

サクツ？そんな音を立ててキャベツにフォークを突き立てた。やっぱり新鮮だからかな。音だけでも食欲をかきたてられる。

パクツと一口にキャベツを放り込む、良い歯ごたえのサラダはまさ

に朝食だ。と言わんばかりにその存在をしらしめる。おまけに船見さん考案のドレッシングもまた絶品だ。酸っぱすぎない程度に甘い。うん、サラダのおともにピッタリだ。

「おいしい……」

つい一言漏らしてしまう。さすが船見さんの料理だ。そういうえば最初に食べたときは表情に出ていたみたいだけど、今はどうだろうか。

まあ、そんなことは置いといて、次はチーズとハムが挟まれた両面を圧縮したみたいなパンだ。手にもてばサクサク感が伝わってくる。

「ふむ」

チーズは一応大好物だ。だけど高いからあんまり食べないんだよね。それなのに船見さんはあえて料理の一品に取り入れている。もしかして私が知らないだけで、安価に手に入れられる場所があるのだろうか。

予想通り、かぶりつくときとサクツと良い音が出る。中からチーズの程よい匂いが漂ってきて口の中を満たす。でも強すぎず、臭いとまでは感じない。いや、臭いチーズは食べないんだけどさ、なんていうのかな。うーん……ま、とにかくいい感じなのだ。そう、いい感じ！

しつかり噛んで味わう。あーやばい、幸せかも。

ふと石の手すりごしに外の風景を見る。ちょうど屋敷の正門が見える位置にこのテラスは存在している。お嬢様が使っている馬車と、専属メイドの4人が見えた。その正面にはもちろん白いドレスっぽい服装の銀髪の人がいて……はて、今日はなにかあったかな。あとでメイド長に聞いておこう。

お嬢様が馬車に乗り込み、あとについて専属メイドが馬車に乗る。そんな光景をジーンと眺めながら、またパンをかじった。気になるな。

1

この屋敷のほぼ屋上にあたるところに巨大な図書館が存在する。本棚の数はざっと500棚以上、司書の魔法使いさん曰くおよそ500万冊あって、この屋敷の重要事項に関わる機密書類も合わせると7百

万冊以上になると聞いた。

そして今はこの屋敷の歴史書みたいなものを探しているのだ。この間お嬢様に過去を聞こうとして泣かせてしまったから、なにか書物でも残ってないかと考えたわけだ。他の人に聞けばいいって話なんだけど、残念ながらもうすでに搜索済みだ。つまり見つかりませんでした。たぶんあの馬車をひいている老人がそうなのだろうけど、なかなかあのひとは見つからないのだ。

「ふむ」

とりあえず、目的の物があリそうな本棚を発見したのでじっくり見ていく。面白そうな本がたくさんあるが、今は目的物を探す。

じっくり見ていくなかで、いくつか蔵書を手に取る。タイトル的には屋敷の稼業について書かれたものらしいものや、周辺国の歴史書なんかもある。

「ん」

望月家記録史と書かれた書物を発見した。お嬢様の名前と一致しているからたぶんこれだろう。手に取り、読書スペースへ移る。あ、ちなみに図書館は3階まで階層がある。屋敷全体から見ると何階かは知らないが、まあ1階からそれぞれ見えるようになっていく。

3階のちょうど司書室が見える席についた。何人ものメイドや使用人が行きかいている。やっぱり図書館にはいろんな書物があるようだ。目的のものをとれてよかった。

それと机にはそれぞれ備え付けなのか知らないが、メガネが置いてある。ちよつと興味深げにそのメガネを手に取りかけてみるが、別段なにかあるわけじゃない。やっぱりいいや。

「ふむ」

メガネを置き、本を開いた。紙は少し年期を感じられるくらいにくすんでいる。字は大丈夫そうだ。手書きの字でちよつと絵と字が詰りめ込まれている。望月家の家系図らしきものもある。お嬢様が第一息女までの分しか綴られていないが、お嬢様が独立したところまではしっかり目次に書いてある。なぜ、史書なのに目次があるかは不明だ。いや、あるものなのかな？

知りたいのは望月家の権力範囲とお嬢様の独立理由だ。さっそくページ飛ばしに開き、じっくり読み始める。

望月家はもともと王家に仕える側近的地位の家計だったようだ。王権国家が戦争により潰れ、持ち腐れだった資産を元手に様々な稼業に進出、人当たりが良かったおかげで望月家はあつという間に、その規模は一つの国の意思を左右できるほどまでに膨れ上がった。それを成功させた当時の当主は流行り病にかかり病死、後を継いだ子息は権力の大きさにその身を墮とし、墮落貴族へとなり下がったのだ。そこにお嬢様が生まれ、一部の権力と少人数の精鋭からなる集団を与えたという。お嬢様には十分な教育が施されなかったが、お嬢様本人が自ら物事を進んで取り組み、与えられた精鋭集団もそれに従事したという。ところがある事件があつて、お嬢様は精鋭集団をつれてもらった権力を返上し、かわりにこの屋敷を手に入れたそうだ。ところで、一番気になるある事件なのだが、すっかり詳細が記載されているようだ。薄汚れた紙切れが一緒に添付されている。

『奴隷3561の処分完了、処分中お嬢様の名を呼ぶのを確認、対応にあたられたし。』

よく見れば書物の端っこにつけたしみみたいな字で文章が綴られている。

彼女は緑色の瞳に黒色の髪の毛のまだ15にも満たない少女だった。初めて会ったときはなんだかおびえていたけど、話していくうちに彼女は明るく元気な子だってわかった。まだ外の世界をよく知らない私にたくさんお話しをしてくれた。空の綺麗さとか山々の美しさ、とくに食べ物の話は面白かった。パンや米の話が面白くて、本当にそうなの？とか疑ったけど、彼女は嬉しそうに明るく頷いてくれた。私と彼女が話をしたところは暗く冷たかったけど、それ以上に彼女の笑顔が見られることがこの上なく暖かったのだ。だから、私は名前を教えた。側近の使用人やごく一部の親しい間柄の人以外には教えてはいけない名前を教えた。この名前を知ることが私の権力が届く範囲でその人は守られている証だ。年端もいかない私は名前を教えることの重大さをまだよく理解していなかった。私のような子どもにはま

だ、守る力なんてあるはずもないのだから……。

ある日だった。いつものように地下への裂け目から地下牢の開けた場所に来ると、彼女の声が聞こえたのだ。私が来た事への楽しそうな声じゃない。必死に声を殺してすすり泣くような声だった。おまけにお父様に仕える兵士たちの声がたくさん同じ方向から聞こえる。いつもと違う様子にビクビクしながら角に隠れて奥の様子を見ると、彼女は体中を充血させて、冷たい牢の中で倒れてる姿が目に入った。その周りを兵士たちは囲んで、何かをしている。子どもときの私には人が人に暴行を加えることを知らなかった。だから衝撃だった。ガラスで手を切れば痛いし、たたかれてももちろん痛い。痛いのはなんなのだろう。そのとき鼻を突いた匂いは異様に嫌な気味の悪い匂いだったのを覚えている。しつかり凝視すれば彼女は服すら来ていない。かわりに白いなかドロツとしたクリームシチューを濃く白くした何かをたくさんかぶっていたのだ。微量だったけど確かに確認が取れるくらいにそれはわかった。それと赤い液体が混ざって水の上に油を浮かせてそれをグシャグシャにかきまぜたようなそんななか、血液かもしれない。そう思うと急に鼻に鉄の匂いがついた。間違いない血液の匂いだった。そこからは私は記憶がない。いや、思い出せないというのが正しい。気づくと生気を失った彼女の体を抱きしめていた。白くドロツとしたものが気持ち悪いくらいに冷たく肌に触り、しかも一様に臭い。間近でかけば吐き気すら催すものだった。そのときの辺りの状況は腐臭のするいわば死体集積所、エト達に見つかったときは驚かれたものだ。そこから私は奴隷という身分を学んだ。お父様とは決別し絶縁関係を宣言、もらった権力を返上し廃墟決定で処分されかけた屋敷をもらい受け、移り住んだ。ここから大きくする。奴隷という身分を開放し、強い上下関係をなくし平和で穏やかな国を作りたい。今はまだ50人くらいしか人手がないけど、みんな信頼している。みんなのことを私は信じている。大事なことから2回言った。私はお父様とは違う。

「……」

お嬢様の過去、つけたし文の最後を見れば本の記載日とか書かれて

いた。その下にもう少し続くように、日付がかかれていて、そこには徐々に新しくなる日付と当時の総人数とが記載されていた。

初年 本書執筆 総人口50人 廃墟寸前の屋敷を獲得

1年目 総人口150人 屋敷の改築と近辺街町村に情報網を確立

2年目 総人口500人 エルフなど亜人を保護、魔法術系分野の確立と屋敷の力循環系物質として地下を改築し、第一魔術結晶クリスタのエルを設置、翌日調整を兼ね稼働。

3年目 総人口5000人 様々な人種や亜人を保護し、図書館、食堂、第四までのクリスタを設置、稼業をさらに推進各派遣地域や区域での生活を可能にし、階級制度を導入、建前だけの存在だが、統括者たちの設置により、情報や生活などの流通推進を確立

.....

まだまだ続いているが本当にすごい。年々その取り組みが倍以上に成果を上げているものだから驚くしかない。そして最後の日付は昨日のものだった。

×年目 総人口51万4891人 錬金術分野の推進を決定。研究技術分野に科学と言われるものを導入、少人数の数学者と錬金術と魔法術関係者が参加・研究を行っている。緑色の瞳の少女を保護、専属メイドとした。

なぜか私のことも書いてある。しかしながら科学とはなんぞや.....

パタンと本を閉じ、お嬢様の過去の事象を少し考える。私もこれでももうすぐ17近くだ。そういう知識がないわけじゃない。仕事をしていたら嫌でも性というか子どもに関する知識を得るものだ。自分ももしかしたらそうなっていたかもなんて考えがわいてくると今の自分がどれだけ幸せかわかる。

「ふう」

少し頭を整理し、落ち着く。お嬢様はこんなことを経験して今を作られた。だったら私は全然.....やっぱり幸せなんだろうな。

「よう」

自分の中で何かを決め、また違う本を開いた。お嬢様のためなら身を捧げる覚悟で今を生きたつていいだろう。もつと知って考えて、立派にお嬢様のお隣に立てるようになりたい。ただでさえ、いろんな感情を私に植え付けるのだから、違う面からでもそのお隣は望みたくなるものだ。

仕返し

お嬢様のために尽くそうと決意を固めて早くも二日目に入った。私は一日の大半を使って入れ込んだ経済と経営と接客術を駆使してある程度の地位を確立した。ただ、知識や振る舞いだけじゃまだ駄目だ。専属メイドの本来の目的はお嬢様の24時間護衛にある。

お嬢様を囲む私以外の4人の専属メイドはハッキリ言っただけ弱く感じの人が多いのは確かだ。現に2人は私と同年代という有様で、正直心もとないけど、体格以上に知力と異能を持つことでそれをカバーする強さを持っている。

残念ながら私には魔法とか皆無だから知らない。お嬢様はなぜ、私のことを専属メイドに選んだのかは正直わからない謎だ。

ただただそばに置いておきたいというなら、私は喜ぶ程度には嬉しい。だけどそれではいざとなったとき共倒れではないか。私が気づいてないだけで私には力があるのかもしれない。もう少し頑張ってみよう。メイド長が設けた1週間の期日までにメイド戦術を応用できるレベルにはならなければ、とは言ったものすでに3日もない。やるが多すぎて大変だ。

「お嬢様？」

それとは打って変わって、現在20時です。お子様はちょうど眠たくなる良い頃合いの時間ですね。お嬢様のお部屋でお守をしているのだけど、いつもならもっと明るく話しかけてくれるお嬢様がなんだかうつつむくような体制で固まっている。

「……」

反応はなし。まさか寝ているのかな。それはそれで風邪をこじらせるので大変だ。

「お嬢様ー？」

少々のぞき込むようにその素顔を見れば、顔全体が少々赤い気がする。それによくよく聞いてみれば息もちよつと荒いかな。

「……………こと……………か？」

虚ろになりかけている金色の瞳が向けられる。ボーツとしたでも

いいかな。そんな表情だ。やっぱり風邪かもしれない。とにかくベッドに寝かせてメイド長を呼ぼう。

「失礼します」

「んや……」

お嬢様を椅子に座った体制から世にいうお姫様抱っこをするのは楽だった。よくおとぎ話なんかで王子様がヒロインをひよいつと持ち上げてしまうような場面がある。それを思い浮かべてもらうといかない。ただしベッドではなく椅子だ。行先はベッドだ。変な妄想はなししないでくれたまえ。

お嬢様の火照った顔が間近に迫ってなんだか私も暑いんですが……てかまたぶっ倒れる自信もないわけじゃない。やっぱりメイド長よりエリーの方が先に来そうだ。もうエリーでいいや。

「エリーー！」

お嬢様をベッドに運ぶ次いでに、扉に向かってエリーの名前を呼んだ。

お嬢様をベッドに寝かせ、布団をかけてさしあげた。銀色のお嬢様の髪を横に退けて邪魔にならないようにし、そのおでこを手で触れ熱を確かめる。確かに私より熱い、これは確実に熱だな。

「呼んだかな？」

風の通るような音とともに背後から声が聞こえた。やっぱりこっちのほうが早かったみたいだ。

「お嬢様が熱を出してしまって、メイド長を呼んできてくれる？」

「おーまじですかー……」

そう言つてすぐにバツと消えてしまった。

―数分後

「ふむ、……最近の遠出の疲れが出たのでしょうか」

お嬢様に軽く手をかざして魔法で検査をしていた男性がそういつて結果を報告していた。他にも錬金術分野の人も来ていて、何やら検査を行つてたけどなんでもなかったみたいだ。

「そう、ありがとう」

メイド長はその人らにお礼を言つて部屋を後にしていった。

「しかしまあ、正直ここまでお嬢様が健康なものもすごいといえるところですね」

さっきの魔法の男性がそうつぶやくように言った。お嬢様はさっきよりもマシになったのか呼吸自体は比較的落ち着いてきているように良かった。

「うむ、まだ20に満たないのでですから……こうやって体調をお崩しなさるのも4回目と言ったところですね」

錬金術の男性もそれに返してお嬢様を見る。お嬢様はきつと無理して頑張ってるんだと思う。この間読んだ望月家記録史は半分お嬢様の定期日記みたいなものだ。常に運用効率を整え、資産の運用と回転を最適化し、短期間で巨大な組織を作ってしまった。ビジネスとしては大成功なんか比じゃない。

―数分後

お嬢様の容態もある程度落ち着きが見えたということ、ふたたびこの部屋には私とお嬢様だけになった。時間も22時になりかけている。

「……」

お嬢様のおでこの上には水を絞った布を載せている。表面に出てくる熱を物理的に排熱しやすくするためだ。ときたまにまた冷たい水で絞るのが今の私の務めだ。

「ふう……ふう……」

規則正しいように小さく吐き出す寝息は見ていても癒される。いや、こんなこと言っちゃダメなんだけどね。でも、私は決めたんだ。もう隠しはしない。

「お嬢様……」

お嬢様の布を絞るために手に取る。ギュツと絞って、またお嬢様のおでこの上に乗せたとき、そのまぶたが小さく開かれた。間から覗く金色の瞳は私をすぐにとらえた。自分なりに小さく微笑んで、「気分はいかがですか？」と尋ねてみた。

「ちよつと息苦しいかな」

お嬢様はまた瞼を閉じ、そういった。

「では換気をしておきましょう。今日は雨ですが仕方ありません」

そう言つて窓を開けた。パサパサと小ぶりの雨が山々に映る。向こう側の山なんか闇しかないけど、すぐ下の広大な庭と玄関には魔術結晶の魔力によって光が常備されているからよく見える。

スーツと涼しい風がカーテンを揺らし、ちよつとムワムワとしていた部屋の空気を奪つていった。またお嬢様の目の前に座り、顔色をうかがう。

目の前に来るとさすがに気配でわかるみたい。座つたとたん両方の瞼が開かれて、私を見据えてきた。

「これでいかがでしょう?」

「さつきよりは楽になったわ。ありがとう」

お嬢様の言葉は明らかにいつもとはちよつと違う。元気ににつきこにーしているときは口数もテンションも低いし少ない。ま、当たり前か。

と、そんなことを考えながらジーツとお嬢様を見つめてみる。張りのある白い肌に慎ましい程度のまつげ、目元も丸く柔らかいお姫様風だ。いや、お姫様に変わりはないけどね。あ、そういえば飲み物がなかったな……つとその前に。

「何かついでる?」

「ちよつとジツとしてくださいね」

そう言つてお嬢様のベッドに身を乗り出す。お嬢様の頬を手で触れ、軽く肩らへんに手を置き、²¹目を閉じた。

「ふえ?……あ、ちよ!?……!!??」

ピトツとお嬢様のおでこに自分のおでこを接触させる。もちろん布は退けて……だ。まだちよつと熱い? いや熱くなってるのか。なんか嬉しいな。

その状態で10秒くらい接触した。途中で目を開ければお嬢様の顔がもう目と鼻の先で、正直鼻血出して出血死できるかもとか考えてたけど、そうでもなくスツと自然に離れた。もちろん、ギューツと目をつぶつたお嬢様のお顔を目に焼き付いけてだがね。

「まだちよつと体調は悪そうですね。エリーにお水を持ってきてもら

「うように言いますね」

「そう言い残してとりあえず部屋から出たのだった。」

積極性と自信が取り柄

部屋を出た。そう言ったんだけどね。残念だがそれは嘘だ。なぜなら……。

「……行かないで……」

ギョツとお腹を締め付けられ、お嬢様のベッドに引きずりこまれてました。引きずりこまれたって言うよりは、後にしようと思えば振り返った瞬間に後ろから抱き着かれてそのままベッドに倒れこんでしまったただけだけどね。

「……お嬢様?」

正直なんで自分がこんな冷静でいられるかわからなかった。心臓がドクドクと大きく脈打つ音が体全体に響き渡り、さつきまで冷たいときえ感じていた空気が今は冷気のごとく冷たく感じる程度になっている。しかも、よくよく考えなおせば半分お嬢様にのしかかった状態だった。

「!?し、失礼しました!」

と言いつつ体制を整えようとしたんだけどね。

「……」

ギョツとお嬢様の腕がさらに私のウエストを縮めるせいで断念された。それ以上絞められたら内臓が上に行っちゃうへ

「おじよう……さま?……大丈夫ですよ。私はどこにも行きませんか」

そうどうにかお嬢様に向けて言った。言い終わる同時に、お嬢様の腕の力が緩んでかわりにクイツと後ろに引かれお嬢様と場所が入れ替えられる。

「おつと……」ポスツ

すると、お腹当たりに圧迫感を感じた。まあ想像通り、お嬢様に馬乗りにされています。なんでこうなった。

「はあ……病人になんてことしてくれるのよ……」

熱が戻ったせいか息苦しそうにしながらそう言ってくれた。ただでさえお嬢様というだけでポカポカしてるのに、こんな密着されると

もうやばい。たぶん服脱いたら汗まみれだと思う。

「す、すみません……はい」

スツとお嬢様のお手が私の頬を撫で、ピトツと触れてきた。無意識にそのお手に自分から頬を擦らせてしまい。その自分の無意識を殴った。

「プツ……あの時のあなたならわからないけど、こんなに素直だったんだ」

ジツと瞳を見つめられ、またブワツと顔が熱くなる。ズイツと急に顔が寄せられ、ビクツと体が震えた。

「!? あ……お、お、おとおお、おとおお嬢様!? いったいn……」

「私のこと好きでしょ?」

ニコツとお嬢様の表情が変わり、逃がさないとばかりに顔を掴まれる。かつ言う私もお嬢様の肩と腰に手を置いてしまっているのだが。

「あ……いや……えつと……」

たぶん今の私は耳まで真っ赤だと思う。言葉を濁そうと必死に頑張つて言い訳みたいなことを言おうとしている。yesかの質問道というのに大丈夫か私は。

そうこうして時間を立ててしまったときだった。スツとお嬢様が私の耳元に口を寄せて言われてしまった。

「私は好きだよ。ううん、大好き」

そのとき脳に響いた言葉は私の正常な思考を奪ったのだとわかった。ドキツとしてしまったのもわかった。あまり自信がなかったからだ。まさかこんな風にお嬢様に告白されるとは思ってもみなかった。

スツとまたお嬢様が体を起こして私の視線に戻ってきた。それもさつきより顔が近い。

「……え? あ、私も……好き……です……」

ボソボソと小さな声でそう返すのがやっとだった。少し目をそらそうとしてもお嬢様は一回一回目を合わせて私の恥ずかしさをあおる。ニコツとした顔が気づけばニヤニヤ……うくんニンマリと言った方がいいのかな。可愛らしい笑顔だ。

「もう一回！もう一回言って！」

私の言葉を聞いたのに……意地悪されている気分だ。だけど嫌じゃない。むしろお嬢様に告白されたことが本当に本当に嬉しい。死にそうだ。いや死んでいるのかもしれない。

「……好きです」

またもやボソボソと確かにそういった。だけどそれでもお嬢様のニヤニヤは止まらない。

「もう一回」

「あー！もう！大好きです！心の底から愛してます!!!これでいいですか!？」

もうヤケクソとばかりにお嬢様にそういつて軽く叫ぶと、お嬢様のニヤニヤは一瞬のうちにパアアアと笑顔に変わった。やばい、鼻血だしてないかな。

いつもの金色の瞳が甘えた狼に見えた。普段は強暴で狩りをするのにも会ったら逃げろと言われるほどの狼が、人に懐いたときとのギャップだ。たぶんちよつとわかると思う。うん。

そうこうしているうちにお嬢様にギュツと肩を抱かれた。お嬢様にギュツと締め付けられ、体がゼロ距離なのに一心同体になるーつてくらいに密着した。

凹凸の少ないお嬢様の体は密着すると、顔にかかってくるお嬢様の銀色の髪や首元から甘く優しい匂いが鼻をついた。私もお嬢様の体に手を回して抱きしめた。ブワツと広がる心の中の独占欲が私の欲求を満たす。嬉しいし満腹だ。

ー数分後

気づけばお嬢様は寝息を立てていた。ゆっくりお嬢様を抱きかかえ、布団に寝かせた。幸せそうなお嬢様の顔が愛おしくてずっとこうしていたいなとさえ思った。

「お嬢様……失礼します」

そう言ってお嬢様の頬に口づけをしてしまった。顔が一瞬で上気して満足感があふれた。布団をかけ、窓を閉めた。お嬢様の髪を横によけ、おでこに布を乗せて、一度頭をなげて部屋を後にしたのだった。

「お嬢様、お休みなさい」

エリーの実力

「昨日はお楽しみだったね」

「ブツ」

せつかく稽古の休憩中だというのに静かに横に現れて一言めがそれだった。もちろんお茶を吹き出す。

「急になによお……」

我ながら彼女の登場には慣れたものの、彼女が発する一言一言には焦らないといけないことばかりだ。幸い一人で木陰で休んでいてよかった。

「いやあー、琴香もかなり大胆だったねーっと思ってさ」

隣にストンと座ったエリーの横顔はなんだか楽しそうだ。私からすれば嫌われるかもしれないというドキドキハラハラだったのに……。

「え……あ、あれは……その、なんていうか……勢いのままに……でもすつごくドキドキ……」

小さく微笑みながらエリーはこつちを見ていった。

「ほんと、お嬢様のことになるとはにかむんだから……ま、とはいってもお嬢様もかなりゾツコンみたいだし。もつと自信もってアプローチしてみるといいかもよ」

そう言っただけで笑いかけてくれた。お嬢様が作り上げたこの屋敷の基本的な住人の思考はとつても明るい。お嬢様はかなりの成功者だと言わしめるにはほかない。

「そういうえば、報告があったんだった」

そう言っただけでエリーは懐から一枚の紙を渡してくれた。一番最初のところに、専属メイド認定要項と書かれている。どうやら明後日の専属メイドのための試験の紙らしい。

「ま、試験とはいっても今のあなたの基礎知識と応用知識を軽く測る程度だから緊張しなくて大丈夫だよ」

「は、はあ……」

試験は明後日の午前と午後に分かれていて、午前は知識力の試験で

筆記と口頭によるテストで、午後はメイド戦術の稽古成果と実践テスト、この二つが明後日の試験要項だ。午前の試験では生活基礎知識とメイド基礎知識、専属メイドの心得と専門知識が範囲らしい。大体この間のうちに覚えたから明日か今日の夜に復習をかねてテストしておこう。午後の試験はどうしようもないので、今日と明日でやれるところまでやろう。

「ふん、まあ午後の試験は1週間の努力じゃどうしようもないからね。練習の一貫なればと思うけど、今日は私が相手になってあげよう！」

そう言つてエリーは立ち上がる。私よりも少し低い身長だからか、ちよつと子どもっぽいしぐさに見えた。

「エリー、よろしくお願いします」

ー稽古再開

周りにもたくさんの人が稽古を行う芝生にその一組として、私はエリーの前に立った。彼女は木のナイフをクルクルと回しながらアピールがてら投げたりしている。

一部のメイド達も専属メイドのエリーの動きを観ようと手を止めている人がいる。かなり緊張するな。ま、でも、船見さんに結構鍛えてもらったし、少しはやれるんじゃないかな。

上に投げたナイフをキャッチしたエリーはこちらを見て言った。

「準備は？」

「いつでも」

それを合図にエリーはふっと消える。あれ？私の返事の後つて普通「じゃあいくよ！」とか言うもんじゃないの？それほど現実には甘くないようだ。

とにかく頭を回して、現在エリーがいない前に身を移動する。テレポートは姿を消す技じゃない。自分の行きたいところを指定し、そこに瞬時的に移動する技だ。つまり、移動した瞬間はその場にはいないということ、だけど先読みされたら終わりなのも事実。

前に体を動かした勢いそのまま後ろを振り返り、エリーの存在を確認する。いた。

エリーと位置が入れ替わり、また対峙する。

「おお、テレポートを使うと思わず動揺しているうちにやれると思っただけ、動揺しなかったねー」

メイド戦術の基礎は身の回りのあらゆるものを使って対象を無力化する。しかし、これにはちよつと語弊があつて、別に魔法を使つてはいけないわけではない。だから翻訳するなら、とにかく危害を加える可能性の対象は無力化する。これにかぎる。つまり魔法も錬金術もなんでもOKというわけだ。

「まあ、一応メイドですから」

いや、普通戦うメイドはいない。お茶淹れて料理作つてお世話しかない。

「藍香、あなた結構面白いねー。気に入った、専属メイドの一人として、あなたのことみっちり鍛えてあげるから覚悟してねー」

陽気にエリーは笑つてそう言った。

エリーの得意分野はテレポートだ。いつどのタイミングでテレポートするのかわからない。とりあえず、どんな動きをするのか一度見てみたかったから、次からはその場その場でどうにかしよう。

エリーがナイフをクルクル回し始めるとともに、私も右足にくくりつけなナイフを取り出す。さて、力試しといきましょうか。

130分後

気づけば仰向けに倒れていた。背中に当たる芝生の柔らかさが気持ちいい。ていうかまぶしい。

「エリー先輩相手に25分持つとは……新入りさんかなり腕いいよね」

そんな言葉が周囲からいくつか聞こえてきた。負けたのか。

そんなふうに思ったとき、急に光をさえぎつて視界にエリーの顔が入ってきた。ふふんつと言つたような笑顔だ。

「お目覚めかな？足ひっかけた頭を強く打つたみたいだよ。大丈夫、体になんの支障もないし、ちよつと休めば楽になるよ」

スツと音がしてエリーが隣に座る。嗚呼、空が青い。

「琴香、腕はいいけどもう少し周りも見て動くことが大事だよ。あな

たの視線が私ばかり捉えてて基本的に周囲を見ていなかったよね。経験を積みれば積むほど、自然と地形を察知する力はずくづく、それはまず土台があつて基礎を積んでいかないとだめだからなのだ」

そう言つてエリーはポンポンと私の頭を叩いた。まだまだ稽古も甘いみたいだ。もつとがんばらなきゃ。太陽の光が急に気持ちよく感じはじめ、目を閉じたのだった。

紅茶とケーキ

エリーに敗北して数分眠った後、エリーのアドバイス通り、地形を念頭に想像して視界に確認しながら稽古に励んだ。何度かつまづきながらだつたけど、いつもよりもつまづく回数も減って動きやすかった。その代わりと言ってはなんだが、相手の動きも一緒に見ることが難しく、何度かナイフを当てられたりして敗北を味わった。でもかなり勉強になった。

先に入浴を済ませ、まだ日は落ちきっていないが夕食も済ませ、専属メイドの部屋で本を読みながらのんびりしていると、唐突にドアを叩かれた。

今日のお嬢様のお守まで1時間あるけど、誰だろ。冬実さんと未希は今日は屋敷にいないし、エリーはたぶんほつきまわってるし。ていうか、専属メイドならノックなんかしないか。

「はいはい」

本を閉じて立ち上がり、ドアの前まで来るとガチャつと開いた。開かれたドアの先にいたのは銀髪の短い髪で金色の瞳の女の子、文字通り、お嬢様がいた。

「こんばんは」

そう満面の笑みでお嬢様は言った。あれ、ソフィさんどこだ。

「え、あ……こんばんは……」

胸が小さくドキドキと脈打つのがわかった。やっぱり相当好きなんだな私。ていうか普通に挨拶しちゃったけどいいのかこれは。

「あ、あの、ソフィさんは……」

「早めの交代をしてもらうことにしたの」

ニッコリ笑顔でお嬢様はそう言つてのけた。ドキドキしてるのに、ひととき大きくドキツとしてしまった。

「あ……あ、とりあえず立ってるのもアレなんで……どうぞ中へ……」

ガチガチに体が固まってるのをなんとか動かし、中への催促をする。なんか共用部屋のはずなのに自分の部屋みたいになってる。

「ふふ、ありがとう。お邪魔するね」

コツコツとお嬢様は部屋の中に入っていく、私の専用スペースに迷うことなく進んでいった。私はドアを閉め、そのあとについていく。小さな仕切りの空間に、お尻が痛くならない柔らかい椅子を置き、小さな四本足の丸テーブルを設置し、簡易の応接スペースを設立した。お嬢様を仕切りの奥側に座らせ、共用のポットでお湯を沸かす。「こ、紅茶でいいですか?」

「おまかせするよ」

お嬢様は小さく足をパタパタと動かしながら私の図書館から借りてる本とかを凝視している。仕切りの専用空間にはベッドと大きくない収納箆筒と椅子が置いてあるのだ。箆筒の上に本とかノートを並べて保管している。

それと専用スペースには台所があつて、水と火を自由に使える。他にもいくつか調理器具とかもある。あとは食べ物とかを低温で保管するための冷蔵庫っていうものがある。全て地下の魔術結晶から発生する熱エネルギーの応用でまかり通ってるらしい。台所の水は地下から組み上げたものを屋敷内に水道管を通してまかなわれ、火は地下からのエネルギーを直接通し、つまみをねじると瞬間的に熱エネルギーを圧縮し放出する仕組みになっている。冷蔵庫は知らない。

冷蔵庫をカパツと開けると、中にケーキがあつた。そういえば、今日の午前に船見さんがケーキコンテストのための試作と言ってくれたんだ。ちょうどいいや、味見をしてお嬢様に出そう。

ケーキを取り出し、とりあえず2等分した。お嬢様の取り分に悩んだけど、半分を4つに分け、一つをお皿につけた。さらにもう一つを別でお皿に乗せ、一口フォークにとつてパクツと食べてみた。生クリームの良い舌触りとともにだんだんと感じる甘味、生地もふわふわでとてもおいしい。これなら大丈夫だ。船見さんに感謝。

お嬢様の分のケーキをお盆に乗せ、残りは元通りにして冷蔵庫にいられた。ポットがピューと音を出して湯気を拭いたので、紅茶の葉っぱを入れたティーポットにお湯を注ぎ、ティーカップとともにお盆にのっけてお嬢様の元に戻った。

「お、おまたせしました」

お嬢様は私のノートを手にとって、じっと目を動かしていた。私が声をかけると視線を投げかけて微笑んでくれる。本当に鼻血が出そうだ。

「ケーキ？」

「は、はい。厨房の船見さんからいただいたものですが……」

パタンとお嬢様はノートを閉じて片付け、少し身を乗り出すようにしてお盆の上を見る。

「きつとお口に合うと思います」

そうお嬢様に言い、お盆からティーカップを先に置き、ケーキを次に置いた。フォークはすでに皿の上だ。ティーポットを片手に持ち、お盆は自分の背中ごしの帯にひっかけてしまい。両手でティーポットを扱い、ティーカップに紅茶を注いだ。屋敷の管轄で生産されている茶葉はとつてもお湯への順応が早い。良い色合いが出ているし、何よりも漂う香りが鼻にきつくはない。船見さん曰く、ここの紅茶を飲むと外で紅茶は飲めなくなるそうだ。

「うん、ありがとう」

お嬢様はそう言ってさっそくとばかりにケーキにフォークをさした。小さくとり、口に入れた。最初は味わうように小さく口を動かしていたけど、一度瞬きする間に子供が目をつむって喜ぶような感じに満面の笑顔を浮かべてた。咄嗟に鼻を抑え、鼻血が出てないか確認する。幸い、出ていなかった。

「おいしい!!甘さが段階的で面白いわ!」

そう称賛し、二口三口と手が進み、あつという間にお皿の上は真っ白になった。絞めといえばアレだけど、紅茶に口をつけ、また笑顔を作る。

「やっぱりケーキは紅茶が一番合うね!」

お嬢様は一人ではしやぎ、一連の動作を終えた。

そして、ふと私に視線を移し言った。

「琴香は食べないの?」

メイドはお嬢様と一緒に食事を隣でとってはいけなないと指導されているので、さすがにそれは拒否しなければならなかった。

「申し訳ございませんが……私はお嬢様にお仕えする身ですので……」

「そう……じゃあ、私と同じものを私の隣で食べなさい」

「え？」

お嬢様はニコニコとした笑顔のままトンデモ発言をしてしまう。

「聞こえたでしょ？ 琴香、私の隣で同じものを食べなさい」

「で、ですが……ハッ!？」

従事者基本総則3条1、お嬢様に従事する者は全て、その命を何より優先とし行うこと。2、これは生死と過労、そのほか身体的精神的異常をきたすことの外であるときどんな規制や縛りにも問われない。

つまりお嬢様の命令は大半が強制実行だということ。そしてこのとき返さないといけない言葉は……。

「し、承知しました」

「それでよろし」

うんうんと頷くお嬢様は本当に嬉しそうだ。

―数秒後

お嬢様の隣に椅子を置き、ケーキを用意したわけだが、味見をしたあとが残っていて何とも言えぬ状態です。

「も、申し訳ありません……屋敷内の者が作った物とはいえ、味もわからぬままお嬢様にお出しするわけにはいかないと思います……ことに至った次第であります……」

ニッコリ笑顔をキープしたお嬢様がなんだか怖い。怒ってるの？ え？ 怒ってるの？

「気にしてないよー」

よかったー！ 普段の声音だし怒ってなさそうだ。

「それよりほら、あーん」

「!!？」

気づけばお嬢様にフォークを強奪されケーキを運ばれてる!？」

「え、あいや……お、お、おじようさま……さすがにそれは……」

「?……あーん」

なんだ今の疑惑の顔は!？ 私がおかしいのか!？ も、もうどうにでも

なっちやえ!!

「あ、あーん」

口を開けるとお嬢様はすんなりとケーキを食べさせてくれた。嗚呼、やばいエリーどっかで見てるよ……ソフィさんに知れたらどうなるのかな。

顔が火照って暑い。緊張とかのせいでケーキの味全然わかんないや。さっきまで甘かったはずなのになんかおいしいとしか言えないこの感覚なんなんだ。

―数分後

どうにか完食しました。ですが味を全然覚えてません。悲劇ですね。わかります。

「琴香、こっち向いて」

「あ、はい」

振り向くと唐突にお嬢様が迫ってきた。ビククリしたけど、間に合うはずもなく頬に感触だけ残った。

「生クリームついてたよ」

ニツコリ笑顔のお嬢様……今しがたなにをされたのか思考が3秒も遅れて理解し。ボシユツと湯気を噴いた気がした。幸い今回は気がしたただけだった。いつそこのまま倒れても良かったのに。

「琴香、大丈夫?」

今度は心配そうに上目遣いで見られる。コロコロと表情を変えるお嬢様はすごいや。私もう全然ついていけない。

「は、はひ……」

小さく噛み、返事すらもむちやくちやになってしまった。

「ごめんね、無理言つて」

「……い、いえ……こんな私でよければ……その………いつでも……」

自分でもなんだか言ってる事がおかしい気がする。

「なんだか今日の琴香、はにかんでばかりだね」

「……そ、そうですね」

少し落ち着こうと小さく深呼吸をした。

「ふう」

「そこまで私のこと好き？」

ビクツと体が一瞬震え、お嬢様に視線が止まった。昨日はちよつと意地悪したのは悪いとは思ってるけど、そのあとし返したじやないか。ひどい。

「も、もちろんです……そ、その……ほ、本気で心の底から大好きですから……」

ああ!!!穴があつたら入りたい!!!てか自分で掘ってもいいかな!?!いやもう火の輪つかでもいいや!丸い穴ならなんでもいいから通らしてください!!!

「琴香は正直でよろし」

お嬢様は嬉しそうに笑顔を作ると、照れ隠しか私の頭を優しくなげてくれた。

「私も大好きだよ」

お嬢様は戸惑いもなくまっすぐに私にそう言ってくれた。両想いだとわかつてるのにそういわれるたびにすつごく嬉しくてまた胸がキュンと締め付けられる感覚がした。

目を閉じれば今にも眠ってしまいそうなお誘いを我慢し、お嬢様をジツと見つめた。するとお嬢様はなんだか意を決するように一瞬口をつぐんだ。

「キス……しよっか」

「……はい……」

一瞬の間をあけて私はその言葉を容認したのだった。

―夜中

ジンジンと少し痛む唇に指を触れ今日あったことを振り返る。本当に今でも信じられないくらい夢のような出来事だった。布団に入っているのに寝付けなくてゴロゴロしてる。それでさつきエリーに寝なさいって叱られた。

お嬢様の言葉通りにどちらからともなくキスをしようとしたのは事実だ。今でも思い出すだけで胸がギュウギュウと締め付けられる感覚に陥るくらいすごい出来事だし……。

それで、お嬢様が近づいたとき、不意にお嬢様が椅子から滑って勢いよく頭突きをくらい、唇を切ったわけだ。結果、キスはできなかつた。そのあと仕切りが倒れてしまい、横で待機していたエリーが下敷きになるなど大変な事態だったのだ。エリーについては私の責任じゃないんだけど……。

と、とりあえず明後日……いや、明日のこともあるし寝ないと……次はうまくいくといいな。

お嬢様の視線

お嬢様との一件以来から2日がたった。いよいよ今日が認定試験、昨日はお嬢様のお守の時間のギリギリまでしつかり稽古の練習をし、お嬢様のお守のあとは復習して寝た。ちなみに昨日のお嬢様のお守は少し忙しく動き回っていたからゆっくり話す時間はなかった。

「専属メイド認定試験を3分後に始める。その前に説明をしておこう」

メイド長直々の監督のもとでの試験は行われるのだ。いつもなら特例がないかぎりこの認定試験というものはないらしいけど、屋敷の事業が大幅に拡大するということで、専属メイドを数人増やす方針に変わったみたいで、推薦者らしい数十人のメイドたちも来ている。

「今回は屋敷の進出拡大もあるため、専属メイドの枠が15人に増えることになった。そのためこの中から成績とお嬢様との面接を兼ねたのち10人採用する。試験は午前と午後、今から行う午前の試験は筆記試験だ。専属メイドとしての品格などの基礎的知識と屋敷に関すること等の知識を問う。午後は実技試験で、メイド戦術を使いこなせるかどうかを見る。以上だ。質問はあるか?……ないな。では試験開始は合図するからそのまま待つように」

そうやってメイド長は前で腕を組んで構える。威圧感みたいなのが半端じゃない。緊張してきた……。

―数時間後

机につつぷして腕を伸ばす。思ったより難しい問題が出題されてかなり考える時間を作ってしまった。ギリギリ完答は間に合ったけど正直不安だ。とゆか最終問題が超長文記述問題といやがらせのよくな感じになってた。

エリーと未希にはお嬢様の推薦だから落ちるわけない。と言われているがかなり心配になる。とゆか一番最後にお嬢様と面接があるのか。うまくやれるといいな。とゆかまで、軽食とっただけで実技試験だった。まあ頑張ろう。

そう思って伸びをすると急に目の前が真っ暗になる。目元がとつ

ても暖かくてどうやらだれかが目を隠したようだ。

「だあくれだ?」

また神出鬼没にこの人は……。

「お嬢様……さすがに試験会場まで来るのはいかがなものかと……」

その手を取って目元から外し、後ろを見る。今日も白いドレス姿のお嬢様、袖が広くなるように作られたドレスはお嬢様にピッタリな仕様らしい。露出が極めて少なく清楚らしさがうかがえる。

「私が誰に会いにきてもいいでしょー。今日はちゃんとエリーもいるし」

そう言っただけ私の前を見る。振り返ればエリーが満面の笑みで机に肘をついていた。

「お嬢様は仕方がないお人です」

そんなことを言うもんだからエリーのほっぺをプニッとつまんでやった。

「イデデデデ」

「そのステルス性をもつとちゃんと生かしなさい」

エリーは大体盗み聞きしにきたりするときだけ、かなりの正確性と隠密性で潜んでいる。この間だって仕切りの横にレポートしたらしいけど気づかなくて下敷きにしたし、その前はどうかクロゼットの影に潜んでいたらしい。

とゆか待てよ……もしかしてレポートを使える人って女湯とか簡単に覗けるんじゃない……またあとで聞いてみよう。

お嬢様が首に腕を回してきて後ろからギューッと抱き着かれる。

「ほえい!ちよ、お、お嬢様!」

ビックリしてエリーから指を離してしまう。エリーはつままれていたのにも変わらずすぐ表情をニヤツと変えて悪いこと考える顔になった。

エリーはその瞬間が早かった。わざとらしく顔を赤らめるようにして口元に手を当てて初々しいですなあみたいな表情を作りだす。

「おやおやおあ? 琴香ちゃんモテモテだねえ」

「後で倒す」

その間もお嬢様に抱きしめられ、体が密着する。お嬢様の匂いは正直、この前抱きしめられたときに覚えてしまった。その匂いが鼻を突いた瞬間からもう体中が暑い。

お嬢様の腕に手を添える。どうにか助けてというサインをエリーに目で伝えるが当の本人はお熱いですなあーつと言った表情をしている。しかも完全に目がわざとらしすぎてこいつわかっててやっていると確信、うん、あとで絞めよう。

少し目線をそらして右のほうを見ればメイド長が無言でこっち見ている。やばい、メイド長の無表情は見たことあるけど、あんなダダ漏れの威圧感見たことない。

そんな威圧感に対抗するように助けての視線を送ってみる。

「はあ……」

明らかに聞こえる程度の音量であのひとため息ついた。しどい！

コツコツと歩いてきてどうにか助けてくれそうだった。

「お嬢様、吹田は次の試験がありますのでお放しください。試験後はいくらでもそうしていかまいませんので」

まさかの私の後半の時間を全て売られた。

「わかったわ」

そう言ってお嬢様は離れてくれた。やばい、体中ベタベタ感がやばいんですけど、てゆうかまで真っ先にあいつしめところ。

「エリー!!!」

「おっと」

エリーの飛びつくも普通によけられる。すぐ立ち上がり自分の精一杯の笑顔で言う。

「覚悟しなさいねー!!」

「何のことやら」

「またもや飛びつくもテレポートで消えてしまう。」

「く、どこだ!」

「後ろー」

「バツと振り向くも今度はエリーが抱き着いてくる。」

「おわ、ちよこら」

腕も一緒にぎゅっと抱きしめられ抵抗することもかなわず。必死にもがいて脱出しようとした矢先、急にシユンとした顔で力は緩めずに私のことを見つめてきた。

「…な、なにその顔……」

「分かつてるくせに」

ふと抵抗を緩めた瞬間、エリーが顔を近づけてきた。

「え!? あ、ちよ、やめ」

咄嗟のことに抵抗できなかった私はギユツと目をつぶる。しかし何もなかった。むしろ急に開放され私は数歩後ろに下がった。

「エリー? 意地悪がしたいからってやっていいことと悪いことがありますよね?」

気づけばメイド長が私の前に腕くんで立っていた。私からは後ろ姿しか見えないけど、メイド長はおそらくあの冷徹な目だ。

「吹田はお嬢様が先約しています。先に手を出すのはいけません。相手なら私がいくらでもしてあげるわ」

そう冷たいようなツンツンとした声でメイド長は言うが、当のエリーはガクブルだ。

「そ、そんなことするわけないじゃないですかあゝ」ガクガクブルブル「ならよし。今後気を付けるよう」

そう言つてメイド長は部屋を後にしていった。お嬢様はニコニコとしながらエリーを見ていた。その視線に気づいたようでエリーは頭の上になに? の文字を浮かべていたのだった。

―午後試験

試験の方法は教えてもらっていないが、簡易なトーナメント形式らしい。上位30名は有力候補として認定され、そのあと有力候補など関係なく順位別に現役専属メイドと手合わせという形。それぞれの専門分野で勝負をすることが許されているため、魔法錬金系統ならエリーと冬実さん、剣や短剣、肉弾戦ならソフィさん、槍や長距離武器なら未希、人不足に限りメイド長が出てくる。今回のハズレはメイド長とソフィさんという話が受験者の間で言われている。

「じゃあ、予定通り午後試験を開始します。先ほど渡せた資料通りに

位置についてください」

冬実さんが司会をし、受験者の行動を促す。私はB―1のフィールドにつく。相手は自分と同じくらいの体格の人だ。メイド戦術は基本的に相手を無力化することを目的とした技だ。倒す技じゃないことを知っておかないといけない。相手がどれだけ違う分野の攻撃をしてきてもそれに対する対処はすべて同じ。無力化する。それだけだ。

「あのとときの新人さんが相手なのね。一戦目はもらつとこかしら」

まあ正直周りのメイドのほとんどは年数持ちの人ばかりだ。1週間もない稽古でどうにかなるレベルじゃないことは承知している。自分を信じ、頑張つて挑んで悔いのない成果を残そう。大丈夫自分ならできる。ほら、そこにお嬢様がいるじゃないか。頑張ろう。

「え？」

二度見したお嬢様が私のフィールドの隣で私を見ているのだ。緊張どころの騒ぎじゃないよ。負けたらどんな顔されるかわからないし勝たないと申し訳なくなる。絶対わざとだ。エリーめ吹き込みやがった。やつぱりあとで絞めておこう。

「それでは、午後試験開始！」

冬実さんの合図で全員が一斉に動き出す。お嬢様に気を取られていたせいで一步出遅れた。相手の武器は……あ、ちなみに今回は特殊な条件下のもと実践武器が使えるようになってる。当たっても痛くないがそれ相応の衝撃を与えることで相手の気力を削ぐといったものだ。立てなくなつたら相手の勝ち。制限時間は無制限。

「新人さん！覚悟！」

相手の武器は短剣、数は三つ、刃渡りは14cm程度、木のナイフより少々長いものだ。肩書も大事だが、一番は相手の出方をどうとれるかだ。とにかく振られる隙を見てこつちが早く動けばいい。手を抑えて殴つてもいい。短剣を奪つて攻撃するのも手だ。こつちのほうがいいかもしれない。

相手が間近に迫つたところ、空中に一本浮いているのを確認した。どうやら熟練技術で獲得した技があるようだ。正面のナイフだけで対

抗していると見せかけ空中からのナイフも利用した戦略だろう。きつと少し相手は私を舐めてかかっているナイフの数くらい確認し
といてよかった。

「……」

無言でふうと息を吐き集中する。お嬢様にみられている意識もあつてかかなり集中しやすい。たぶん緊張してるのかな。

「やー」

振られるナイフを低姿勢で相手の横に移動するついでによけ、脇腹に肘を一発かます。

「ぐへっ!？」

変な声をあげて相手は一瞬体制を崩す。エリーの動きのほうが早い。

パシツと上から降ってきたナイフをキャッチする。相手はおそらくコンボ技みたいなのを考えていたようだけど、一瞬の隙についてその考えも崩れたみたいだ。目が本気になった気がする。握り心地は悪くない。だけど少し大きいか、私の手には合わない。ま、あるだけいいか。

エリーに逃げ腰じゃ駄目だ。と指導をいれられたため姿勢を低くし動きやすい体制を維持する。ナイフを背中の中帯にひっかけ、相手の出方を見る。

「新人さんやるね……ちよつとふざけすぎたかな」

そう言つて相手は両手にナイフを持ち直し、突撃してくる。

今度は不規則になるよう考えたのか、体を回転させながら切りかかってくる。けどまだ大丈夫だ。振られるときに焦つたのか近すぎだ。簡単に相手の肘を抑え、ナイフを一本叩き落とし、咄嗟に出したナイフで少し戸惑いながらも背中を思いつきり切りつけた。メイド服に亀裂が入り、入り綺麗に一本線が入ってペラツと肌が見える。どうやら肉体的な物理ダメージはないらしい。血は出てないし。

「うわあ……こんなだるくなるの……」

相手はそう言つて振り返りナイフを構えている。叩き落とされたナイフは場外に蹴り飛ばしたためもう使えない。

「……」

少しフラフラとした足取りで相手はどうかこつちを見る。少しボーツとしたような顔つき、切りつけたダメージが大きかったらしい。そういえばかなり正確な実戦状態を生み出す魔法でルールが決められているから、槍で突かれればそれなりの疲労が体にかかるみたいだ。私はゼロ距離から思いつきり切りつけたから相手もそれなりのダメージを負ったらしい。武器は全て魔法を念入りにかけて支給されるものだから大丈夫、ただ、肉体的な攻撃の場合は一応物理ダメージをあるみたい。すぐに治療されるらしいけど。

「降参は考えませんか？」

「考えるわけではない」

即答だった。仕方ない。ルール通り倒してしまおう。

そして今度はこつちから突っ込んで行き、相手に振るうナイフの腕をつかみその手からナイフをかすめ取り、場外へ投げる次いでに相手の足をすくい転ばせる。我ながら思うけど相手を転ばせるのが上手な気がする。なんとなく足のどの方向からとれば転ぶかがわかるのだ。

そのまま上に乗る、持っていたナイフを首元に当てる。

「さて、降参しませんか？」

「わかったわかった」

私の始めの午後試験はこれで終わったのだった。

決戦とお勉強日和

正直自分がこの1週間だけでここまで戦えるようになったのは驚きだ。ナイフの位置がよくわかったり、相手の動きの予測がある程度できたり、自分はそういうセンスがあるのかもしれないと疑ってしまう。

でも残念ながら2戦目は惨敗だった。相手の次の動き次の動きと見ていたら開始30秒で数回切りつけられるという状況、1戦目では一度も切られなかったからわからなかったけど、なんとというかね、切りつけられたところからだるさがあふれるように……こう、ガクンっていうのかな。そんな感じに疲労が襲ってくるんだよね。

「はあ……」

金属同士の鋭い音が響くフィールドで私は敗者席に座っていた。敗者同士で勝負をして下から順位を決めていくのだ。私は2戦目で敗北したから結構下のほうになる。ちなみに受験者は同じ部屋の人だけかなっと思つてたけど、実は別の部屋や屋敷の管轄の別拠点でも行われていたみたいで、今日の前にいる人だけじゃなく、別の地でも受験者がいるらしい。ちなみに私のいるところだと150人くらいいる。

お嬢様は私が2戦目の途中で準備があるからーっと屋敷の中に戻って行ってしまった。

ま、どつちにしろ次の1戦で私の順位が確定するからあとはブーツとしておくだけだ。

ー数時間後

ようやく決まった。最後の1戦はうまく攻め倒すことができた。順位は120位だけだね。最後は現役専属メイドとの勝負なのけど……私の相手は運悪いことにメイド長なのです。まあどつちにしろ嫌でもソフィさんになる可能性だったんだけどね。周りのメイドさんから「新人さんハズレひいちゃったねー」って言われるし。まあいいや。

しかも順位的にも後ろなのになぜか一番最初にメイド長の前に立

つことになるといふなんなのこれ……見世物じゃないよ。

「あら吹田、どういふくじ引きをしたのかしら？」

腕を組んで余裕のある笑顔のメイド長を前にギョツと拳を握る。

「扱える武器が一つしかないんで……」

「そうだったわね。まあいいわ。70%手加減してあげるからかかってきなさい」

そう言つてメイド長は軽く足を開いて完全に上司感満載の仁王立ちをする。なんだこの威圧感は……目の前の人がまるで巨大な壁のように見える。

「くっ……では行きますよ!!」

私に迷う時間なんかない、やるかやらないかだ。早速ナイフを構え突つ走つたのだった。

↓

気づいたときには体は空中に浮いていた。あれ？さつきまで地に足をつけていたはずじゃ……考えろ、何があつたかは知らないが次の動きを……。

上を向くとすぐそばに地面が向かつていった。咄嗟に両手で受け身をとリ、ゴロゴロと転がった。どうやら地面にも魔法がかかつているみたいで、受け身が軽い疲労感として体に伝わった。

「ッ!？」

すぐ立ち上がり前を見ればすでにメイド長が迫っていた。ナイフは……落としたか、回避は……てかここフィールドの端っこだ。仕方ない。

「はあ!!」

メイド長も少し驚いたように一瞬目が開いた。よけるのではなく、逆に突つ込み体当たりをかます。

「ふっ」

結局空振りに終わったがメイド長とまた対等に立ち会う。まだ始まって20秒も経ってないぞ……。

「はあ……はあ……」

落ちていたナイフを即拾い、もう一度構える。

「……まだ……いけますよ」

メイド長は興味深い顔をして「いいわね」と言ってくれた。余裕のあった笑顔が崩れたのが今のところ一番のやりがいだな。

「今度はこっちからよ」

そう言つて今度は突っ込んできた。上がり気味だった腰をもう一度深く落とし、動きを見ることに集中する。まるで予測のできない突っ込み方ほど怖いものはない。うまくよけて攻撃を……。

「よし」

それが私の最後の一言になったのは言わずとも知れたことだったのは仕方ないことだった。

まさかメイド長も武器を持っていたとは……予測してなかったわけじゃないけどひどすぎる。とゆか先に二つ武器を持っていたことを忘れていた私の方が悪いか。簡単に言えばいつの間にか盗られた武器を攻撃に使われて完全な敗北だった。

それを再度思ったのはメイド長との決戦のあと1時間後だった。

―面接待ち

お嬢様との面接は非常に長いものだ。専属メイドとの決戦が終わった後のメイドからどんな面接に行っているのだが、その順番もまだまだ長い。私はメイド長との戦闘後からかなり寝てしまっていたから、夕食とお風呂を済ました後から行くことにしたのだが、まさか最後尾になると思わなかった。

さつきエリーから聞いたのだが、お嬢様が言っていた準備というのは、早めの食事と入浴だったそう。あとは部屋の設営などとか。とゆかエリーに最後尾の番号札を渡されたときなぜかかなりニヤニヤしてたけどなんだったんだろう。なんとなくわかるけど。

まあどつちにしろ就寝直前くらいまでは暇だろうよーって言われたから勉強でもしておこう。

―図書館

そう思つて図書館に来たのだが、意外と人が多い。昼に来るより多いのは当たり前か。たまには他国の歴史書とか読んでおこうかな。

―1時間後

バアーツと地図を広げていろんなものを確認する。そういえばこの屋敷の敷地面積は測りしれない大きさで、屋敷の周りの山のほとんどは全てこの屋敷の敷地らしい。それとお嬢様の計らいもあってここは一つの国としての成立しているらしい。ただ、国とはいっても入るために入国審査みたいながあるわけではなく、言うなれば私有地のような感じに存在している。まあ簡単に言えば、国に縛られない自由な土地だ。

じゃあ国から税をとられないようにするために、そこを買い取ろうとする人や無断で利用しようとする人がいるんじゃないか？ と思ってうかもしれない。当たり前だが、一応規則は存在しているから大丈夫。詳しいことはまた後程。

屋敷を円に囲むように6つほどの国が並んでいる。北の一国は巨だが敵対が強くあまり他の国と交わることが少ない。東にある二つの国はとても仲が良く、取引もほとんど依存しあっている。おまけにお互いがまったく逆の環境にあるおかげで、サイクルの取引が主流だ。南の国は熱帯にさらされる国で、胡椒を良く流通させている。国々の流通はかなり盛んだ。西の二つの国は互いに敵対が強く、毎日上げ足の取り合いをしているといわれるほど行きかいする情報にはあることないこと書いているらしい。戦争がいつ起こってもおかしくない状況にあるらしいから、屋敷の者も相当なベテランしか派遣されていかないらしい。

「あ、琴香ちゃん」

後ろから声が聞こえて、振り向けば未希がいた。

「未希ちゃん、お疲れさま」

「琴香ちゃんこそ、友美さんにあたったのは不運だったけどね。まあ大丈夫だよ」

そう言つて未希は小さくうんと頷く。そういえば未希はどうしてここに来たんだろう。周辺の国じゃ髪も瞳も真っ黒な人種はいないに等しいんじゃないかな？

「聞いてもいいかな？」

「？なんでもどうぞ」

未希は小さく首をかしげてそう言ってくれた。

「未希はどうしてここに？」

「ああ……そうねー。5年前、親に売られたの、お金のために」
「……」

似たような境遇の人が多いつてきいたけど私よりよっぽどひどい人のほうが多い気がするな。

「まあ……結局お嬢様に救われて今こうしてるけど、お嬢様がいなかったら今頃もう生きてないんじゃないかな。だからお嬢様には感謝してもしきれないし、こんな恵まれた環境で生活ができてるのもお嬢様のおかげだし、私ももつと頑張らないとって思うとね」

一瞬暗い顔をしたけど、お嬢様のためにといいるところでとっても良い笑顔を作ってくれた。

「おろ？お二人さん何の話をしてるのー？」

急に間を割ってエリーが入ってくる。

「急にびつくりするなもう」

「この間より精度良くなったわね」

エリーは照れるように笑顔で頭をかいた。

「お、そうだそうだ。琴香、お嬢様の順番が次だよー」

「それを先に言いなさい」

「あいてえ」

ペチツとエリーの頭にチョップを入れて立ち上がった。

「じゃ、二人ともごめん、行くねー」

そのまま図書館を後にしたのだった。

「あの時は辛かったね」

「あら？聞いてたの？」

「まあね。私もまだ入りたてで未熟だったから助けるのに時間かけすぎて結局悟られて……そのせいであんた体……」

「気にしないで。あんな状況の中で生きていることすら不思議だったのよ？身体の機能不全と損失くらいどうってことない。それに……できるたびに未熟なのに引きずり出されて目の前で殺されるあの感覚は……もう誰にも味わってほしくない。そのために私……私たち

「はいるのだから」

「……」

「まあ、なんにせよ。生きているのよ？過去は取り戻せないわ。あなたが気にすることじゃない。最近、藍香ちゃんが来てから自分が変わった気がするわ。あ、そうだ。エリーこのあと一緒に風呂行こう？」

「……ああ、わかった。行こう」

決意と誓い

屋敷は本当に広い。図書館から面接が行われる部屋まで走っていると息が切れそうになるくらいだ。とゆか、図書館からここまで一体何個部屋があっただろうか。数えるのも億劫になるくらいあるのは間違いない。

綺麗な木目のドアをコンコンと叩き返事を待つ。一応面接は何回も経験済みだからある程度の知識はあるつもりだ。

「どうぞー」

陽気そうな明るい声の中から聞こえた。言わなくてもわかるお嬢様の声だ。

「失礼します」

中に響くように声を上げ、金色の取っ手を捻った。ガチャツと音を立てドアは開き、中が見えた。お嬢様の部屋と似たような作りになった部屋に一步入る。ちようどドアの正面の前の方にお嬢様が机に両肘をつけて座っていた。

ああ、今朝より一段と美しい。結ぶ必要もなく整えられた銀色の髪に、ちようど一週間前に私を引き取りに来てくださったときの服の白い服を着たお嬢様だ。

カチャツとドアを閉め、自己紹介をする。

「新人メイドの翠田琴香です。よろしくお願ひします」

そう挨拶をするとお嬢様は頷いて笑顔を浮かべた。

「よろしくね。どうぞ、座って」

お嬢様に促されるままに、目の前の椅子に座った。やっぱり面接はイマイチ慣れないものだ。きつと目の前の人がお嬢様じゃなくても、鼓動はドキドキとなるだろう。ドキドキと響く鼓動を聞きながら頭を回す質問の回答がなんであれ答えられる。

「琴香、この一週間で一番心に残ってる思い出を教えてください」

非常に私事な気がするな。ちよつと予想外だったけど、まあいいか。とゆか待て、一番心に残ってる思い出って言われても、お嬢様とのドキドキなやり取りしか思い出せないんだが、確かに船見さんに

ケーキ作ってもらったりしたけど、それ以上に強烈インパクトが強かったし、なによりこの場でそれ聞いてくるってどういうつもりだ？ 確信犯ですね。わかります。

「お嬢様との専属メイドの部屋でのひと時が心に残っておりますう……」

少し言葉を濁す様に早口でそう言い切った。いつでもどこでも会うたびに胸が高鳴る人と過ごしたあのひと時は非常に濃い味だった。

予想通りと言った感じに小さく歯を見せてお嬢様は微笑んだ。両肘をついてまるで同世代の人をからかうような楽し気な雰囲気だ。

「私もとっても心に残ってるよ」

あれ？面接だよな？

「大変嬉しく思います……」

次の言葉がなかなか思い浮かばず無意識に返してしまう。もう少しうまく返せた気がするけどな。

そう返すとお嬢様は急に立ち上がって、こちらに来た。

「次の質問だよ。琴香」

そう言ってお嬢様は私の目の前に立った。私が座っていることもあって見上げる形になる。久しぶりにお嬢様に威厳があることが自覚できた気がする。最近は甘えたような視線をされることが多かつたけど、やっぱりその瞳の色は確かに人を黙らせる力があるように感じられる。

姿勢を直し、しっかりと目を合わせて次の質問を待つ。

「好きな人はいる？」

なぜ今更に質問を……てかもう面接じゃないですよ。パツと答えるのが面接ってなもんなんだけどな。そんな質問をされたら私的には何とも言えなくなってしまう。しかも相手はわかっただけでやっている。あんなことまで提案してたのにまたこの人は……気まぐれだな。

「……います」

少し答えに自信がなかった。明確に人を指した方が次の質問を省けて効率的だったかもしれない。でもあえて“そういう雰囲気”を

味わってみてもいいかもと思えてしまったのだ。

「その人の事、どのくらい好き？」

少しニンマリとした表情が可愛らしい。もちろん私にとってお嬢様は他に置き換えられない愛を向けている人だ。

「この命に代えてもお守りできるくらいに好きです。いいえ、愛しています」

我ながらそんな言葉をハキハキと言えたのは称賛に値する。どうやらここぞというときは恥ずかしげもなく言えてしまうのかもしれない。心の中で赤面でもしとこうかな。

「そう、じゃあ誰が好きなの？行動で示してくれたら嬉しいな」

そう言っている途中で、お嬢様は顔をドンドン赤くしていく。お嬢様にとつても結構恥ずかしいことなのか。とお嬢様のそんな一面に少々愛おしさを感じる。

てかちよつと待て。行動で示すって……。

「つ、つまり……」

「言わなくてもあなたならわかるでしょ？」

そう言ってお嬢様は一步下がって自信満々のどや顔を披露する。あ、これやばい死んでるかも。

無意識にスツと立ち上がる。待って！私の体！精神が追い付いてないからもうちよつと待って！ちよ、止まれれば、おい！

お嬢様の目の前まで寄り、その両肩を優しくつかんだ。今だにどや顔のお嬢様を近くで見るとは私のライフゲージは短すぎたようだ。すでにお嬢様のドアップ顔を焼き付ける記憶域は存在しなくなっていて、気づいたときにはお嬢様を抱きしめていた。

柔らかいお嬢様の肩を抱くと、これでもかとお嬢様の匂いを感じた。まるで密室でカレーを作ったときのあの最悪なイメージを最良にしたような感じだ。なにが言いたいって？ごめん私もわからない。

今告白してしまおう。

「お嬢様、聞いてください」

お嬢様を抱きしめながら、その耳元に問いかける。

「なあに？」

お嬢様もそのままの体制で返事を返してくれた。

「お嬢様、私、翠田琴香はお嬢様が好きです。心の底から愛しています」

お嬢様はそう言って肩越しにもわかるくらい嬉しそうに笑った。自身の顔がひどく熱くなる。

「ふふ、私も好き、お返しに私の名前を教えてください。エトと友美にか教えてないから、私たちの秘密だよ？」

そういえばメイド達の間でもささやかれる話だ。誰もお嬢様の名前を知らない。聞くこと自体はタブーではないけれど、絶対に知ることはできないといわれている。自分は特別、そう思うとさらに自分は愛されているのかという思いが強くなった。

「はい」

「エリス・ラピスラズリⅡ望月、私の名前だよ。姓はラピスラズリⅡ望月でエリスが私の名前、内緒だからね？琴香」

お嬢様の名前を知った。もう後戻りはできないと感じた。戻ることもないだろう。いやお嬢様に助け出されたその時からもうお嬢様との人生は決まっていたのだろう。本気でお嬢様を守り、本気でお嬢様の実現せんとすることをサポートする。まだ私は未熟で弱い、今日から始めよう、近距離戦術の研究と経済経営に関する知識の収集、今までとは比べものにならない時間もかかるだろう。メイド長とまではいかなくても頑張ろう。

「お嬢様」

お嬢様を見つめ直し、決意を言っておく。なんだかブーツとした表情をしていたお嬢様はすぐ真剣なまなざしになった。

「私はまだまだ未熟ですが、いつしかお嬢様の役に大いに立てるように頑張らせていただきます。どうかこれからもよろしくお願いします」

「琴香、その言葉忘れないでね。あと一つ忘れてる。私の事幸せにしなさい」

「もちろんです！」

そう返し、再度お嬢様をジッと見つめる。お嬢様も合わせて目を合

わせてくれる。ゆつくりと顔が近づき、今度は確かにお嬢様の顔を記憶に焼き付けることができた。

『ん』

お嬢様の唇は柔らかく、この世にこんな感覚をもたらせるものがあるのかと正直驚いた。胸の内から溢れるように何かが満たされるのを感じた。食欲でもないそれはきつと誰もが持つものだろうけど、まだその正体については私にはわからなかった。愛情は依然よりも増したのは感じたけどね。

“ お嬢様、私の全てを捧げてでも幸せにしてみせましょう ”

唇を重ねるだけのキスを交わし、もう一度ギュツと抱きしめたのだった。

一翌日

私は現在食堂の壁に掛けられた巨大看板の前にいた。成績順に合否結果が並べられた専属メイド採用者報告看板だ。一番下ではあったけど、私の番号は入っていてひとまず安堵の息をついたのだった。今日から正式に専属メイドだ。愛するお嬢様のためにこれから人生を捧げていこう。

第二章　メイドとお嬢様 予告

こんにちは、望月大公嬢様の専属メイド翠田藍香こと翠田琴香です。本日より3ヶ月前に新人メイドから専属メイドに昇格採用されました。

採用が決まった後日からは特別鍛錬枠の時間が組まれ、専属メイドとしての知識と体づくりに励みました。内容としましては、メイドとしてのより深く細かい作法などです。体づくりのことについては、女性を主張している程度の強靱な身体能力の取得ということで、メイド長友美さんの指導のもと、他国の国家所属師範家様方と提携した鍛錬を行いました。

そんなこともあって、私もかなり強くなったものだと思います。3ヶ月前の地形を把握するとか、そんなちっちゃなレベルじゃないですよ。

ま、そんな話は置いてですね。今日はお嬢様の日を1週間程度に渡って分析しようと考えています。なんでそんなことになったかと言うと、画面の前の皆さまもきつとお嬢様がどのような生活をしているのか気になると思うのと、この私自身が気になるからです。どっちかっていうと後者が一番影響しています。

そんなわけで、明日の5時より開始です。では、おやすみ。

ー

「ごきげんよう船見さん」

浴場に響く綺麗な発音の声が私の名前を読んだ。この声を忘れるような人間がこの屋敷の使用人に何人いようか。いや、いないだろう。

スツと立ち上がりすぐ振り向いた。

「お嬢様、今日も一段とお美しく……」

「まあまあ、気楽にいいよ」

そう言っって手を軽く上げて制したお嬢様は、髪を肩にかかる程度ま

で伸ばしておられた。そういえば藍ちゃんも正式に専属メイドになつてから切らなくなつたようだと言いたな。

お嬢様はチャポチャポと小さな音を立てて私の隣に腰掛けた。私もゆつくりとした動作でそのお隣に腰掛ける。そういえば専属メイドの姿が見えないな。

「お一人とは珍しいですね」

「んー、まあたまにはね」

お嬢様は足をグツと伸ばしてリラックスする動作をする。最近得たメイド情報を思い返しても別になにかしたわけじゃない。本当にお嬢様は気分で来ているのだろう。

「船見さんは、今の生活どう？」

お嬢様はいつもの明るい声のトーンを何段か落としてそう聞いた。「私もお嬢様に救われた身ですので文句の一つもありません。ですが、大好きな料理ができる生活は今でも夢を見ている気分です」

私の過去は置いて、お嬢様に対するこの思いは全て本当だ。お金を持って余して遊びに手を焼く貴族と比べれば、下人のはずのメイドと同じ食事をとり、同じ卓に椅子を置いたりもする。しかも下手をすればメイドの仕事の場に現れては自分も精を出そうとしたりするのだ。昨日にお嬢様が料理をしに来たのはここだけの話だ。

「そっか、それならよかつた。時々不安になるのよね。お父様たちがしていた奴隷に対する態度に反発して、奴隷や貧民の人達に働く場所と生活する場所を与えている。そんな自分はみんなから偽善者だと思われているかもしれないって、不足させられた体のまま治すこともできないのに働かせ生かしている最低な人間だって……」

お嬢様の言葉は暗くポツンポツンと雨を落とすようにつぶやかれた。お嬢様は、昔はとにかく前に前に進む性格で、こんな弱みを見せるような人じゃなかった。もつとこう、自分の思う理想をかなえるのに前向きで突っ走る人だった。

「大丈夫ですよお嬢様、みんなお嬢様のおかげでやりたい事をして今生きているのです。それに前の生活ならできなかつた恋も趣味も読書も研究もせんぶ、自由なんですから、きつとお嬢様をそんな風に思

うような人なんていないですよ。きつと」

お嬢様は藍ちゃんに来てから何か変わったような気がするな。でも私たちのご主人様は弱気な人には務まらないから、いつでも強い自信を持っていてもらわないといけない。それに、お嬢様は間違ってなんかいない。

「そうかな……そうだよ。あなたたちが言うならきつとそうだよ。ね。ごめんね、私はもつと強くないといけないみたい」

前に向き直し、きれいな星空を一瞥して軽く目を閉じて小さく頷いた。お嬢様は賢く優しい人だ。きつともうわかつているだろう。自分がどういう人であらなうといけないか。

「みんな、お嬢様に不満なんて一ミリもありません。私から自信を持って、なんてことは言えませんが、みんなを信じてあげてください」

お嬢様にそう言って、お湯を肩までつかり直した。

「ありがとね。船見さん」

お嬢様は先にお湯から上がり、ピチャピチャと音を立てて急ぐように浴場を後にしたのだった。

「いるんでしょう?」

「あらあ……ばれちった?」

自然風景を模様作る壁の陰から頭を搔いて専属メイドエリーが出てきた。

「最近の専属メイドはお嬢様を不安がらせる行為を無意識に行うのかしら?」

「そういうわけじゃないよ。お嬢様も心の内に春が来たから、そういう感情も出てくるんじゃない?」

エリーはよくわからない例えをポンポンと出してきた。

「春が来たの?」

「そう、春」

横目に見れば割と真剣な顔をしている。なんだこの人。

「ふーん、何でもいいけど、お嬢様のフォローをしつかりしなよ」

そう言って前に向き直った。

「まかせときな……とところで船見さん、また胸おつきくなつたん

田舎娘と招待

お嬢様の朝は基本的に誰よりも早い。一応朝番ということ、お嬢様の護衛を専属メイドは行うのだが、誰かが起こすわけでもなくお嬢様はかならず同じ時間にいつも起きる。

十数人の専属メイドが毎回交代で、この業務は行う。話し合いの結果どうにか今日一日私がお嬢様の横につくように仕向けることができた。お嬢様の一日に密着しようと思います。

「琴香、ボーツとしてどうしたの？」

ふとお嬢様が振り向いてそう尋ねてきた。今は朝6時少し過ぎたところだ。すでに白に薄緑と黄色の線が入ったドレスを着て、朝の紅茶を飲んでいるところだ。朝の眠気を少し残した瞳が私を見据える。いつみても透き通るようにきれいな輝きのある金色だ。

「いいえ、いつ見てもお嬢様はお美しいお方だと思ひまして」

少し微笑んでお嬢様は言う。

「ありがと、琴香もとつてもきれいよ？」

少し顔に血が上るのを感じながら、表情を笑顔にして返した。

「嬉しいかぎりです」

お嬢様は目を一瞬見開きかけたのを私は見逃さなかった。

「私の勝ちですね」

すぐにそう返すとお嬢様は少し残念そうな顔をしながら紅茶を一口飲んだ。

「もつと難易度を上げてみようかしら」

少し寂しそうな声音をさせながらもお嬢様の口元はしっかりと微笑んでいた。

ー

「ほー」

朝というには昼という時間に、子どもっぽい威勢が良く元気な声が農場に響く。もちろん慣れた手つきで行うメイドや使用人は声なんて出すことはない。あつても一息ついたときの声くらいだ。

ならば誰なのか。想像がつく。労働とは本来無縁であるはずの者

は屋敷にはたくさんいる。しかしそのほとんどはしつかり役割があり動けない者しかおらず、唯一自由にどこでも行ける者と言えば、ただ一人、お嬢様だ。

「やっー！」

熊手や鍬を数人の作業者が扱う中、まだまだ不慣れな感じを残すようにお嬢様はそれを振るっている。もちろんドレスで作業なんてさせられないから、仕方なくお嬢様は動きやすい服装だ。え？どんな服装って？

そりゃーもちろん、白地のワンピースに麦わら帽子の定番でしょう。田舎っ娘にはこれが一番似合うし動きやすい。なにによりお嬢様は可愛いのだ。なにを着させてもいいだろう。え？農作業にワンピースはどうなのって？ふーん……アリ！ですぬ!!

もちろん専属メイドである私も同様に農作業に参加する。ちなみに農場は屋敷の敷地から少し離れた山沿いにある。広大な農地は屋敷従事者と各国の情報拠点の食を支える非常に重要な場所だ。米、小麦、野菜そのほかもろもろをここで育て、収穫する。

農場に併設するように宿舎があり、それを中心に農産、畜産、水産ができるような形になっている。海もないのに水産があるのはどうしてか。それは遠くで収穫した魚を建物内で養育し、増やし、収穫を繰り返すからだ。実質収穫したというのかはさておき、意外と規模を大きめでやっていることもあって収穫率は悪くない。畜産はとても活発だ。肉や卵、動物の毛皮などは加工して服にして売ったりなどして外国貨幣の取得を増やすのに使う。

まあ正直為替業担当者が優秀すぎるから外国貨幣も売って手に入るほど困ってはいない。まあ食料確保の方法はこれ以外にもたくさんあるから紹介しきれないんだけどね。

「そろそろ休憩にしましょうー！」

農産担当者が休憩を促すと各々手を停めて宿舎の方に戻り始めた。お嬢様も鍬を置いて「ふう」と小さく一息ついた。

「お疲れさまです。お嬢様」

汗で光り輝く銀色の髪をなびかせてお嬢様は振り向いた。白いワ

ンピースに似合う銀髪を揺らして振り向いたお嬢様は額に首に大量の汗をかいていた。だけどその顔はとても笑顔で楽しいことを見つけた子どものような笑顔だ。

「とても楽しかった。お腹すいたー」

素晴らしいながらタオルでお嬢様は汗をぬぐう。嗚呼、その姿も美しい。

ー

宿舎は屋敷ほどではないが意外と大規模なもので、巨大な食堂と複数の部屋からなっている。食堂は屋敷ほど豪華ではないけど、とれたての作物を一番に食べることができる。つまり、新鮮だということだ。

「お嬢様、お疲れさまです」

「お嬢様、これどうぞ」

「お嬢様、肩はこってませんか？」

食堂に入ると普段は屋敷にいないメイドや使用人がお嬢様を取り囲んだ。

「大丈夫よ。ありがと。みんなもちやんと休憩してね」

実はあとから聞いた話、私が歓迎会の時に見た屋敷の食堂を埋め尽くすメイドや使用人は、総人口の何割かにしすぎないらしい。屋敷に仕える人、各国の拠点に仕える人、生産業に従事する人、まだまだ役割はたくさんある。

「これおいしいわね。この黄色いお漬物はなに？」

「それは沢庵という大根の漬物らしいですよ」

お皿にはおにぎり二つと沢庵三つ、柴漬けが一盛といった感じに盛り付けられている。人によっては苦手なお漬物とかはあるだろうけど、お嬢様は意外となんでも食べる。

「ふむ」

お嬢様は一瞬だけ間を開けて、ふいにつまんでそれを口に入れてしまった。まあおいしいのはそうだから何とも言わないのだけだね。

「ん、甘いね」

そう一言お嬢様は感想を言い、おにぎりを頬張り始めた。お嬢様の

お口には少し大きいおにぎりを両手で持ち、てっぺんからパクリと食べってしまう。

少し笑顔を浮かべながらゆっくりとお食事をする姿は、やはりお嬢様だと思う。心なしか周りの使用人たちもその姿に目を奪われていくように感じる。

やっぱり屋敷の者ならどこで従事している人でも共通してお嬢様を見るのだなと思った。

1

言い忘れていたが、ここで一応振り返っておこう。再三いうが、お嬢様の朝は早い。専属メイドが隣にしようといまいと、必ず6時になるころにはドレスに着替えられ、紅茶を飲まれている。また不思議だと思っただろうけど、実はお嬢様のドレス、一人でも着替えられるようになってきているのだ。まあ、詳しいことは内密なのだけだね。

「ご報告します」

日が暮れ、外が赤くなり始めた時間、午後の執務中にメイドが一人入ってきた。

「どうしたの？ヨルム」

お嬢様が筆を置いて、そうメイドに話しかけた。彼女は専属メイドの一人で、エルフと人のハーフだ。ただ、耳は尖ってないし、羽もない。人と変わらない姿のいわゆる異形態らしい。本来、エルフの遺伝子はとても強く、人よりもエルフの姿に近いらしいが、何かしらの異常で彼女は人とほとんど変わらない形で生まれた。

ただ、記憶力と薬学に関する知識、そしてそれを応用した錬金術が非常に得意で、一応屋敷内にいるエルフラ同等もしくはそれ以上の素質がある。

「先ほど、西の国の者が来られました、お手紙を届けに来られたのです。確認したところ、有力な貴族方のお集りの催しがあるので、ぜひともご参加のほうをと言った内容でございました。こちらにそちらの文章を」

そう早口に告げヨルムはお嬢様に手紙を手渡した。大きすぎない巻物の手紙だ。

「ふむ」

スーツと地図のようにお嬢様はそれを机に広げた。綺麗な筆記体で綴られた字は確かに要約するとヨルムの言った通りだ。

「今度は貴族方の舞踏会ですか」

今度は、というのには理由がある。お嬢様のお屋敷、望月という屋敷の勢力は隣接する国以上に富を有する。人材から資源まで様々だが、ほとんどの面で上回るほどの力がある。だからどうにか親交を保ち作ろうと、国の王達がよく舞踏会やお祭りに招待をするのだ。

もちろん、お嬢様のことだ。全て出席済みだ。だから今回も。

「面白そうね。参加しましょう」
てなるわけだ。

「ヨルム、下がっていいわ。ありがとう」

「はい。では失礼します」

ヨルムは頭を下げ部屋を後にしていった。

「お嬢様、同伴者はいかがしましたよう？」

お嬢様の隣に立ち、声をかける。

お嬢様は文章の日付が書かれた部分を小さくなぞりながら言った。

「んー、たまには……そうね。琴香、あなただけでいいわ」

「かしこま……え？」

その日たぶん私は一番驚いたかもしれないのだった。

招待1

貴族からの招待ともなると予想以上というか、とにかく大きい建物に着く。中でも本日はとくに大きい気がする。いつもより人も多いことだろう。さらに言えば本日は最も集中力を要する日となるだろう。なぜなら、

「琴香、緊張してるの？」

「申し訳ございません。私一人でお役目を果たせるかどうか」

そう、お嬢様の同伴という護衛を本日は私一人で行うからだ。数十万人を束ねる個人というだけでもその重要性は分かってもらえるだろうか。

「琴香らしいね」

ふと、頬に手が添えられそちらを向く。

「頑張ってる。いつもありがとう」

透き通る金色の瞳が私を捉えて離さない。以前より健康的になった肌に銀色の髪がその美しさをより一層引き立てる。どんな従者でさえもドキツとさせるその表情は私の動きを完全に止めた。

「え……あ、はい」

「うん、気を張りすぎず楽しも？」

気づけば馬車の扉が開き、お嬢様はすでに出ており手を差し伸べられていた。察せられた申し訳なさと、従者としての恥ずかしさでいっぱいになった。けれど少し安心できた。

「はい、かしこまりました」

今日一番の笑顔で真っすぐにお嬢様を見やり、その手を取ったのだった。

大きな建物の中は天井が高く吹き抜けになっていて、2階3階から見下ろせるようになっていいる。さらに巨大なシャンデリアがいくつもあり、綺麗な黄金色の装飾が目細めさせる。

「きれいね」

「はい。少し眩しいですが」

眩しいのはシャンデリアだけじゃない。周囲の人々の持つガラスの反射する光、装飾品のネックレスや指輪、服装全てがキラキラと目に刺さる。貴族方はお互いの権力の主張と誇示のために自身を着飾る。とくに女性のドレスはもはや発光しているのではないかと言った具合だ。

「そのうち慣れるわ」

「辛抱します」

ホールの中央まで来るとふと一人の男性がこちらに気づいた。20代後半といったところだろうか。タキシードに身を包んだスラツと高い身長に短く切られた整った周囲の男性より雰囲気の良い人だ。

「琴香」

「はい」

お嬢様の一言を合図に気を引き締める。相手はおそらく招待主だろう。粗相はできない。

「望月様、お待ちしておりました。このような場にお越しいただき大変嬉しく思っております」

男性が手を胸に添えお辞儀をした。顔が上がるとともにお嬢様は少し微笑む。

「こちらこそお招き感謝します。ユーリット様」

お嬢様も同じように少し頭を下げる。私も同じ程度に頭を下げ、挨拶をする。

「失礼ですが、そちらは？」

「私の従者ですわ。お連れはいけませんか？」

お互いにゆっくりとした動作を終えるとユーリット氏は聞いてきた。それにお嬢様はチラツと私を見てから答える。通常こういった交流の場では夫妻か本人のみで来るのが通常だからだ。

「いえ滅相もございません。本日はゆっくりお楽しみください」

少し慌てた様子でそう言い、また頭を下げて去ってしまった。

周りの視線が少し集まっているのはおそらく彼が名前を挙げたのが原因か。望月の名は言わずもがな、貴族や王族ですらない者が主催か

ら招待されるのは珍しい。

『きげんよう』

一斉にとは言えないが一瞬で女性のゲストが集まる。珍しい者の情報を彼らが知らないはずはない。貴族方の話を私が聞くのは失礼だ。しばらくは黙って下がろう。

一步後ろに下がるとお嬢様がこちらを後ろ目に見ていた。少しだけ微笑んだ口元と少し睨む目つきは“ちよっと待っててね”のサインだ。

「はい」

軽くお辞儀し、その場で待機する。

お嬢様にとってこの時間はとても退屈だそうだ。でも、お嬢様が願う平和に、この退屈さはとても重要なことだと言っていた。お嬢様の願う平和とは、屋敷内での全体方針にも反映されている。“限らない平等と平和、幸福を追求する”その方針は今なおどこかで暗躍する従者達によって、どんどん進行している。

キラキラのドレスに囲まれたお嬢様は眩しいのも気にしないで明るい声で、余所用の笑顔で言葉を返している。平等と平和を追求できる手段に、組織の拡大と影響を選んだのは間違いじゃない。でも誰もが知る有力な組織は必ず同程度の組織の脅威として恐れられる。武力技術や駆け引き能力、全てお嬢様を含む屋敷を守るために手に入れたはずなのに、他人に恐れられた時それは本当に望む平和へと近づいたためのものなのか不安になる。

「琴香」

ハッと意識が戻る。白に黄色い線が入ったドレスを小さく揺らしお嬢様がこちらに来る。

「はい、はい」

金色の瞳で数瞬見つめられすぐ手を取られた。

「あ、お嬢様?」

少しもつれながら引っぱられる。

「悩む時の琴香は一点を見つめるよね。その後の言動もちよっと詰まる」

お嬢様から気をそらした覚えはない。退屈な貴族方の話の後、こちらに来るあの間に私が悩んでるのがわかったのか。よく見てもらえてる嬉しさと、またもの失態に赤面してしまう。

「申し訳(づ)ぎありません」

「聞かせてね」

お嬢様はそう言いながら私を3階のベランダに連れてきた。たくさん机が置けそうな何もないベランダには誰もおらず、暗くなり始めた空に星が見え始めていた。

「ふふ、こういう場ではメイスイイベントのダンスを踊るべきなのだろうけど、今日くらいいいよね」

そしてお嬢様に手を強く握られるのを感じた。

招待2

黒に染まった空にアクセントをつけるように星々と月が浮かぶ。日中とは程遠いがそれでも明るい月の光が周囲を照らす。その光を纏うかのように佇む白のドレスに身をつつまれたお嬢様はとても美しい。

「琴香」

ふと紡がれた言葉に私は返事をする。

「はい」

小さく吹く風が光を反射した銀の髪を揺らす。その表情は後ろからでは見えないがおそらく微笑まれている。楽しさを含む声音だったことを感じ取れたからだ。

ゆったりとした動きで優雅に振り替えられる。真つすぐに見据えられたとき、その表情はとても楽しげだ。

「舞踏会に出るつもりはないわ」

「承知しております」

「でも……琴香と踊りたい」

「……謹んでお受けいたします」

「リードしてね」

短いやりとりの後、差し出された手をそつととった。白く細い指をたよりにやんわりとひっかけて引く。ちょうど流れ出した音楽を聞き取り、そのリズムに足をかける。抵抗なくお嬢様も合わせてリズムにのる。

前にも言ったが招待は貴族だけでない。王族やたまた城下町や村からも来る。歓迎の仕方は様々で、ゆったりとしたステップを踏むだけのものもあれば、激しく楽器を叩きながらドロドロ口になって踊るものもある。ちなみに言うまでもなくお嬢様は全てに適応しうる人だ。思い出すのはばかられる思い出はたくさんある。

お嬢様を片手に抱くような体制でゆったりとお互いにリズムを合わせながら踊る。ジツと見つめられるだけで火を噴きそうなのに今日ばかりは耐えられそうだ。シュツと伸びた眉や垂れすぎない目元

に整った顔立ち、色素は少し薄いけどまだ幼さの残った口元全てが秀麗で誰をも魅了するだろう。私は金色の真つすぐな曇ることのない瞳が好きだ。

お互いに吐息を感じられる距離感、服越しに伝わる温度と直接触れた片手、いつもより細められた目を見つめ次のステップを踏む。

「上手ね」

「嬉しいです」

音楽がより緩やかになるとお互いに体を揺らすような踊りへと変わった。月の光と窓からこぼれる光がたよりの広いテラスには私とお嬢様以外誰もいない。二人っきりのこの空間はとても静かだが、私にとつては最高の思い出となるだろう。お嬢様にとつてもそうだといいな。

少し口角が上がるのを抑えられなかった。この瞬間が幸せすぎる。

「珍しい顔ね」

「幸せなんです」

「ん……」

即答するとお嬢様はなぜか瞳を逸らされてしまった。ほのかに頬が赤くなったような気もする。正直言って勘は鈍い私だ。でも今日ばかりはちよつと強気になれそうだ。

「珍しい顔ですね」

「……即答はするいわ」

「大好きなので」

「ん……もう……」

だんだんと体温が上がるのを感じる。逸らされた瞳が少し俯く、恥ずかしい顔だろうか。頬を赤くし口元に力が入れられてる。初めてみた。もしかして直球に弱いのかな。思い返せばお嬢様主導の時の方が多かったかなこういうのって。かわいい。

音楽の音程が2音上がった。一曲ももう終わりなのか。名残惜しい。

「お嬢様」

最後のフェルマータを聞き取ったとき、自然とお嬢様を自分の腕の

中に抱いていた。少しばかり熱を帯びた想いが理性とは別に体を動かす。

「こ、琴香?」

「愛しています」

腕を解き、その頬をそつと撫でてしまう。ピクリと体を震わせながらもその瞳は私を捉えていた。でもいつもの狼のようなそれではない。少し何かに期待するようなウルツとした少女のそれだった。その表情は違和感もなく、久しく使えなかった表情なんだろう。

「……」

「……」

返事はなかった。代わりに私の腕を掴む指に少し力が入る。それを合図に吐息すらかかる距離の中、少し目を細めるとお嬢様はお目をつぶられた。ちよつと目元に力が入ってる。そして私もゆつくり目を閉じ、柔らかな唇にゆつくり自分の唇を当てがった。

とても柔らかい感触はいつだったか。あの時よりもハッキリと感じられ、そこから感じられる熱はとても熱くお互いの気持ちにズレはないことを確信できた。

再びお嬢様の顔が視界に入った時、輝き揺れる瞳で顔を赤くしたお嬢様が見えた。懐から取り出したハンカチで優しく目元を拭う。一瞬閉じられた瞼が上がった時、その眼はいつもの狼のようなものに戻っていた。だけど、なんとというか優しくなったかな。

「琴香、ありがとう」

「はい」

顔の赤みもひいていき、気づけばいつもより柔らかくなったお嬢様がそこにいた。何とというか疑問が解消したような色が見え隠れするその表情に私は微笑み、ゆつくりとお嬢様のお手を再度とった。

「二曲目はいかがしますか」

「ええ、お願いするわ」

月夜の出来事を知る者は私とお嬢様以外にいない。これは二人の思い出だ。

舞踏会は終わりをつげた。お嬢様との時間は舞踏会の間ずっと続いた。言葉少なめにお互いに存在を確かめるように、ゆつくりとしたステップで踊り続け、三曲目の終わりでお嬢様が躓かれたので切り上げることになった。その後は手すりに座り音楽を背景に満月を二人眺めて過ごした。そして今は退館中だ。

お嬢様が主催者らに挨拶を行っている間少し離れて待つ。そこにスラリと身長の高い金髪の男性が近づいてきた。

「君」

「はい」

お嬢様への気配りをしながら、その男性に視線を送る。顎を少し突き出し、若干見下すような態度をとっていた。

「望月のメイドはとても良質と聞いた。いくらだ」

「私達は金銭では動きません」

真つすぐ男性を見据え言う。ここまで堂々と来たのは初めてだ。こういった方は常に金銭でなんでも手に入ると考えている。私達、望月のメイドや使用人がどのような形であの方についていつてるかなんて理解しようとしてもしない。経費から削れるものがあるならことん削り、その儲けの全てをわが物にしようとする。そして何よりも人間を価値として認識し、意思として尊重しようとしなない。

「では、何なら動く」

「永久の安寧と自由の保障、そしてメイドや使用人の人的尊重です」

「いちいちメイドと使用人に構ってたら破産するだろ」

「そこがあなたの限界です。商談は終わりですね。では仕事があるので」

ちようどお嬢様の話が終わり、玄関へ向かい始めたのを確認し、私もそれに続く。

「おい待てよ」

肩を掴まれ、足を止めてしまう。後ろ目に睨みつける。

「あいにく、どのような条件であろうと私達が貴公の下につくことはありません」

そう言っつて肩の手を払いのけ、足早にお嬢様のもとへ向かった。

「あ、おい！」

お嬢様の後ろに追いついたのと間もない瞬間、駆ける靴音と荒い息遣いが後ろから聞こえてきた。とっさに後ろ目に確認するとさっきの男性だ。右手にナイフらしきものが見える。その進路は直進するとお嬢様に行き当たるとおそろく一介のメイドに商談を反故にされた腹いせだろう。私の撒いた種で申し訳ないが、お嬢様を守らなくては。

「はあはあ……バカにしやがっぐがあ!？」

戦術第三章五項、早急に護衛対象から脅威を遠ざけるための対人手段。拳法が盛んな国の技だ。両足でしっかりと軸を固定しながら、体の肩より少し後ろの側面全てを利用して全体重による体当たりを移動中の脅威に対して行う。自身の体重が威力となるが、体重移動の激しい人間に対してはほぼ関係なくバランスを崩させられる強力なものだ。

即座に姿勢を変え、倒れた男が落としたナイフを端っこにかけた。少し遅れてガードらしき黒いスーツの男性が数人来て、その男を取り押さえた。

「失礼しました」

その場で身だしなみを整え、丁寧にお辞儀をしてお嬢様を追ったのだった。

貿易都市1

舞踏会の次の日、私のグループは定期的な休日だ。休日は三日与えられており、この日レオとレナを連れて西国の貿易都市に来ていた。

「ん…人多い…苦手」

「ほらレナ、迷子にならないでね」

隣を歩くアルムバルト姉妹は手を繋いでついてきている。髪の毛の黒い方がレオで白い方がレナ、瓜二つの姿なのにその性格は全然違う。レオは活発な印象を受けるけど、レナは常に眠たげで静かなイメージを持っている。

手をつないで歩く姿は見ていても微笑ましいものだ。

「ところで琴香、なぜ貿易街に？輸入品の調達なら屋敷から派遣所に依頼を出せばいいと思うんだが……」

「うん、だから今日はちよつとしたものを見にね。あと2人と食べ歩きとかしたくてさ」

「食べ歩き…！」

琴香の返事にレナが反応する。

レナは普段静かであり遠出を好まない。その理由は知らない人が多いことだ。しかし彼女はこと食べることににおいては専属メイド一番で目がない。

「琴香、早くいこ？ほらー！」

「レナ落ち着いて」

「まあまあ、先に派遣所に寄ってからね」

少々興奮気味になったレナがレオから離れて琴香のそばに寄る。

自分よりも低い身長を彼女を落ち着かせるように頭を撫でながら目的地に向かった。

望月領を基準に西国の最大都市ユリツヒ、都市経済は貿易業が大変盛んで南国や海の先にある島国と海商路が確立されており、毎日のように大型の運搬船が出ては入っている。市内は卸売場を始め、様々な海産物の料亭や貿易品の小売店が立ち並んでいる。その出店の中に

はその場で調理して料理を提供する店も多くあり、控えめに言っても毎日お祭りのような状態だ。

「こんにちは」

『こんにちはー』

望月領の派遣所は見た目普通の酒場だ。派遣所なんて大層な名前がついているが、言わば望月領のユリツヒ館みたいなもので、館の奥にはいくつも宿泊部屋があり、望月領の使用人が随時手続きの上利用できるようになっていいる。

「はいはい…あ、よお本館からはるばるお越しならはったなあ。私はユリツヒ館の館長を務めますニーナ・アセントと言います。たしかあ専属メイドのお」

「翠田琴香です。こちらは」

「レオ・アルムバルトとその妹のレナです」

琴香が挨拶しながら館に入ると、裏方に繋がる壁際からささつと女性が出てきた。琴香よりも高い身長と良いスタイルを持っており、その特徴的な口調は彼女の掴めなさをより一層強調する。琴香に続いてレオ達が自己紹介を行う。

「まあユリツヒはほんま広いさかい、数は少ないけど温泉もぜひ周ってみてほしいわあ。あ、そや先に部屋見ていきはる？せつかく来はるさかいおもて3人部屋空けてといたんよお。はい鍵」

「あ、ありがとうございます」

ニーナ館長は一言で言うならお喋りだ。琴香とレオが口を挟むのもたじろぐぐらい、その口周りの速さはとてつもない。

「部屋はその階段上がって奥の扉抜けた突き当りやで、外出はるときは裏方に経理室窓口あるさかい、そこの人に渡しい」

「何から何までありがとうございます」

「ほなまあ、ゆっくりしてつてなあ。私裏で仕込みとかしてるしなんかあれば言つてなあ」

「はいー」

ニーナ館長と別れ、部屋へと向かう。二階はテラス式となっており、下が見下ろせる立派な酒場を呈している。掃除が行き届いており

机も手すりもピカピカだ。

「ふう、ニーナ館長すごい人だなあ」

「うん、私も返すのに精一杯だった」

レオがレナの手を引きながら漏らす。全くその通りで、初め出てきたときに受けた印象が少しばかり揺らぐ性格であった。とはいえ、彼女がこの西国最大都市ユリッヒの望月領拠点を任されていることは間違いなく、それだけの人であることに変わりはないだろう。

ニーナさんの言っていた通り、裏口へ続く扉を抜けると右手に窓口があり、向こう側では何人かの人が書き物をしているようだ。目線が合うと会釈だけ交わされ、琴香達も軽く返しておいた。

部屋は広く、ベッドが3つ並んでしかも4畳ほど畳みの茶の間がある。机の上にはご丁寧の名物らしい茶菓子と陶器のコップに水差しが置いてあり、ちよつと豪華な旅館のようだ。

「よし、レオレナ、着替えたらさっそく市場に行こうか」

「食べ歩き……!」

「レナ、落ち着いて」

朝早くに望月領を出発してからすでに現在昼過ぎ、市場もあと一踏ん張りとな賑やかになる頃合いだ。レナもそろそろ一人で走って出店を探しそうな雰囲気になり始めたし、早く市場へ目的のものも探しに行こう。

第外章 貫徹弾1

私の名前はノーナ・ユオン、数か月前の専属メイド採用試験に合格し、専属メイドとして北の国の諜報派遣者から昇格採用されました。専属メイドはお嬢様への直接のお世話と護衛をする役職で、お嬢様のおはようからおはようまでをしつかり見守る、非常に大切な仕事だ。それを任せてもらえる責任感尋常ではないが、とても誇らしく嬉しいことだ。

「はあ……」

とは言っただものの、仕事に就いてまもなく私は悩みを抱えていた。誰でも一度は経験するだろう悩みだ。確かにちよつと変な歪な形をしているけれど、類似のものだ。

「あら」

「ひゃ!?!」

唐突に後ろから声をかけられビクツと体が反応して、声を上げてしまった。後ろを振り向くと、私と同じ専属メイドのエリ先輩がいた。私より少し低い身長で年上だ。

「エ、エリ先輩ですかあ……ビククリしました」

「ありやりや、それは悪かったねー。ところで、何か考え事してたのかな?ため息なんかついてさ」

そう言っただけでエリ先輩は私の隣に腰掛ける。どうやらこれからお昼らしい。机に置かれたお盆にはクリームシチューといくつかのパンが載っている。

「あ、いえ、別に悩みってほどじゃないです……」

エリ先輩はパンをちぎりながら横目に私を見る。私を見透かすような視線。

「……」

ジツと少しの間見られたあと、軽く笑顔を作って、シチューにパンをチョンとつけてパクツと一口食べた。そして、軽く目をつぶり、

ゆつくりと噛み、コクリと飲み込んだあと、軽く手を拭いて、再度私を見た。何か分かったように軽くドヤ顔だ。ちよつと鼓動が大きくなるのが分かる。

「好きな人かな？」

「つ……さき、さあ。どうでしょうか」

うまく動揺してしまわないように自分を抑え、どうにか逆に笑顔を作ってそう言い返した。エリ先輩はその瞬間口を三角にする。

「はずれ？」

「そうかもしれません」

「ふむ。まあ相談なら乗るから言いなよ」

「はい、ありがとうございます」

そのあと、エリ先輩は食事を手早く済ましてしまった。

実は、エリ先輩の予想は当たっていた。そう、私は好きな人ができていたのだ。

専属メイドは現在15人いる。専属メイドはお嬢様のお傍で仕事を。そしてメイド長の次に汎用性の高い役職でもある。まあ、一言で言うなら、屋敷の管轄する仕事ならほとんどは任せられるということだ。

現在、専属メイドは15人だ。効率的な回しかたも考えられ、5人ずつの3班に分かれて、交代で仕事にあたる。専属メイド同士の仲も良好とするために、部屋も班ごとで一つを共有する。

そして、今日は私の班は休日だ。もうすでに打ち解けているから、班ごとに何か行動するわけでもないの、それぞれが好き好きな休日を過ごしている。ちなみに私の班のリーダーはエリ先輩だ。

「ん」

起きるとすでに誰もいなかった。時間は7時だ。そういえば、最寄りの街がもはや隣の国だから朝は早くでないと一日遊べないんだ。すつと立ち上がり、洗面所に行き、顔を洗い、服を着替えた。久しぶりの私服だ。

「……」

とは言ったものの、別段予定もなく、どうしようかと迷う。部屋の仕切りの間を覗き、本当に誰もいないか一度確かめる。そして、一番端の仕切りを覗いたところで、私は足を止めた。

その仕切りの一角は、薄緑色の布団が置かれたベッドと、少し大きな目の箆筒、いくつかのぬいぐるみとたつた4人の古参専属メイドのみがもつ、銀色の翼型のバツジのついたメイド服がある。

唾をぐくりと飲み込み、この部屋が屋敷の割と端っこにあること、周囲に人が集まるようなところがないことを思考し、少しだけ周囲を見まわしてうんと頷いた。

「ちよつとだけ……」

急いでいたらしい、ちゃんと整えられていない布団を少しかき集めるようにして抱きしめた。

そう、私の好きな人、それは、エリ先輩だ。

ぶわつと広がるようにエリ先輩の匂いが私を包む。ほのかに甘い、それでいて刺激的な匂いが鼻一杯に広がり、そこから順に体が熱くなる。とてもいい匂い。

「エリ先輩……好きです。すつごく大好きです」

さらにギュツと布団を抱きしめ、顔をぐいっとうずめる。私よりも長い年数ここにおいて、長年使われている布団には、エリ先輩の匂いが染み込んでいた。

エリ先輩は私よりも年上だ。だけど、私より身長が低くそれでいて可愛らしく、ときどき意地悪っぽい顔をしたりと、とても表情豊かだ。エリ先輩は私の命の恩人だ。私は北の国の出身で、奴隷的身分ではなかったけど、十分に人的権利を無視される身分だった。どんな環境だったかは置いといて、私はエリ先輩の手によって助けられたのだ。人に抱かれることがあるなあにあってかいいんだって知ったのはその時だった。それからというもの、北方諜報派遣者となるまでの間、私はエリ先輩を見つけるとずっと目で追ってしまふことになった。その時点でもうわかっていた。私はエリ先輩が好きなんだって。

専属メイド採用試験に受験したのもエリ先輩の近くにいたかったからだ。もちろん、今の環境を作ったお嬢様にもとても感謝してもし

きれないぐらい感謝している。

「ふはあ」

布団から顔を上げ、そそくさに綺麗にたたんだ。他人の布団を他人の知らないところで、触るのはやっぱり気持ちが悪いと思われてしまおうだろう。畳んどけばちゃんと言いつい訳とかできるだろうし、うん、大丈夫だよな。

どうにか気持ちを落ち着けるために深呼吸し、仕切りから出ようとした時だ。箆筒の上にある小さな香水らしき容器を見つけてしまった。興味が湧いて、その容器を手取る。ラベルには桃の一字、容器の色は青色だ。

「……」

容器を開け、吹口の匂いを軽く嗅いでみる。エリ先輩に遠くない匂い、間違いなくエリ先輩の使用する香水だろう。それに容器の水は半分もない。

プシュ

好奇心のままにその香水を袖に一吹きした。エリ先輩に似た匂いが自分の袖からする。なんていうか、エリ先輩の服をもらったような感覚に陥る。

プシュ

二回目は左肩付近にかけた。顔に近くなるにつれそれは常に匂いを感じられる。すつごく嬉しい気分だ。

コトンと香水を置き、仕切りを後にしたのだった。

「……」

時刻は18時だ。いい感じに外が赤くなりだした時間だ。朝、あの後から図書館にこもりずっと本を読んでいる。休日は基本的にいつもこうだ。仕事中はエリ先輩に会えるからよく頑張ってしまうけど、休日はいつもエリ先輩はそそくさとどこかに行ってしまう。前日に勇気を出して誘えない自分がなんだか情けなく感じる。

「おろ？ ノーナ、奇遇ね」

ふとその声に顔を上げると、そこにはエリ先輩がいた。新しい服だ

ろうか。あまり見かけない服装だ。とても可愛いし、何よりシャツ一枚という薄着、とつても扇情的に見えた。

「エリ先輩、こんばんはです。お昼はどちらに？」

エリ先輩は私の正面に座り、ニツコリ笑顔で口を開く。

「ちよつと南に行つてたわ。まだ食堂では扱つてない香辛料があるらしいから、その情報収集ね」

エリ先輩はとても真面目な方だ。自分の休日もみんなのために費やしている。

「せつかくの休日なのに休まないんですか？」

軽く机に肘をついて、ちよつと私を上目遣いに見る。

「ふふ、ちゃんと休みも兼ねてるから大丈夫だよ」

「そうですか……」

うんと一度エリ先輩は頷き、姿勢を崩して今度は少し机に身を乗り出された。

「ところで、晩御飯はもう食べた？」

「あ、いえ……まだです」

「一緒に食べよう？」

初めてののお誘い、とても嬉しい。

「はい」

『いただきます』

二人して手を合わせ、評判の船見さんの料理に箸を差す。ここの食堂の船見のおすすめはとて有名だ。栄養満点のスタミナ料理が中心だけど、いつ食べても飽きない魅力がある。よく食べる私の感想だけど、同じメニューの料理でもその時々で味がほんの少し違うのだ。話によると、人の感じるその時の気温や天気の状態とかで味を変えるようにしているらしい。

「やっぱり船見の料理はおいしいね」

エリ先輩はさっそくおかずを口に入れて感想をのべる。目をつむって口元を抑えながら微笑む姿はとて可愛らしい。

「そうですね。おいしいです」

図書館とは違い、エリ先輩とは席を隣にして座っている。かすかに料理の匂いに混じって香るエリ先輩の匂いがとてもいい。

正直、料理なんかよりエリ先輩の匂いだけでお腹いっぱいになれるくらいだ。

「どうしたの？」

ふとエリ先輩がこちらを見る。気づかないうちに箸を止めて見つめてしまっていた。

「あ、いえ、何でもないです」

すぐに前に向き直り料理に集中する。ああ、エリ先輩のベッドを思いつきり嗅いでから、ブーツとしやすくなってるみたいだ。

「変なノーナ……それより……」スンスン

急にエリ先輩は鼻を鳴らし始めた。

「どうしたんですか？」

「んあ？いや、別に」スンスン

エリ先輩はそう言って嗅ぐのをやめると、少し考える動作をしてから。

「まあいいか」

と漏らしてまた食事をし始めたのだった。

食事が終わり、しばらくしてからお風呂に入った。することもないから、早めに部屋に戻ってゆっくりする。いつもの休日だ。

「……」

部屋に戻ると電気は消えており静かだ。

仕切りの間を覗いていく。一番手前の一室はエリ先輩だ。さつそく軽く覗いてみる。

「zzz……」

布団を被らずに寝ている、寝間着姿のエリ先輩がいた。可愛らしい薄緑色の寝間着を着て、枕をしっかりつかんでるのが見える。

「ちよつとだけ……」

私は北方諜報派遣者であったとき、実際に人に引き金を引くことはなかったが、超長距離の単独狙撃者だった。狙撃者、つまりスナイ

パーと言われる者だったわけで、暗闇でも目が良く見えて、そして周囲の動きにはかなり敏感になれることができるということだ。

「エリ先輩、起きないでくださいよ」

「zzzz……」

ひそひそと声を潜めて呟きながら、エリ先輩のベッドの隣に腰を下ろす。我ながら大胆で卑怯な方法だなと思うけど、告白なんてしたら嫌われちゃうだろうな。

同じ目線に膝立ちする。柔らかく鼻につく匂いがとてもたまらない。

ゆっくりとした動きでエリ先輩の手を取った。スベスベな細い指、エリ先輩はこの手で私のことを助けてくれたんだ。とても愛おしくて……好き。

「……」スンスン

軽く匂いを嗅ぎ、甘い匂いを吸い込む。そのままスリスリと頬ずりをする。ああ、今とっても幸せです。

「ん」

ふとその手が引つ込み、ビクツと反応してしまう。起きてしまったか。とゆうか、夢中になりすぎて全然気を張るのを忘れていた。

「zzzz……」

どうやら寝返りをうっただけのようだ。よかった。

反対側を向いてしまったエリ先輩に対し、起きなかったことを安心した私はさらに上を望みたくなった。暗闇にも目が慣れ、エリ先輩の髪を触る。そういえば私が専属メイドになってから髪は切られてないらしく、肩くらいの長さだ。サラツとした手触りはとても気持ちよく、ほのかに香る匂いが私の頭を満たす。体がゆっくりと熱くなり、軽く汗が出てくるのがわかる。

いつもは可愛らしいリボンで結ばれた髪を少し集め頬ずりし、そして匂いを嗅ぐ。

「……」スンスン

きつと他の人が見たら私は変態なんだろうな。とは自覚していいながらもやめられない。でもこれ以上やるとさすがに起きちゃうかな。

どうかか感情を抑え、エリ先輩の髪を整える。

「エリ先輩失礼しました」

軽くそう言って私はその場を後にしたのだった。

貫徹弾 2

とある山の頂き、時々鳥が鳴く静かな木々の下、生い茂る草の間を這うようにうつ伏せにグリップを握る。そのスコープに見えるのは向かい側の山の頂きにある円形の的だ。工科部門の試作品である狙撃用鉄砲の試射だ。よほど自信があるのか観測班もよこさずレポートを提出してほしいらしい。

話によると、次世代の対蒸気機関車足止め用の構造になっているらしい。渡された瞬間からその異様な全長と弾丸の大きさが話の裏付けには十分だった。私を超す全長、一発だけでも握れてしまう弾丸、しかも狙撃銃である。もし対人用だったら人体なんかたやすく消し飛ばすだろう。

刹那、的が消え、羽毛のドアップがスコープに映る。つぶった左目を開くと銃身の先に鳥が止まっていた。その白くふさふさとした小ぶりな体は、小さく跳ねながらスコープを伝って私の頭の上で落ち着いた。

専属メイドには様々な能力を持った人間がいる。お嬢様の側近とすることで全員が防衛術のための能力を持っているが、魔法術使い、錬金術師や拳法術など、中には妖術を使い変身する者、降霊式神術者、機械術という物を使う者もいる。私は銃術といって鉄砲を扱う、中でも狙撃用の銃を使うのだが、本来複数の目標と相対するために観測手を置いて優先度を決めたりする。私は両方の目が利き目であり、観測手なしで狙撃をしながら周囲を観測することができる。まあ、実戦はまだ経験できてないが。

鳥が頭に止まったのを合図に的の中心より若干上に合わせ、一瞬息を止めた。

刹那、響いた爆音は山々の間を轟かせ、順々に鳥が羽ばたいた。地面に突き立ったバイポッドは地を少しばかり抉り、私の体にも強い衝撃を与えた。そしてほんの数コンマ遅れてスコープに映る的は上半分が吹き飛んだ。

「……………」

ここまでの威力があるとは、過小評価しすぎていたようだ。これでは命中したのはいいがうまく能力の度合いを測れない。ただ、中心より上にずらしていたし、狙ったところから上半分が消えたのなら、吹いている若干の風の影響は全く受けてないと判断していいだろう。

まあどちらにしろこれ以上の試射は的の破損から不可能だろう。鉄砲から手を放し、頭の上にある小さな違和感を掴みポンと手のひらに乗せた。首を傾げた白い小さな鳥は先ほどの爆音でも逃げなかったようだ。何といえればいいか果敢なのか鈍感なのか。と思ったけどちよつと違和感がある。

「レナちゃん、今日は鳥なのね」

鳥はプライツとそつぽを向いた後、パタパタと木の上に移動し、そして。

「またばれた。ノーナは勘がいいのだな」

白い煙をまき散らし現れた白い髪に小さな体躯の少女は器用に木の上に立ち真顔でそういった。専属メイドのレナ・アルムバルトだ。屋敷に二人しかいない妖術使いの一人で、もう一人の妖術使いレオ・アルムバルトの双子の妹だ。

このように度々私の前に小動物に変身して現れて遊んでいる。ただ、動いても動じなかったり、さつきみたいに爆音で逃げなかったり、ちよつと抜けているためすぐ見破れてしまう。

「勘っていうか。レナはわかりやすいよ」

「そう。今度は誰かに化けてみよう」

あとは感情をほとんど顔に出さないため、真顔で受け答えをするところがある。それは彼女が化けている最中であっても変わらない。「それにしても、音がすごいんだな。小さな鳥では音圧で飛ばされそうだった」

レナは目線を鉄砲に移し言う。相変わらず真顔なのに驚いているのか感嘆しているのかわからない。

「工科部門の試作らしいわ。何でも次世代蒸気機関車の足止め用だつて聞いたけど、正直これなら転輪の破壊とか機械部分の貫徹も夢じゃないわ」

なんなら近年発達した北方の機動部隊が所有する軽装甲車の単独破壊もできる気がする。

「さて、報告に帰るわ。レナはまだ観察を続けるの？」
「帰る」

鉄砲を折りたたみ背負った。元から持ち歩き用にそういう構造なのはありがたいとこだった。正直身長を越す全長は持ち歩きに不便だからだ。だつて背負えば地面に突き刺さるし。

「うん、じゃあ帰ろう」

ー

工科部門に試作品の返却と報告書を提出し、お風呂に浸かっていった。ゆらゆらと揺らめく湯気が天井を漂う静かな浴場に人は少なく、おそろく夜の見回りのための準備だろう人たちがいるくらいだ。

「ノーナ」

呼ばれた声に目線を動かすとそこにはエリ先輩がいた。華奢な体躯に肩を下回るくらい伸びた髪が美しく映える。藍香さんより明るい緑色の瞳が輝く目は少しだけ細められている。

「エリ先輩、こんな時間に珍しいですね」

「まあたまにはいいかなってさ」

チャプンと音を立てて腰を下ろしながら言い、ふうーと息を漏らした。なんとも可愛らしいその姿に見とれてしまう。

「ん、なにになに？ノーナなんかいいことでもあったの？」

「ふえ？あ、いえ、なんでもありません。き、気にしないでください」

エリ先輩にそう言われ、自分がにやけているのに気づいた。口早にそう言ってお湯をすくって顔に当てた。私としたことが、エリ先輩を見るだけで無意識ににやけてしまうとは、どんだけ好きなのよ……。

「えー、気になるよお。最近ずっとそんなんばつかじゃんか。ほら、班長命令だよ。さあ班長であるエリー様に相談したまえー」

上目遣いに見ながらちよつと偉そうにまくしたてる。実際私より偉いだけだね。しかもこんな時に限って班長という権限を使ってくるのがいじらしい。

「本当に何でもありませんってば」

「本当に？本当の本当に？」

「はい。毎日が平和だと思ってるくらいです」

「ふーん……」

さらに迫ってきたエリ先輩は少し目をつぶった後、そっかっとなげいて湯船に浸かりなおした。内心、胸をなでおろす安堵感を感じつつ私もその横で浸かりなおす。

「あ、じゃあさー」

ふと湯船を揺らしてエリ先輩は再度私に向き直った。

「私の悩みを聞いてほしいな」

「エリ先輩がお悩みですか。珍しいですね。ぜひ聞かせてください」

満面な笑みでありがとうつと言おうその表情に、私はまた一つ好きな人の一面を知ることができた。それだけで今日一日をもう終わってもいいと感じてしまう。

「実はね。最近、使ってる香水の減りが早い気がするの。ノーナ何か知らない？」

その一言に体が思考が凍りついた。実を言えば、あの時初めてエリ先輩の所持品に手を出してから止められず、むしろ前より頻繁に勝手に香水を使ってしまった。消耗品に手を出すのは目に見えてばれてしまう行為だとわかってはいた。もちろん類似品の入手も試みたけど、あの香水がエリ先輩が自身で編んだ特殊な魔法精製によって作り出したものと知ったのはここ最近の話だ。それからは使っていないが、それでも時すでに遅しと言ったところか、香水の量は見ればわかるくらいに減っていた。

「……そ、そうなんですか。……気化してるとかでは？」

「んー、毎回調合方法を変えてたら疑ったんだけど、変えてないからね。とりあえず減りが早いって感じるの。それに気化対策もしてるから大丈夫だと思うんだけどなあ」

そう、エリ先輩の魔法には何の欠陥もない。内容物の使用及び流出、魔法効力の解除、人体に反応して気化するような器用な編み方がなされている。私には魔法はさっぱりわからないけど、冬実さんがこっそり教えてくれた。エリ先輩よりも上位の魔術者である冬実さ

んが言うのだから間違いないのだと思う。

「ごめんね。もうちよつと見直してみるね」

「は、はい」

ガチガチに凍りついた思考がゆったりと戻る。大丈夫、嘘はついてない。使ったかと聞かれれば危なかったけど、聞かれてないからセーフ。そう。ばれなきゃ悪くないんです。

「じゃ、先にかかるわ。あとで夕飯一緒に食べる？」

「ぜひ一緒に一緒にします。私はもう少し浸からせて頂きますので」

「わかった。またあとでね」

そう言ってエリ先輩は浴場を後にされた。

大丈夫、エリ先輩の香水はもう使ってないし。黙っておけばエリ先輩にばれることもない。エリ先輩が好きなのは変わらないけど、もし好意を持っていることが知られてこの関係が壊れてしまうのは専属メイドを外されるよりも嫌だ。どうかこのまま事なきを得られるよう祈ろう。

冷めた思考が少しでも温まるようにと、ぷくぷくと湯船に泡をたてるのだった。

壁やぶれて1

回覧板に載った速報は朝の頭に強いショックを与えるには十分だった。例えるなら、腕つぶしが取柄のドワーフが突如裁縫に目覚め、縫い物をしだすくらい衝撃なことだ。それくらい回覧板に書かれている記事には特大なニュースが書かれていた。

『ミア・バルト火砲技師のグループが前日昼頃、一センチ（一センチ＝100ミリ）の鍛造鉄鋼を貫徹する携行式火砲の製作に成功したとレポートを提出した。詳細は後日現場にて実証実験とともに観測グループがまとめる。』

ネルは何度か読み直したあと回覧板を机に置いた。部下が淹れてくれた紅茶のカップを手に取り、一口含む。ほのかな甘さが朝のショックを心なしに和らげてくれる。

ネル・デビッドは科学研究棟にある工科部門の主任技師の一人だ。科学研究棟は、魔術・魔法に頼らない物理的な戦略・攻防及び経済的手段を確立するための施策を探求・模索するための場で、工科部門をそれらを形にするための部門だ。ネルは物理的な衝撃に耐える壁の設計・製作を担当している。

「ネル様、難しい顔をされていますが、いかがされましたか？」

ふとかけられる声にネルは振り向く。

赤毛にそばかすを目と鼻の間にたたえているのが特徴の女性、部下のアンが心配そうに見ていた。そんな彼女に先ほどの回覧板を指で弾いて渡す。滑る回覧板を手に取り、一通り目を通したところで顔をあげた。

「行かないといけない」

「そのようですね」

ネル自身、より強固な壁を考案し設計するのは嫌いではない、むしろ好きだ。だから今回、ミア火砲技師が強力な火砲を作ったというのであれば、むしろその対策のために様々な可能性を検討し、壊されなようなものを作ってやろうと気持ちがあがる。

ただ、ネルが朝からショックを受け、実証実験に気乗りしないのに

は理由があった。

「アン、ごめんだけど、保温用の筒とマスクを用意しておいてほしい」「わかりました。当日の連絡とメンバーへの伝達も併せてしておきます」

「頼んだ」

ミア・バルトは、何かを破壊することを好む大変爽快な女性だ。彼女のやり方はコストとサイズでぶち壊すのが決まりで、二十分の一センチの鍛造鉄板の破壊のために木船用の大砲を持ってきたときは大変驚かされた。それが今回はなんだ。固定式でも牽引式でもなく、携行式と来た。携行式は一人か二人で最高のパフォーマンスを実現できる物で、牽引式は動力の必要又は多くの人数で運用ができるもの、固定式は名前の通り、設置前後で多量に時間を要しかつ設置後動かすことができないもので、多量の人数で運用されるものだ。一センチの鍛造鉄鋼板は科学大国の装甲軌道車の動力部分を防護する装甲厚と同じで、以前の実験からミアは、一センチの鉄鋼板に有効な損害を与えるには、大型の固定式火砲がなければ不可能という結果が出ている。それが今回は携行式の火砲一丁で貫徹できたと報じられる。願うところ、『神の天啓を得られたのだよ！さあ共に祈らんか!』などと言い出さないでほしいところだが。

ミアはネルの義理の姉であり師匠である。ネルは元々、科学大国の名門技師家系の娘であったが、世紀の不器用の烙印を押され破門、捨て子となった。路頭に暮れたネルを拾ったのが、ネルの家系とはライバル関係にあるミアであった。ミアはネルの能力をじっくり見出し、その才能を引き出してみせた。

加えて、もう一つ気乗りしない理由に、ミアがネルのことを好きすぎる点がある。義理ではあるものの、ミアは重度のシスコンでネルが研究室を訪問するたびに、ネルしか見えなくなる。ネルは別にミアのことは嫌いではないが、肝心の作業が大幅に遅れることは大変憂鬱であった。

「はあ……」

深いため息をついて椅子にもたれかかる。どちらにしろ、小さい火

砲で有効な打撃を狙えるようになったことは、先の時代でも必ず実現されるだろう。すでに実現している可能性も捨てきれない。

「よし」

椅子に座りなおして一息吐いて、グツと拳に力を入れる。自身の役目は守る壁を作ることだ。この望月の屋敷に属するものが、全ての生命がもちうる可能性から守ること、それが自身の最大の役目であることを再確認し、ミアの火砲の予想とそれの対抗策を思考するのだった。

1

科学研究棟は建物の名前ではなく、望月領のある一定の区画のことだ。広大な実験場が一つと、研究室と開発室を含む建物が5棟ほどある。ミアの研究室は彼女の性格の都合上離れたところに設置されている。

火砲の実証実験であることから、お嬢様に報告をあげ、専属メイドのノーナとソーニャの二人を貸してもらうことにした。二人は携行火砲の扱いに長けた者達で、ソーニャは精度の不安定な小型の火砲をノーナは精度の優れる比較的大型の火砲を主に扱える。先ほどノーナが言うには試作火砲のテストをしたらしく、聞くに比較的大型の火砲であるみたいだ。

「忙しい中、今日の実証実験に出席してくれること、二人には大変感謝します」

馬車の中で専属メイドの二人を前に頭を下げる。

「ネル、いつものことだろうか？顔をあげてくれ」

「そうね、毎度かしこまられるとなんか申し訳なくなっちゃうし」

ソーニャは目を細めてやれやれとした顔で言い、ノーナはソーニャを見て同じくうんうんと頷きながら言う。

「二人ともありがとう、内容はさつき説明した通りで、二人には一足先に実験場に向かってもらいます」

「ああ、まあ気長に待ってるよ」

「ええそうね、気長に待ってる」

ネルの言わんとすることは、彼女たちもすでに経験済みだ。一度大

きく頷いてから快く返事をもらえた。それを確認したのち、ネルは馬車を移った。

「変わらないな」

「ええ」

ネルの去った馬車の中でソーニヤがこぼした言葉にノーナが相槌を打つ。

↓

お嬢様が住まわれる屋敷とはうって変わった造りの建物を前にして、ネルは静かに息を吐いた。一見四角いお豆腐に見えなくもない建物は、最も建設コストを安価により高い質を実現するために考案された建築物だ。降雪が弱点であるため、屋根を温める仕組みが備わっている。

ネルとその部下以外の者達には先に実験場へ行ってもらった。事前の連絡により、ミアはネルが迎えに行くことになっている。なんとも大層ご立派な要求をされたことだと、ネルは思う。

玄関を開け、中靴に履き替え、真つ直ぐにミアのいる研究室へ向かう。中は温度を一定に保つ仕組みがなされており、常にここで働く者達の負担ならないように設計されている。ネルの存在に気づいた幾人かの研究員達は頭を下げ道を開けた。

ミアの研究室は玄関を入れて突き当り右手の奥にある。位置的は最も端っこ、陽の光が一番当たるところだ。

扉の前まで来ると、ふんわりと紅茶の匂いを感じた。ミアは元々コーヒー好きであったが、ネルが苦いものを飲めないことを知って紅茶好きへと変わった。そのくらいミアはネルのことが好きだ。

扉に手をかけようとした矢先、突如扉が開き、短い髪の女性が出てきた。

「やあネル！待っていたよ」

「おはようミア姉」

朝の回覧板でも名が載っていたミア・バルト火砲技師だ。身長はネルより少し高いくらい、髪は火砲を扱う際に火が引火したことがきっかけで短くなった。

扉から見える研究室は、どちらかと言えば普通の部屋のように、流し場周りには火元や様々な調理器具が置かれている。その中に今も湯気を吹いているガラス製の湯沸かしポットと、蓋の開いたティーポットが置かれていた。紅茶を淹れていたんだろう。

「紅茶とクッキーを用意したんだ。さあ入って入って」

「ミア姉待つて」

ネルは制止したものの、ミアは構わずにその手を取って中に引き入られる。ネルはいつもより展開が早いことについていけず、ミアに引つ張られるままに中に入った。

研究室には綺麗に整えられたテーブルがあり、そのうえには色々なお菓子が乗った皿や天秤らしいものなどがあり、二つのカップが向かい合わせに置かれている。

「ネルが来てくれて本当に嬉しいよ。船見に頼んで良い茶葉を用意してもらった甲斐があった。ささ座って座って」

ミアは促すように言いつつも強引にネルを席につかせる。

「この茶葉の最適な淹れ方を見つけてるのは苦労したよ。だけどネルにどうしても飲んでほしいって思っ、どうにか今日までに準備できたよ。あ、そうだ、ネルはチョコレートは好きだったかな？あるものが手に入りやすくなったおかげで、凝った作り方ができるようになってね。」

「ミア姉……」

作業をしながら得意気に話すミアにネルは問いかけるもミアはまるで聞こえてないように話を続ける。時々ネルを見てはいるが、ミアにはどう映るのか、ネルの心配気な表情に気づくことはない。

普段からこの状態に入るとしばらく戻らなくなる。ネルが離れることは絶対にできず、毎度毎度ここに来ると帰る頃は泣いて駄々をこねてしまうのだ。彼女の部下曰くネルが帰って2日後には、いつもの爽快な人へと戻るらしいが。

台所と化した流し場から持ってきたのは、黒っぽい綺麗な四角い物だった。真っ白な皿に均等に並べられたそれからは、ほのかに甘い匂いがしていた。

「実は蜂蜜がたくさん手に入るようになってね。チョコレートに使われる砂糖の代わりに使えたらって思ってたよ。調整が大変だったけど、なんとか形にできたよ。きつとネルが気に入ると思うよ。あ、あとクツキーも色々こだわったんだ、まず……」

「ミア姉!!」

「いつものお……ネル? どうしたんだい?」

いつまでも話し続けるミアを止めるために、ネルは少しばかり叫んだ。普段なら部下が止めに来て終わるのだが、今日ばかりは時間もかけられない。

ネルにとつての救いはミアが止まってくれたことだった。ティーポットに伸ばした手が止まり、キョトンとした目でネルを見つめていた。

「ミア姉、私に来て嬉しいのは分かるけど、今日私がここに来た理由わかるでしょ?」

「……」

ミアは決してネルのことになると、周りには見えなくなるが、決して何もかもわからなくなるわけではない。その頭の片隅には常に研究のことやその日の予定など、しっかりと考えられている。ただ、ネルの登場により全ての優先順位が下がるだけだ。

ネルの問いかけに、ミアの表情がシユンと落ちていく。いつでも笑顔絶やさないミアの落ち込んだ表情は、ネルにとつては心苦しいことこの上なかった。

「ネル、ごめん」

シユンと落ち込んだミアは、先ほどよりも数段小さい声で謝罪を口にする。ネルにとつてはこの状態の彼女はあまり好きではない。それはネル自身、ミアを決して嫌っているわけではないからだ。

「ミア姉、用事が終わったらゆつくりお茶しよう?」

「え、あー、うん!!」

ネルの提案にミアは一瞬で表情を戻した。笑顔になる過程が可愛くつてネルも自然と口角が上がる。本当にミアが自身のことを好きなんだなつと自覚できるからか、無意識に安心する。

「ミア姉、せっかくだから紅茶もらっていい？筒もあるからさ」

「うん、うん、ネルのためにたくさん淹れたんだ。全部持って行ってくれ」

「うん、ありがとう」

うんうんと頷くミアに、ネルは感謝の言葉を送りながら、ポットから筒へ紅茶を移した。ふんわりと香る匂いは、きっとネルが氣にいるものだろう。後で船見にも礼をしておかないといけない。

ミアがネルに大変な好意を抱いているように、ネルもミアのことはそれなりに好きだ。それは彼女が恩人だからとか、師匠であるからとかではなく、人として彼女、ミアのことを好きだからだろう。と、そんなことをネルは紅茶を移しながら思うのだった。